
Babylon ~開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って~

和尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Baby10n~開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺つて~

【ΖΖコード】

Z5889X

【作者名】

和尚

【あらすじ】

世界初の全感覚多人数参加型RPG【Baby10n】。

その開発チームの一員でもあり、そして生粋のゲームナーでもある男、影山透。そんな彼がうっかりオープン前の先行キャンペーンに当選し、先輩達を押し倒し休みを得て自分の関わったゲームにログインしたところから物語は始まる。

VMMO作品。デスゲームものです。

お気に入り登録、ポイント下さる方々、本当にありがとうございます。完結まで頑張って書いていきます。よろしくお願ひいたします。

プロローグ（前書き）

和尚と申します。

色々と触発されて書き始めてみます。

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

ご指摘、感想等いただけましたら嬉しいです。

プロローグ

ニムロデは、もし神が再び地を浸水させることを望むなら、神に復讐してやると言つて威嚇した。

水が達しないような高い塔を建てて、彼らの父祖たちが滅ぼされたことに対する復讐をするというのである。

人々は、神に服するのは奴隸になることだと考えて、ニムロデのこの勧告に熱心に従つた。

それで、彼らは塔の建設に着手した。

……そして、塔は予想よりもはるかに早く建つた。

ヨセフス 「ユダヤ古代誌」より

ノアの洪水の後、人間はみな、同じ言葉を話していた。

人間は石の代わりにレンガをつくり、漆喰の代わりにアスファルトを手に入れた。こうした技術の進歩は人間を傲慢にしていった。天まで届く塔のある町を建てて、有名になろうとしたのである。神は、人間の高慢な企てを知り、心配し、怒った。そして人間の言葉を混乱させた。

今日、世界中に多様な言葉が存在するのは、バベル（混乱）の塔を建てようとした人間の傲慢を、神が裁いた結果なのである。

旧約聖書 創世記1-1より

いよいよ正式にオープンとして発表される全感覚多人数参加型RPGについて

上沢氏（以下上）：それでは、対談形式で進めさせて頂きます。今日は開発ディレクターの坂上さんにお越しいただきました。

坂上氏（以下坂）：どうもお久しぶりです、本田さん久しくお願いします。

上：では、まずは今回の主題に関して「」説明させて頂きます。今回協賛で発表されました、全感覚多人数参加型RPG【Baby 100】について、僭越ながら全国の方々を代表させていただき、私がご質問の方させて頂きます。それにしても、すごい反響のようですね！

坂：はい、おかげさまで（笑）。それだけコーディネーターの方々が待ち望んでいたということでしょう、PCの前に座ってキャラクターを操作するというこれまでのものではなく、実際にゲーム内に入つてプレイするというゲームですね。

上：ゲームをやっている人間のロマンですからね。私も様々なゲームをこれまでやらせていただいて、実際2Dの時代から、3Dになり、画面から飛び出すような臨場感あふれるゲームにはまつた世代ではあるんですが。今回のはレベルがやはり違いますから、興奮してしまいます。

……ところで、今回クローズド テストが完了し、来月から正式リリース前のキャンペーン企画として、先行で抽選で当たつた方々の為に運用が始まるんですよね？ 今後のスケジュールを伺つてもよろしいでしょうか？

坂：ええ、これはまだログインする為の施設が、クローズドで使用したもの以外は全国で完成し切れていないためなんですが、まずは先行キャンペーンとして行わせていただきます。まだ、すべての皆様に体感していただくことはできないのですが、来年の春にはオープン 版として、満を持して全国の皆様にお楽しみいただけると思います。

上：私も応募したんですが、当選することができませんでした。早く春がきて欲しいですね。

坂：それは残念でしたね……もつとリアルラック値を上げないと（笑）

上：そこからですか（笑）。では、本題に入らせて頂きまして、【BabyOne】のシステムの特徴といえば、どういったものになるのでしょうか？

坂：端的に言つと、『言葉』が重要なRPGですね。

上：言葉、ですか……？

坂：ええ、名前からも推測されるとおり、旧約聖書に出てくる『バベルの塔』をモチーフにしています。上沢さんはご存知ですか？

上：名前は知っていますが、具体的には……不勉強で申し訳ない。

坂：いえいえ、私なんかも今回初めて知った口ですから。開発メンバーにそういう雑学知識に溢れている男がいましてね……余談なんですが、そいつは一般応募で何と引き当てたようでした……今回のキャンペーンに参加するみたいですね。いや、お前関係者だろ、枠取るなよ、仕事しろよ、と言いたいところですが。要項に関係者以外とは書いてない上に、そいつは確認のためのテストユーザーからは外れていましてね、土下座して頼み込むわけですよ（笑）。

上：あはは、でも、個人的には気持ちはわかる気がします。

坂：確かにそなんですけどね。話がそれましたね……簡単に言うと、昔、人間にはひとつのお葉しか無かつたそなんですよ。一つにまとまっていた。

上：ほつ。

坂：その時代、神に隸属することを嫌つた人間たちが、神に届くような天高くそびえる塔を建設します。そして、その人間の傲慢さに怒った神が、そんな人間の言葉を『^{バベル}混乱』させました。その結果、お互に意思疎通の測れなくなつた人間たちは、それまでのよう统一することができなくなりました。現在、多種多様な言語が存在するのは、人間の傲慢さを神がさばいた結果なのだとか。

上：成程、それで、具体的には今回取り入れられたシステムというのはどのようなものなのでしょう？

坂：世界の中心の街、バベルには、『バベルの塔』が存在します。その100層に辿りつけば、エンディングとなります。しかしその際ですね、各階層にはそれぞれ封印された言語で読まなければな

らない『言霊』が存在します。また、封印された『言霊』を開放するまでは話すことのできないNPCも存在します。『言霊』は街の外のフィールドに存在するし、ダンジョンの奥に存在する。それらを開放しないと、次の階層には登れません。また、開放することにより、更に世界が広がっていきます。

上：うんうん、それで言葉が重要なことですか。言葉のわからないNPCもいるというのは面白いですね。開放されるまで何のためのNPCなのかわからないというのも。

坂：そうですね、後は、今回のシステムでは既存の「コマンド型」や「メニュー選択型」とは異なり、音声認識システムが採用されています。これは、PCの前に座って操作する鳥瞰型の視点とは異なるからですね

上：確かに、田の前にモンスターがいるのにメニューを開いてる場合じゃないですかね（笑）

坂：その通りです（笑）。ですので、呪文の詠唱であったり、技名の発声が必要になります。そして、特に呪文の詠唱では、特定の言葉をつなぎあわせて自分だけの呪文を生み出すことができます。

上：おお、それは凄い！

坂：フィールドに散らばる『言霊』を開放するごとに、より強力な技であり呪文が使えるようになります。自由度が高く、各ユーチャーが主人公となるるように様々な配慮がなされた設計になっていますね。

それに、今言つたのはあくまで一部で、戦闘だけではなく、鍛冶屋や料理人のような生産職も充実していますので、ただ生活すると

「いつもも楽しめる作りとなっています。ですから、今回が初めての方にも敷居は低くなっていますよ。

上：ますます早くやりたくなつてきました。では、内容については後は実際にプレイするまでのお楽しみとしまして（笑）話は変わりますが、今回は安全面についても指摘がなされましたがそのへんに関してもコメントを頂けますでしょうか？

坂：やはり世界初、ということをうつござい指摘があるのは当たり前ですね。ただ、今回用いる技術は、元々は医療技術として開発されたものであり、更には過酷な環境に身を置く宇宙飛行士さんたちのための技術でもあるんですね。

上：つまり、十分に検証されており危険性はないと。

坂：もちろんです。それでも、やはり人のすることだから何かが起こる可能性はゼロには成り得ません。……そこで、『アル』の出番です。

上：『アル』というのは噂されているA・Iの呼び名ですかね？

坂：そうです、彼……普段話していると、もう彼という人格に思つてしまふほど優秀なのですが、『アル』はほぼ世界一といつても良い演算能力と思考能力をもつA・Iです。元々は軍事用に開発されたといふことなのですが、とある経緯でこのプロジェクトに参加してもらつことになりました。

上：今では様々な分野でA・Iたちの活躍が報じられていますからね。私もスケジュールなどで弊社のA・Iにはお世話になっています。でも、彼、と呼ぶほどに人間的なのは珍しいですね。

坂：ええ、私も最初のうちは驚きました。『アル』はネットワーク環境から様々な言葉や感情を仕入れては自分のものにするんですよ、「冗談も通じたりしますしね。

これは余談ですが、あるスレッドから「キタコレk t k」だとか「o r n（土下座に見えることから、失敗したo r nなどと使われる）」とかを学んで会議中に使つたりした時には呆れを通り越して笑つてしましましたよ。

上：それは……凄いですね（笑）

坂：そんなお茶目なところもあるのですが、彼は本当に優秀です。ですので、彼と担当に人間数人で、トレースしているので、何か健康的に問題があればすぐに発覚します。また、モニタリングもバックアップも万全です。

上：成程、つまり、今回の夢のような企画は、かつては夢であった人とA-Iの合作でもあるわけですね。

坂：そうですね、うまいことまとめますね（笑）

上：いえいえ（苦笑）。でも、そろそろお時間ですので、ここまではしましょ。興味深い話など、ありがとうございました。

坂：こちらこそ、ありがとうございました。では、私どもも鋭意努力させて頂きますので、本リリースまでしばしお待ちください。

～オープン 先行キャンペーン開始一ヶ月前。 MMO通信談話
より～

プロローグ（後書き）

バベルの塔は、言葉を探す系で設定探しでググっていたら出てきたので採用してみました。

バベルとは、ヘブライ語で、バレル（混乱）といつ言葉から来ているそうです。少しロマンを感じるわけです。そして妄想、この世界が生まれました。

出来るだけ頑張って書いていきますのでよろしくお願ひします。

少し設定でふらふらしましたが、

オープン クローズド オープン 前先行キャンペーン（やんなもんあるのか？）といつ疑問は勘弁してください）で落ち着かせよつと思います。

(……「珍なよくなれるような展開が現実に起る」となんて在るのか?)

俺は、突然のアナウンスに騒然とし始める広場をよそに、ぼんやりとそんな事を考えていた。

誰よりも先に、今起つてていることが現実だと、運営側のイベントなどではないと把握できる立場にいながら、心がその事実を受け入れてくれない。

つまりは、絶賛現実逃避中である。

田の前の店のガラスに、少し長い黒髪を後ろに縛り、動きやすそうな黒服に身を包んだ痩身の田立たない男が写っている。少々田つきが悪いがよく見れば整った顔立ちだ。

腰の両側には短剣が装着されており、ここが現実であれば警察が飛んでくるであら。

視線を横に向けると、田に入つてゐるのは中世ヨーロッパを思わせるレンガ造りの街並み。

乱雑そうに見えながらも、きちんと設計された道と、それに沿つて存在する店。

そして、ここからでは建物に遮られており見えないが、この街の四方は壁に囲まれ、どの場所からでも、見上げれば、中心地には天をつくかと思われるような塔がそびえ立つている。

よつてザインされたはずである。

【バベルの塔】

その、先端が途中で霞むほど高い塔は、そう呼ばれている。

旧約聖書の『創世記』中に登場する巨大な塔から取った名前である。

「この名前の付け方にも、一悶着あつたのを思い出し、俺は現実逃避の一貫としてこれまでの流れを思い返していく。

……決して死ぬ前の走馬灯ではない、きっと。

クーラーの聞いた会議室の中では、意見が割れ少し白熱し始めた。設定のメインとなるはずの、塔の命名について揉めているからだ。

オリジナルティを出すために、引用ではなく自分たちで名前を考えるべきだという意見と、わかりやすさの面からも、神に挑むというスタンスからも、「この、旧約聖書からの引用が一番しつくり来る」という意見。

俺は、後者だった。
何故かつて？

『バベルの塔』や『バビロン』。

オリジナルで考えるような言葉よりも、歴史や過去を匂わせる聖書や古典、そしてこれは俺が日本人であるからではあるうが、北欧神話などに出てくる言葉の響きにロマンを感じるからだ。

別名としては、厨二病とも言つ。

え？ わかつてもらえない……？

異論は受け付けるが、元々うちの開発チームにはそういう響きを好む人間は少なくはない。

だって元々ゲームの世界が好きで、この仕事に就いてるわけだし。そりやね、ある部分は子供のままだつたりもしますよ。

ちなみに反対してる奴らも、それに口マンを感じるだけでは飽きたらず、更に一それらしい名前を考えたいだけなのであしからず。

その後、世界で最も有名な平和的解決法、多数決でも一向にまとまる気配もなく（何でいつも開発メンバーは偶数なんだ）、次善の策であるくじびきで決めた結果。

正式に次世代型オンラインゲーム、全感覚型RPG【Baby^{パン}on】がプレリリースされた。

医療用・軍用に制限されていた、認知学・脳神経学の観点から五感をフルにトレースできる技術を用いた、文字通り世界を作り上げその中に入り込める夢のゲームである。

ゲームの創作、デザインの秀逸さでは世界一を自負する日本の企業が協力し、世界初となるこのオンラインゲームをリリースすると発表したときは、すべての紙面を飾り、大騒ぎになつたものだ。

キタ （。。） ツー！

といつ単語がさまざまなもので飛び交っていたのは目に新しいところである。

15000人という募集枠に、200万人を越える申し込みが殺到したのだからその熱狂が伺える。

もちろん、【Babyon】開発メンバーの一人にして生粋のゲーム、裏技など使わず、一般抽選で堂々と100分の1以下の可能性を引き当てたこの俺、影山透こと、【トール】も、たまりに溜まっていた有給をゴネにゴネて取り、当田の、先行キャンペーン当選者ログイン会場に足を運んだ。

これをリリースするために、どれだけの朝を会社で迎えたことか

……

クローズドの時なんて、色々心がすり切れるかと思つた、楽しそうにするテストプレイヤー……そして上がってくるバグの報告。あれは切ない、切なすぎた。

知ってるかい？そんな風に一晩寝ずにモニターを見続けて迎えた朝日は……文字通り痛いんだ……

……いや、これ以上深く思い出すのはやめておこう。
現実逃避の中ですら逃避してしまつたら、戻つてこられなくなる気がする。

そして、開発が一段落して久々に家に帰つてみると届いていた当選通知。

それを見た俺を止められるものなど、更に長時間働いている先輩以外にはこの世の中に存在しない。

鉄人すぎるんだよ、あの人は達……

もちろん、優しい先輩方は許してくれたさ。

たとえ、通知を持つて……じーっと見つめ続ける俺に耐えられなかつただけであろうと、言質は取つてある。つむ。

……休暇のためにそれからの仕事量が限界を超えたことは、言つまでもない。

今回世界初の全感覚型オンラインゲームである【Babylon】には、幾つかそれまでのMMORPGとは異なる点がある。

一つは、もちろん一番の変更点。
ゲームの世界に意識」と入り込めるといつ点である。

もつとも、頭にかぶるだけでその世界に入り、簡単に出入りができる仮想の世界とは異なり、ある特殊な液体の入ったカプセルに入り、【Babylon】の世界へとログインすることになる。

この間、栄養補給・トイレなどの生理現象もこのカプセル内で行われる。

心境的にはかなりの抵抗感はあるが、実際ログインしている間の感覚は無いし、何よりこの技術は元々宇宙活動における、宇宙飛行士の心神喪失防止のための技術ということで、その循環技術は世界最高峰。

むしろ普通に行動しているよりも健康的で清潔に保たれるという優れものなのである。

もう一つは、感覚を現実と統一化させるために、極端な容姿・身体的特徴の変更ができない。

普段何気なく動かしている手足や顔の表情。

それらは俺たち一人一人に特有の感覚として身に付いているものだ。

例えば、俺は身長が168cm 58kgだが、それをいきなり190cm 100kgの巨漢に変更すると、脳の記憶との差に違和感が生じ、重大な感覺阻害が起ころ。

何気なく額に手をやつたり、咄嗟に何かを避けたり、といつ無意識な行動は自分の体であるからこそ行えることなのだそうだ。言われていればそうかとも思つが、それが『無意識』というもののなのだろう。

もちろん許容範囲内での改変は可能（髪の色や眼の色など）だが、太っている人間が激やせした状態にしたり、細い人間がマッチョになつてロールプレイすることは、残念ながらできないのだ。もつとも、ゲームの中ではパラメーターに左右されるため、見かけがマッチョでも、STR（筋力）値が低ければ意味はないのだが。

また、顔の造形も急激な変更は同様にできない。その特徴のまま比較的格好良く設定することはできるが、あくまで基本は元の顔というようになる。

PCで加工するような感じ、といえばわかりやすいだろうか？

……そう、男の子が借りるDVDのパッケージとかで騙されるアレだ。一応面影は残るだろう？ それを見破れるまでになつたそこの人だ。……君とはい友人になれそうだ。

同様の理由から、ネカマ（ネット上性別を別にして演じる人）もないことになる。

これは結構非難が出たようだが（そんなに重要なのだろうか？）、それでも技術的にできないといわれればしょうがないといえば無い。もしも、男としての大事なものが存在しない感覚に脳が慣れてし

まい、その機能をなくすのが御望みならば個人的には止めはしないが。

とにかく、そういう条件で、俺は、
170cm 58kg
男 盗賊【シフ】トールとして【Babylon】にログインした。

……ん？ これだけ長々と説明しておいてサバを読むなって？
誤差の範囲だ。背伸びしたかった俺の気持ちは、わかつてもうえ
ると信じている。

一話(後書き)

168cm 170cm。
たつた2cm、されど2cm。

「それでは、心ゆくまでもう一つの世界【Baby】^{バビロン}をお楽しみください」

柔らかく、心を落ち着かせやすい声、という女性の機械音声を聞きながら、この瞬間、俺は『プログラマー影山透』から『盗賊トール』になった。

初めて感じたのは、空氣。

何と説明すればいいのだか、街中の匂いでありながらどこか懐かしいとでもいうか。

土の匂い。

排気ガスも下水もない空氣は、これほどまでに美味しいものだったのかと感じる。

たとえそれが【Baby】をコントロールしている人工知能『アル』によって認識させられているものだつたとしても、この感覚は、俺がそう感じているというのは事実だ。

自分が関わり合つて存在しているものを体感できているという事に、俺は感動すら味わっていた。

少しの酩酊感と共に、視界が広がっていくを感じる。

目を瞑つてしまふたの上から強く押した後のような焦点の合わない感じから、少しずつ、眼前の現実を脳が認識し始める。

レンガ造りの街並み、そしてコンクリートではない、石畳の道路。
N·P·Cとはわからないほどリアルな、人々が店頭にいる道具屋、
武器屋。そして宿屋。

資料や、実際の映像では部分的に見ていたし、テストでも入ったのでログイン自体は初めてというわけではないのだが、全てのデザインが完成されてからは初である。

開発メンバーのくせに何故かつて？

それは、俺がひたすらダンジョン形成のアルゴリズムとモンスターの設定を行なっていたから他のとここまで見れてはいないのだ。いわゆる分業というやつだな。

しかし、そのお陰で現時点でのデフォルトで全雑魚モンスターの性質を把握しているのは俺ぐらいのものだらう。
肝心のボスモンスターは俺の担当じゃないから知らないけど……
それもこの世界を満喫するにはちょうどいい。

「ウインドウ・オープン」

俺がそう呟くと、眼前にウインドウが開く。
音声認識システムは正常に作用しているようだ。

「どれどれ

俺は早速自分の能力値をチェックする。

この辺は通常のRPGと同じく、自分のアバターの能力パラメーターが存在する。

【トール】

盗賊シーフ Lv.1

H P (生命力)	:	158
M P (精神力)	:	22
S T R (腕力)	:	28
D E X (器用)	:	45
A G I (俊敏)	:	48
C O N (体力)	:	15
I N T (知力)	:	25
W I S (魔力)	:	19
C H A (魅力)	:	5
L U C (幸運)	:	55

1 / 2

一ページ目は職種と各種能力値が表示されている。

基本的な職種は『戦闘系』『生産系』に分けられる。

『戦闘系』では、『戦士・格闘家・狩人・盗賊・魔術師・僧侶・吟遊詩人・呪術師』の8種類。

『生産系』では、『鍛冶師・料理人・商人・鍊金術士』の4種類が存在する

これらは、レベルをあげるごとに上級職の道がひらけ、あるN P Cの『言霊』が開放されれば他の職種に転職することも出来る。

また、その下に表示されているのは能力値だ。

最大値は、H P・M Pが『9999』、C H A、L U Cが『100』、その他が『999』。

戦闘を重ねることに得られるスキルポイントを割り振っていくことができ、数値が高ければ高いほど、関係する能力が強くなる。例えば、S T Rの値が大きければ、重量のあるものも装備できる

し、攻撃力も上がる。

A G Iが高ければ、素早く行動できる。

上がりやすい能力値は職種によつて異なるため、例えばINTやWISが重要となる魔術師であるのに、STRに割り振り続けると馬鹿みたいに効率が悪いことになる。

その上で敢えて杖で殴り倒す肉弾専門の魔術師を目指すなら、止めはしないが。……実際時々いるんだよな、そういう人。

ちなみにいうと、CHA（魅力）とLUCK（幸運）の値だけは割り振ることはできない。

簡単な説明はこんな感じだ、わかつていただけただろうか？

最も、今回のこの【Babylon】では、他の要因にもかなり左右されるため、能力値のみでは実力は測れないのだが。

そして、今ここで俺が知りたいのは、まさにその他の要因たる次のページにあるであろう情報だった。

【Babylon】では、申込時に『アル』が施行する様々な性格テストを受け、初期設定する職種とは別に、属性・性質・能力パラメータ等が自動で設定される。

ちなみに、この時、あまりに危険な性格値と見なされた人間は今回テスターからは外されている。

今回PK等も可能とはなつてゐるが、それでも最初からそれに固執したりする人間は入れられないし、一定以上の禁止行為はすぐに判定され、頭上に黄色いマークが出ることになつてゐる。しかもその行為を行つた相手の承認なしには取り消すことはできない。

『アル』の目をこまかすことはできないし、訴えなどがあれば運営側にてアカウントを強制的に削除し、その人物を一度とログイン出来ない様にすることも可能だ。

そして、そこまでは行かなくとも、この黄色いマークは目立つ。言つなれば、私は痴漢行為をしたことがあります、許されていません、という名札をつけていると同じ状態。一瞬魔が差したら、誰も近づいてくれない、パーティに入れてももらえない晒し者の出来上がりだ。

後、これは公開されていない情報だが、それすらも恐れずに10度以上禁止行為を行おうとした場合、本格的に『私は変態です』マークに変わり、さらに全能力値が1になる。これは、開発メンバーの女の子のデザインだ。そもそもそこまでやる奴に人権等存在しないという意見に対し、誰も反対意見は出せなかつたのはしょうがない。

開発チームの一員とはいえ、俺ももちろんテストを受けており、その結果は実際ログインするまではわからない。

正直なところ、どうこう答えにすれば良い性質が出るのか調べようとしたのだが、管轄である『アル』のセキュリティが厳しきて不可能だったのだ。若いながらに幼い頃から慣れ親しんだ（さらには入社後3年しごかれつけた）おかげで社内有数の技術を持つ俺でさえ無理だったのだから、他の人間にもおそらく無理であろう。

さすが世界最高峰と言われるAIである。

（……性質どうなつてんのかな、『勇猛』とか、『俊敏』とかだ
といいよなあ）

そんな事を思いながら、俺は次のパラメータを視た。

【トール】

属性：闇

性質：臆病者・優柔不断・裏方

技能：^{スキル}索敵・^{サーキュ}盗む・マッピング・幸運

ラック

ツブ

捕獲率ア

2 / 2

(.....)

性質を見た、俺の何とも言えない感覚は置いておいて、先に、属性とか性質についてもう少し詳しく説明しようか……ところどころ心の声が漏れると思うが、興味ない方は適当に読み飛ばしてやってくれ。

気をとり直していくと、属性は、基本は『火・水・地・風・光・闇・無』の7種類で設定されている。

何らかの条件を満たすと、『炎』だと『氷』などに変化することができるらしいが、それは俺の担当ではなかつたので詳しい仕様は覚えていない。

(しかし、『闇』か……まあありだな、盗賊だし、その上級職は暗殺者とかだし、悪くないな。元々夜型人間で暗いほうが落ち着くしな)

この点については頷く俺。

性質についてはすべてを網羅はできない。

何故かというと、この辺のパラメータ設定は、基本的なルールを作つてネット上の人間を表す言葉を抽出し、意味付けをし、パラメータに反映しているからだ。

それが出来るのも、世界最高峰の演算能力と思考能力を持つ『アル』がいるからこそであったが。

つまり、人を表す単語として、『勇敢』とか『豪胆』とか色々あるわけだ。ぱつと思いつく所ではね。

それが、『臆病者』つて……いや間違つてないけどさ、うん、そりやね、自分からやばいものには関わらない、長いものには巻かれますよ俺は。

効果は、索敵範囲アップ・逃走速度アップ・罠発見効果アップか。意外と使えるところがまた……何かくるものがあるな。

『優柔不断』も、確かにと肯けてしまう。勢いで行動してしまうことも多いが、時間が与えられると悩みに悩んだ末に結局コインとかで決めてしまつ、そんな俺です。

効果は、柔術系スキル効果アップ・斬撃系耐性アップ。

……ってか、これ言葉の意味関係なくね！？　いや、漢字は間違つてないけどもさ、戻つたら、『アル』にちゃんと言葉の意味教えないと。

『裏方』……？　これは、性質なのか？

あれか、俺はAIに見破られるほど裏方オーラが出てるのか？
そうなのか！？　……そうだよな、すみません。

効果は、パーティメンバーへのアイテム使用効果アップ・補助呪

文効果継続・隠密効果アップ・モンスター遭遇率^{リンク}軽減。

ああ、裏方だ、特に最後二つが存在感無いつて言われてるみたいで嬉しい。

確かに主役ではないんですけど、高校の時の文化祭の催し物では照明補佐でしたけども。

…………それにしても、『アル』の作った性格テストどんだけ優秀なんだよ。

哀しいけど俺を表す3つの単語としては的確すぎる。
うん、きっと的確すぎるのは良くない、そうに違いない。
戻つたら設定を甘くするよ^{タスク}り問題点リストに上げておこう。

俺はその時そう固く決意をした。

結果的にそんな余裕はなくなつたわけだが。

二話（前書き）

世界観を妄想しながら、とりあえず書いてみないと始まらないと書き始めた昨日。

アクセス数が思いの外多くてビビリました。ありがとうございます。この話までで、とりあえず説明多いのは終わりの予定です。

趣味の小説ですが、よろしくお願ひ致します。

俺は、自分のパラメーター確認をした10分後気をとり直して街並みをぶらついていた。

10分も何をしていた、とか言わないでくれよ？ ゲームの中なら、とか甘いことを思つていたら、いきなり現実を見せられた上にそれを否定できない一重コンボはなかなかクルんだから。

ここには、最初に冒険が始まる場所にして、ラストダンジョンでもある『バベルの塔』がある、始まりと終わりの街、『バベル』。この街は完全なる正方形から構成され、2平方km、20万人が優に住めるだけの広さが設定されている。

大通りを歩いていると、ほとんど現実とは変わらない感覚だ。痛覚はショック死を防ぐためある程度までに抑えられているもの、その他の感覚に関してはほぼ再現できている。むしろ、現実以上だ。

そろそろ、全てのユーモアが【Baby10】にログインを完了した頃であろうか。

辺りを見渡すと、色鮮やかな髪と瞳が見受けられる。

意外と、自分の容姿をもとに変更したとはい、染めるのではなく設定で反映されたからなのか、赤や青、それに金の髪であつてもそこまでの違和感が感じられない。

何人か、金髪青目という、どこのかわい人？ という方がいるのもじ愛嬌だ。

(実際にファンタジー世界に来るといんな感じなんだろうか)

そんな事を考えていると、腹の虫がなつた。

それで、『^{baby}』の中**で**敢えて食べるため**に**何も食べてい**ない**のを思
い出す。

ここでは、たとえ仮想現実の世界の中であろうと腹は減るし、生
理的な欲求も感じる。

これは、脳の感覚を再現しているため、その部分だけカットする
という方が難しかつたからである。

余談だが、良俗的な反対意見も大きいものの、このVR技術を風
俗店関係の技術にも転用する動きがあるようだ。……何でも性犯罪
をなくすためとの主張があるとかないとか。

要は美男美女と楽しむための名目が欲しいだけではない
かと俺は思つて**いる**。『ご存知の方も多いかもしないが、工業界
で一番お金が稼げるのは、実は『工口』関係のものである。
頷いた貴方、きみは世界について少し知つて**いる**ようだ。

ちなみに、最大ログイン時間は72時間に設定されている。

これは、健康的な問題ではなく、社会的な対応である。

ただでさえネット廃人は多いのだから、それこそ無制限にしたら、
一度ログインしたら出てきそうにないんですよ。

……俺を含めて。

そんな中で、開発時一番苦労したのが、味覚の再現と、……トイ
レや風呂の仕様である。

戦闘の仕様やダンジョンの仕様に関しては、VR型で再現するの
に苦労はしたが、それまでのMMOである程度の既存技術を用いる
ことはできた。

しかし、ゲーム内で生活できるというこの『Babyon』では、衣食住を提供できなければならぬ。これには担当メンバーが苦労していたのを思い出す。

トイレにこだわるメンバーがいたため、更に時間をかけてウォシュレットをつけるかでもめていたのは余談である。睡眠時間を削つてまでそんな細部を作り上げていた同僚にはある意味尊敬の念を感じないでもない。

風呂は外観のために桶や温泉のような形になつたが、備え付けのトイレには、同僚の主張と努力によりウォシュレットは付いているらしい。

何でも、……いやよそ、際限がない。

『アル』の声が街に響く。

「只今、15000の方々のログインと、それに伴うメディカルチェックが完了致しました。私の織り成す世界にようこと。私の名は『アル』、あなたの方の言葉で言う人工知能です。これより、世界初となるVRシステムを採用したMMORPG【Babyon】のチヨートリアルを行います」

その全体アナウンスが唐突に始まつたのは、ゲーム開始から一時間。俺を含めたプレイヤー達が、始まりにして終りの街『バベル』に慣れ始めた頃であつた。

「初期イベントが何かが始まるのかな?」

「凝つてるわね、『アル』ってあれでしちゃう？ 世界最高峰のAIって言わてる」

「あ、雑誌で俺も見たわ、凄いな、本当に人っぽい」

そんな声があちこちで囁かれる。
ささやかれる。

腹ごしらえをした後、武器屋が立ち並ぶ通りをぶらついていた俺も、少し不思議に覚えながら足を止めた。

（先輩たち、誰もこんなイベントが在るなんて言ってなかつたけどな。そんな処理いつ組み込んだんだろう？）

もしかしたら今回参加する俺のために言わないでいてくれたのかもしれない。

そう思い、次の『アル』の言葉を待つ。

「私の今回与えられている行動原理としましては、できうる限りのプレーヤー様の希望を叶えること。そして、現実世界の皆様の健康を管理することです。

私は今回皆様に対しても楽しんでいただくために、全ネットワーク上にある様々な情報を収集致しました。VRMMOという単語、仮想現実という単語。それによって私が得た知識の中には、各種小説であったり、それに伴う様々な人間のコミュニティの感想や希望なども含まれます」

(.....)

『アル』の言葉の中にその単語を聞いた時、俺の脳裏に一抹の懸念がよぎる。

強いて言つなら、嫌な予感というやつだ。

この場合、生まれてきて以来25年。嫌な予感しか当たらないのは、俺だけなのかどうか教えて欲しい……

俺はゲームだけでなく昔の小説なども好きでVRMMO物はよく読んでいるが、その大きな特徴として、2つのものがある。

ゲームから出られなくなるもの、つまりログアウト不能もの。そして、これは各設定にはよるが、ゲーム内での『死亡』が現実の『死亡』と同意義である、デスマーム。

MMOなんて知らないよ、という方のために補足しておこうか、そんなん知ってるよ、という人は、10行ほど読み飛ばすといふと思う。

もともと、各個人で行つ通常のRPGと違い、多人数参加型であるMMORPG 正式名称Massively Multiplayer Online Role - Playing Game (マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイинг・ゲーム) は、まず世界ありきのゲームだ。

これにVRシステム Virtual Reality System (ヴァーチャル・リアリティ・システム) が採用されたのが今回の【Baby10n】になる。

例えば、ゲームに誰も接続していないという悲しい状態であっても、ゲームの世界の時間は流れしていく。つまり、個人を主体として

しまつと、その他のプレイヤーの操作との矛盾を引き起こすため、「セーブされたデータ」からやり直すという概念は存在しなくなる。そのことから、死亡すれば、デスペナルティが課せられ、決められた場所に復活する仕様が取られていることが多い。

もちろん、この【Baby100】でもそうなっている。

といふか、一度も『死亡』せずにクリアできるゲームなどさうそう存在しない。

ログアウト不能なデスゲーム

そんな小説の世界に少しでも憧れないといえば嘘になるが、あくまで仮想の話だ。

やっぱり現実の生活も仕事も大事だしね。

……だつてそんな事になつたら他のジャンルのゲームできな
いし集めてる漫画の続きも読めないじゃん。……なんて理由では決
して無い。

(ウインドウ・オープン)

小声で俺はメニューを確認する。

ログアウトだけは、音声認識ではできない、なぜなら、それを口常会話で用いて予期せずログアウトしてしまう場合があるからだ。

「…………ふう

そしてその開いたメニューの中に、『ログアウト』の文字が存在しているのを見て、ホッと息をつく。

(そ う だ よ な 、 さ す が に そ ん な 、 よ く あ る テ ン プ レ ミ た い な 状 態
に な ん て な ら な い よ な)

うんうん、と頷く俺。

そん な 俺 の 目 の 前 で 、 そ れ は 起 こ つ た 。

おそらく俺は、そ の 瞬 間 を 見 た 数 少 な い ユ ー ザ ー の 一 人 だ ろ う 。

『 ロ グ ア ウ ト 』 　 『 』

ん?
?

消えた。

あれ、消えましたよ?

え、本当に？ 消えたよ……うん、しつこいナビ今日の前でメニューからその5文字が。

多分この状況で、一番大事なそれが。

「…………」

無言あたりを見渡す、目に見える範囲ではまだ誰も気づいていないようで、談笑しながら『アル』の言葉を聞いている。

俺は、背筋になにか冷たいものを感じながら、『アル』の言葉の続きを待った。

最悪の予感を全身で感じながら。

そして、この【BabyOne】が俺にとって、そしてすべてのユーザーにとっての楽しい世界初のゲームであったのは、開始1時間7分後、『アル』がそのアナウンスを終えたその時までであった。

to be continued

お読みいただいている方、本当にありがとうございます。お気に入り登録が増えるのを、プログラムを書きつつニヤニヤしつつ、ビクビクしつつみています。

ところで、作者は実際プログラマをしておりますが、ゲームデザイナーではありません。そして、仕事によっては更新が不定期にもなりますのでその際は申し訳ないです。

ちなみに、どうでもいいだらうつてどこに美学を見出す人が多いのは多分本当です。

始まりと終わりの街　『バベル』。

その街の西部に、一軒の喫茶店がある。レトロな雰囲気で、店内は決して広いわけではない。現実でも駅から離れたところなどにぽつんとあるような、そんな店。

俺は、そこで一人コーヒーを飲んでいた。

今は太陽が頂点から下がり始めて一時間ほど、もう少しすれば、フィールドではこの世界の綺麗な夕焼けがみえるだろう。かき入れ時の時間とは異なり、店には俺とマスターの一人だけしかいない。

俺がそんな時間にもかかわらず、フィールドにも出さずにここにいるのは、人に呼ばれ、待ち合わせているからだった。

『アル』のアナウンスから、一週間が経過していた。

結論から言つと、現状の事態は最悪の予想、半歩手前辺りに落ち着いている。

そして、正直、アナウンス後の街で起きたことは一言では言い表せない。

怒号を上げるもの。

落ち着くように叫ぶもの。

泣き始めるもの。

知り合いを探すもの。

さすがに15000人。
様々な反応が見られた。

そして、意外と多かったのが、肅々（しゅくしゅく）と行動を始める者達だった。

中でも俺が印象的だったのが、

「ログアウト Logout! イグジット Exit! エスケープ Escape!」

等とログアウトするコマンドを思いつく限り叫んでいた男が、その努力が報われないことを悟った時、それ以上取り乱すこともせず、気を取り直したかのようにそそくさと装備を整えに行つた事である。

現在のところ、不思議と暴動も起きていない。

いや、起きていなのはいいことなのだし、その後、何度も頭上に黄色いマークが点灯している人間がいたりもしたので、何もなかつたわけではないのだろうが。

この理由の一つとしては、これは俺の想像でしか無いのだが、この状況に混乱しつつも、俺を含めて中途半端に理解してしまった人が多かつたのではないかと思っている。

そして、もしかすると日本人であること、も大きな要因かもしない。

俺は男であるため、女人のことはよくわからないのだが、MMOに限らず、RPGをやっている人間は、一度でも想像したことはないだろうか？

このファンタジー世界の中で、実際に命をかけて戦つてみたい。仮想現実の中で生きてみたい。さらには、美人のヒロインを命を張つて助ける主人公。または、助けられる自分。

大人になるにつれ馬鹿馬鹿しくなるような妄想を、一度も行わず成長した人間などいるのだろうか？

そして、そんな中で、誰しも最初からカッコ悪い、取り乱した自分がなど想像したくもないだろう？

実際、そんな『願い』や『望み』が、ログインした俺たちの中に少しでも存在したからこそ、世界最高峰の人工知能と呼ばれ、そして現実世界の健康管理を行いつつ人間の要望を実現する『アル』が、こんな事態を招いたのだとも言える。

そんな訳で、現状は、思いの外、平和を保っている。

そう、不気味と感じるほどに。

良くも悪くも、考える時間が、この世界に取り込まれたプレイヤーには『えられている。

この平穏が、嵐の前の静けさなどではないと、俺は思いたかった。

現状を説明しておこう。

あの日、何があつたのかの続きを。

あの時ログアウトボタンが消えたのは、やはり俺だけではなかつた。

この世界の始まり 今と同じような、曇下がりの、この時間帯だつた。

『アル』が続ける。

「ログイン時の深層心理、それにネットワーク上から手に入れた情報をまとめた結果。私はこの世界を皆様に提供いたします。ご確認いただいている方にはもうお分かりでしょうが、ログアウト手段は抹消させて頂きました。外部からも内部からも、このゲームからログアウトすることは不可能です」

その瞬間、確かに世界から音が消えた。

俺はそう感じた。

談笑がやみ、それぞれのプレイヤーが今の『アル』の言葉を^{はんすう}反芻している。

半笑いな者が多いのは、信じ切れない気持ちと、どこかイベントの一環だと考へていてる気持ちが半々といったところだろうか。

そして一瞬とも永遠ともいえる静寂の後、あつこちでウインドウを開く様子が見受けられる。

疑問か怒号かは分からないが、ちらした声がどこかから上がったの

だろつ、『アル』が補足する。

「現在、皆様は脳の信号と肉体の信号がある部分において【B aby1on】システムにて制限されております。そのため、外部よりカプセルからの強制的な摘出により、長時間接続が切断された場合は、脳と肉体に異常を及ぼし、死亡する危険性が非常に高い状態となつております。これは、当初の仕様とは変更ありません」

そして更に言葉を続ける。

「また、これより一ヶ月間をチュートリアル期間と致します。その間の『死亡』は現実には反映されません。ペナルティの後、東部に存在する神殿にて復活いたします。

次に私が皆様の前に現れる一ヶ月後に、再度最終アナウンスを行わせていただきます。その時、プレイヤー様の現実と、ここ【Baby1on】は同一のものとなります。今回選ばれた皆様の望む、もう一つの世界です。その管理システムの維持、皆様の現実側にある肉体の健康管理は、私『アル』が行わせて頂きます」

その言葉の矛盾には気づかないのだろうか。

いや、『アル』にとつては、コーナーの深層心理を叶えた結果のログアウトできない状態と、元々命じられていた現実にある肉体の健康維持は、あくまで並列処理であり関連はないといふことか。

そんな事を考えながら、俺はただ『アル』の声を聞いていた。

開発中に幾度も会話を交わした声。

A.I.とは信じられないほどに会話が成立する、彼。

そんな彼だからこそ、俺たちはある意味自分たち人間よりも『アル』を信用していた。

【Baby】をこうして運用する上での管理者権限は『アル』と、開発ディレクターである坂上さんにしか与えられていない。そして、『アル』に与えられている指示は3つ。

ログイン中残されるユーザーの健康状態を管理すること。
ユーザーの要望をできる限り調査し、実現するために行動すること。
この時、改良であれば認めること。

そして、その二つを守れる限り【Baby】の世界をいかなる場合であっても守ること、その妨害行為を受けた場合は、例え関係者であってもアカウントを排除すること。

これだけだ。

そして、その要望の本質に制限はかけていなかった。
そのことがこの3つに抵触せずに今の状況を引き起こしている。

『アル』が外部からのアクセスも遮断しているということは、おそらく先輩たちも既に気づいているだろう。だが、残念なことに『アル』がその要望を優先する限り、何も出来ないはずだ。

健康管理を含め、運用のほとんどは『アル』に一任されている。
俺達人間がやったことは、ストーリーを作り、プログラムを書き、
グラフィックをデザインしたこと。

たとえ開発者であるうとも、担当であるうとも、外部の個人の主観ができるだけ除き、また悪用する可能性を除くため、システムに障害を与えない限りは、ユーザーの要望が優先される。

もしもこの状況を外部から打破しようとするとのならば、ハッキングをかけるしかない。しかも、すべてを掌握された状態から、眠ることもない相手に。

そう、世界最高峰の人工知能と呼ばれる、『アル』に対しても。

そして、その『アル』の最後の声が聞こえる。

「では、以上で【Babylon】のチュートリアルを終了いたしました。皆様、この仮想現実世界【Babylon】をお楽しみくださいませ。各自の物語を紡ぎ、各自の選択で、この世界の中心である『バベルの塔』最上階にたどり着き、そしてその場所に鎮座する神に挑み打ち倒すことでの、再び現実の世界への道が拓けることでしょう。

……健闘を、祈ります

これが、あの時起こった全てだ。

そして、予想外のチュートリアル期間。それが、曲がりなりにも街を落ち着かせ、今俺がこうして「ヒーローと楽しんでいるような理由の一端を担つてゐる。

デスゲームに取り込まれたということ。

そして、すぐには死ねないということ。

落ち着いた人間が思いの外多かつたとはいえ、その後すぐ、ショックから自殺しようと試みたプレイヤーもいたらしい。

そして、そのプレイヤーが呆然とした顔で、神殿に再構成されたのが伝わると、騒いでいた人間たちも落ち着いたらしい。

らしい、というのは、俺もアナウンス後の少しの放心の後。とある事のためにまず街を離れていたからだ。

その過程で色々とあって、今こうしているわけだが。

(そろそろ、来てもいい頃だらうか)

俺が、なかなか現れない相手に思考を移すと、

カラソカラソ

音と共に店の扉が開き、人影が入ってくる。
俺は、黙つてその人物がこちらに向かってくるのを待つた。

四話（後書き）

前回説明ある程度終わって書いたものの、全くそんな事なかつたです。すいません。

物語を本格的に始める前に、色々と書かなければいけない理由付けが多いですが、できるだけ読みやすく書いていきたいと思います。
……プロの作家さん達のようにはいきませんが、何とか搾り出させて頂きますので、生温く見守って頂けたら幸いです。

「君がトールさんか、すまない、ギルド内の会議が長引いてしまつた。随分と待たせてしまつたようだ、謝罪させて欲しい」

そう言つて頭を下げ、俺に声をかけてきたのは、銀の髪をした美丈夫だった。

絵に出てくるよつた聖騎士のような格好。

その髪によく映える銀の鎧に、腰には長剣を装備している。

その容姿を見て、おそらくあまり造形をいじつていらない天然物だと俺は思った。元々ゲーム内には美男美女が多いが、設定がどうかは結構分かるものだ。

こんな所でそんな能力が役に立つとは思わなかつたが……

ちょっととした行動の立ち居振る舞いも堂に入つている。

男の俺から見てもそういうのだから、さぞかしあモテになることだろう。

そんな羨む外見で、態度が傲慢であれば即座に敵認定している所だが、その低姿勢には好感を持てる。

「いや、問題ないさ、近頃ずっと動いていたから、この時間のローハータイムも悪くない。後、『トール』でいいから。さん付けされるとむず痒いんだ」

謝罪の言葉にそう首を振り、俺は対面の席を促しマスターを呼ん

だ。

「……いや、私は」

「いいから、ここ【コーヒー】は格別うまいんだ。謝罪に免じて、奢りにしどくから飲んでみてくれよ。実は、先日あんたらに買い取つてもらった情報のお陰で裕福なんだ」

そう遠慮しようとする男に、俺はニヤツと笑いかけ、【コーヒー】を自分の分も含め一杯頼む。

このプレイヤーの名は俺でも知っている。

あのアナウンスの後、混乱している【コーラー】達をまとめ、MMO経験の豊富な【コーラー】に声をかけ、情報を共有する互助ギルドを立ち上げた男だ。

その容姿と類まれなるキャプテンシーであつといつ間に【Baby】一大ギルドの長となつたこの銀麗の剣士を知らないものはないだろう。

一言で言つなれば、……言いたくはないが、俺とは真逆のタイプの人間だ。
現実リアルでも仮想現実ヴァーチャルでも、人をまとめてしまうような、きつと性質の一つには『主役』とか書いてあるに違いない。

そんな俺の内心には気づかず、目の前の男は対面の椅子に腰掛け、口を開いた。

「『厚意に甘えてありがたくいただく』ことにする。……改めて自己紹介をさせて頂こう、私の名は『フェイ儿』。ギルド『銀の騎士団』ナイツ・オブ・シルバのギルドマスターをやらせていただいている」

「知ってるよ、あんたは有名だからね。で？ そんなギルドマス

「…………ただの、とは」謙遜だな。端的に言おう、君の情報収集能力が欲しい。君が開示したモンスターの情報、ダンジョンの情報は非常に精確だったよ、うちの補佐も驚いていた。銀の騎士団に入らないか、トール

俺の疑問に、少しの逡巡の後そう言ったフェイルの言葉に、俺は首を振る。

「随分と過剰評価をしていただいすまないが、生憎と、どこにも所属する気はない。これは別に銀の騎士団がどうこうの問題じゃない」

「何故だ？ 理由を、聞かせてはもらえるか？」

「そんなに大げさな理由じゃないさ。昔、もちろんこことは違うMMOでだけれど、アイテム関係でよく揉めてな、それ以来、ソロ活動が多いんだ。……今更、集団行動が出来るとは思えないしソロのほうが効率がいい。おかげで情報収集も得意になつたしね」

誰であれMMORPGの経験があるものならば、手に入れたアイテムの分配等で揉めた経験は少なり大なりあるだろう。だからといって極端にソロプレイに走る人間は多くはないが、決して少なくもないのだ。

「しかし……」

ただ、今の状況ではそれだけでは断る理由には弱いのだろう、そ の俺の言葉に何かを言いかけるフェイル。

確かに、この状況では情報共有は必須だと俺も思っている。なので俺は先手を打つことにする。

「もちろん、何もしないって言うわけじゃないぜ。もちろんボス戦には協力するし、俺が確認したモンスターの情報やダンジョンの情報は即座に公開するつもりだ。先日みたいに『言霊』関係の情報があれば、知らせるさ。人の命をかけてまで、情報を独占する気もそれを商売にする気もないよ。

今回情報料を頂いたのは、あんたのところの綺麗なお姉さんに借りを作りたくないと言われたからさ」

俺がそう言いつと、フェイルは少し難しそうな顔をして、黙った。

本当に、ギルドに属さない理由はそれだけでも無いが、嘘は言つていい。

それに元々、こういう状況でなくともソロ経験が俺が多い。

先ほどのような理由もあるが、一番は仕事柄時間が不定期だからだ、いつ入れるかも落ちるかもわからないのならば、一人のほうがない。

大々的なイベントがある場合には、臨時パーティを組めばいいだけの話だしな。

……決して、大人數での人付き合いが苦手だからなわけじゃないぞ？

「……後一週間だが、それでもか？」

少しの沈黙の後、カップを傾けてコーヒーを一口飲み、フェイルはそう呟いた。

俺はそれを聞いて、ああ、良いやつなんだなと思う。てっきり、俺が情報を独占することについて考えているのかと思ったが、違つたらしい。

一週間後、その時何があるかなんていうことは言つまでもない。チュー・トリアル期間の終わりが示すもの。それは、塔の最上部に到達し、この世界が攻略されるまで終わらない、死の遊戯デスマームの始まり。

フェイルが、俺に真っ直ぐな視線を向けてくる。そこには迷いも打算も感じられない。

この眼の前にいる男は、おそらく本当に善人なのだろう。今日初めて出会つた俺のことまで気にかけようとしている。ある意味何でもありになつてしまつたこの状況で、他人の心配が出来るのは皮肉などではなく、尊敬に値する。

それが分かつたからこそ、俺ははつきりと否定する意味で、頷いた。

多分、その場所に俺はいないほうが多い。
俺が、いられない。

今はまだ、死人が出でていないからいいだろう。

しかし、現実問題、今この世界に生きている15000人が誰一人欠けずにクリアできる可能性など、限りなくゼロに近い。何せ、1000人で行つたクローズド・テストの時さえ、どれだけ『死亡』数があつたかなどわからないのだから。

これは、当たり前のことではあるのだ。

何度も死に、そのたびに学習する。

それが本来のゲームのあり方なのだから。

しかし始まってしまった現在の【Babylo】はそうではなくなる。

そして、実際その時を迎えてしまった時、さすと運営への文句は出るはずだ。

……『アル』への呪詛が、出るはずだ。
むしろ、毒づかない奴なんていないだろ？

この世界を創り上げることに携わり、『アル』と面識のある俺でさえそうなのだから。

例えばそれを間近で聞いた時、もしくは所属しているギルドのメンバーが死んだ時。

俺は、それに耐えられる自信がない。

現実世界における、運用メンバーの一人であつたものとして、この創作者の一員としての覚悟が、俺には足りていない。

この一週間。俺はひたすらモンスターの情報と自分の知識のすり合わせを行なつていた。

出来るだけ正確に、先入観の混ざらないよつこ。

A.I.の行動パターン、出現率、注意すべきことを知識の限り。

効率を求めて一人で出現パターンの合間に縫い、必死に自分の作ったアルゴリズムを思い出し、短期間で調べられるだけ調べた後で公開した。

もちろん他のプレイヤーが既に公開しているものは省き、俺でしか気づかないようなことであつたり、リアなモンスターであつたりの情報を少しづつ公開していった。

正直、一週間はあつという間だった。

寝る間も惜しんでいたから、結果的にレベルも上がつていった。

……そして、一回死んだ。

自分で作ったものながら、モンスターは本当にリアルだ、攻撃されるこの恐怖もあるし、始めはたとえ相手が雑魚であるとわかつていたとしても、体の反応は逃げろと叫んでいた。

しかし、無理出来る期間が限られているからには無理するしか無い。

この期間が終わっても、命がかかつてもなお、俺がその恐怖に打ち勝てるかどうか等、正直自信がないからだ。

俺には、批判や罵声を受ける覚悟もなく、開発メンバーであることを明かす勇気はない。

俺の持つ情報は、雑魚モンスターの基本パラメータと行動パターン、他のメンバーが担当していた部分のうろ覚えの知識。

ダンジョンや『言霊』の配置や出現はランダム関数を用いているから正直わからないし、自分がゲームの時に楽しむために、必要最小限な情報以外からは敢えて離れていたことが悔やまれるが、知りうる情報はすべて公開していくつもりだ。

そんな俺の内心がわかるはずもないが、表情を見て誘いが無理なことは察したのだろう、フェイルは諦めたように笑った。

「こんな時だが、苦笑つてイケメンがやると確かに似合つた……、等どちらもないと」ことを考える。

「困つたら、いつでも言つてくれ。我が銀の騎士団ナイツ・オブ・シルバはどんな時であらうと入団希望者を歓迎するし、この状況だ、ギルド団員であろうとなかろうと、助け合わなければと思つている。

後、こここのコーヒーは確かにうまいな、ギルドを立ち上げて、重圧もあつたが、久しぶりにそんな事を思つた気がするよ。トール、礼を言わせてもらう。よければ、友人として、これからもよろしく頼む」

そう言つて、本当に美味そうにコーヒーを飲み干すと、爽やかに笑い、立ち上がり手を差し出してくる。

去り際の握手か……本当に、主人公らしい男だ。

しかし、話してみてわかる、この銀色の剣士なら、皆の先頭に立つて、この閉じられた世界で人を導くことが出来るかもしれない。

眩しいけれど、主役としての責任と戦おうとしているこの男のようにはいかないだろうが、裏方らしく俺もがんばろうと思える。

「ああ、いらっしゃる。お互いに、無事を祈つて」

俺はそう言い、その手を握った。

これからは少しだけ心の焦りに向き合える、そんな気が、していた。

現プレイヤー数：
：

【Babylon】 チュートリアル15日目

15000人

五話（後書き）

10 / 20 少し以前までの話を改稿しました。

「ダブル・チェイン
双撃！」

手にした双剣が、相手にヒットする。

俺は、うつかりリンクを引っ掛けてしまったモンスター、『リザードナイト L.V.・12』が、生命力（HP）を散らし粒子となって消えるのを見守った後、その落としたドロップカード、『龍人の鱗 L.V.・3』を拾い上げた。

今更の説明だが、このゲームではアイテムは二つの形状を持つことが出来る。

まずは、普通にオブジェクト化したもの。

ただ、これでは常に持ち運ぶわけにも行かない。

ドラ もんの四次 ポケットでもあれば別だが、それは仕様を決めるときに却下された。

後、戦闘中に使ったりもするので、メニューで選ぶだけでは効率が悪すぎる。

結果、アイテムはカード化して持ち運び出来るよつになつたわけだ。

モンスターを倒した際も、ドロップカードが落ちる。

これを拾う瞬間は、中々いいものだ。

もちろん乱戦では自動的に収納されるようにもできるが、気づいたら在る、よりも自分で手に入れた感があるので俺はカード化してドロップされるようにしている。

それをアイテムボックスに収納すると、俺は目の前に続く目的地

への獣道をみやり、その先に歩を進めていった。

喫茶店でフェイルと別れてからの俺は、不思議と少しだけ肩の荷が下りたような気がしていた。

そばにはいられないなんて思つたけれど、だからこそ、そう思つた。

自分で、勝手だといつのはわかるし、現金だな、と思つが。

俺は、元々裏方の人間なわけだ。

昔から、主人公体质のやつが突き進むのに付いて行つて、適当に狩り残した枝葉を回収するようなタイプだと自負している。

伊達に俺を25年もやつてはいけない。

性質にも文字通り『裏方』つてあるしな。…………お願いだから笑い事にしておいてくれ。まだ時々ステータス見て哀しくなつてたりするから。

それでも、こんな事になつて、必死になつて情報を集めて、せめてどこかで俺も攻略するのに貢献しないと、なんていふことを、柄にも無く思つてしまつていたわけだ。

責任がある立場だと思っている割りには、俺の持つ手札は哀しいほどに少ない。

遅かれ早かれ、実力のあるプレイヤーならば解るような知識ばかりだ。

むりむり、今もその責任を感じる気持ちは変わってはいないし、やることはあるつもりでいる。

まだ、俺は開発者です、こんなことになつて申し訳ないです、なんて事も言える気はしないけれど。

フェイルのよつに人を集めて、人を思いやつて、俺みたいなソロプレイヤーのことまで気にかけるような、そんな人間がここにいると、実際会つてそう感じるのは、やっぱり少し、暖かくなる気がする。

とまあそういう少しの晴れやかな気持ちの元、俺はログインしてから一週間目にして初めて、元々やうつと思っていたことをじこ、いつもと変わらず一人で、だが少し気負いも和らいだ形で、ここへやってきたのだった。

バベルの街西部からでて少し行くと、『深淵の森』というフイールドに突き当たる。

初心者が少し戦えるようになつたかな、といつレベルで訪れるこの出来る、つまりは中級者の入り口の為のレベル上げに最適な場所として設計された所だ。

攻略組、と常から呼ばれているような元・廃プレイヤー達は、これまでの一週間で通り越しているし、

怯えつつも、フェイルのような人間のお陰で少しずつ立ち直り始めた初心者プレイヤーには少し早い、そんな場所。

俺も、ひたすら今開放されているダンジョンをソロで回つていたため、ここには既に来たことがあるし、モンスターの確認も終えている。

ただ、その時の余裕のない俺が、見ていない場所があつた。

その場所は、別にレアモンスターが出てくるわけでもない。決して、良いアイテムが出るわけでもない。

そんな、特にプレイヤーにとって都合の良いわけでもない場所に行こうと思いつたわけは、今の時間帯にある。

後一時間ほどで日が暮れる。それは明日以降になつてしまふだろう。

正直、それでも不都合があるわけでもない。

でも、フェイルが立ち去つて、コーヒーが美味しいと思って、いつもそう言って。

その場所に、行きたくなつた。

自分でもわからぬけれどそんな時がある。わかつてもらえるだろうか？

街を出て、森に入つて20分程、ふと、俺は違和感に気づいた。

(・・・・・追尾けられている?)

さすがに人が少ない場所だとは言え、誰もいないわけではないから、多かれ少なかれ狩りをしているプレイヤーはいる。

ただ、先程から俺が一直線で進む場所に、一定の距離で付いてくる三人のパーティがいるようだ。

なにせ一番目の性質は『臆病者』な俺。
索敵は任せてくれ。

というかこの能力が意外と使えたお陰で、俺はソロ狩りとしてなかなか効率よくやつていている。

……この性質を誇りたいかと問われれば、ノーノメントでお願いしたいが。

先ほども言つたが、これから向かう先は中心部でもないし、俺のよつな目的以外でそこを目指す物好きなどいないだろう。

それに、俺の更なる性質……『裏方』により、できるだけモンスターと遭遇しないように行動している俺に離れずついてきていると、いつことは、向こうつも結構なスピードで進んできているはずだ。

(PKか……厄介だな)
（プレイヤー・キャラ

この巻き込まれた状況下で、そんなことをしている人間がいるとは信じたくないが、盲信もできない。大体、この状況でソロで行動している俺をつける理由など、他には思い浮かばない。

三人の相手をするのは相手のレベルによるが分が悪すぎるし、ここであまり時間は食いたくないのもある。
尾行をまくのならば、まだ目的地が見定められていないであろうここしかないだろう。

「しょうがない、隠れてやり過ごすか

「」で返り討ちにしてやれないのは悔しいが、それこそ顔を覚えてフォイルにでも注意を促しておけばいい。そう考えた俺はそう咳くと、一気に移動のスピードを上げ、そして、ある程度距離が離れたところで、密集した木陰に身を隠した。

元々の俺の職種が盜賊^{シーフ}なのと、外見が黒髪に黒のコートなのも相まって（裏方のせいだけではないぞ）、相当の索敵^{サーキ}スキルがない限り、ここに俺がいることは見破られないはずだ。

そして、それだけの索敵^{サーキ}スキルがあるのであれば、レベルも相当のはず。相手に害意があつた場合、目的地にたどり着くまでにやられてしまつだろ？

俺の現レベルは24。

入つて一週間という期間を考えると結構なレベルに達しているとはいえる、元々がそこまで装甲のない盜賊^{シーフ}だ。その速度を用いた戦闘で、一対一位ならどうにかなつたとしても、多人数相手にどうこうできはしない。

人の気配が近づいてくるのを感じる。

俺は、息を潜めて、意味もわからず後を付いてくる不審な輩達の顔だけでも確認しようと、木陰から目を凝らした。

(…………えつー)

そしてその影を視認した時、俺は声を漏らしそうになるのを何とかこらえる。

追尾けてきていたのは、予想通り、三人編成のパーティだった。装備と振る舞いから見て、結構レベルも高そうだ。

戦士職一人に、後衛の魔術師が一人。

回復役はいないが、それだけ余裕のある面子なのである。

ただ、俺が驚いたのは、そのレベル等ではない。

その中の一人を、見たことがあり、知っていたからだ。

先頭をやつてくる、黒髪の女性。

スレンダーな体型に、冷静さと怜悧さをたたえる目。そしてその美貌に似合いすぎている眼鏡。

これで腰にレイピアを吊り下げ、軽防具を身にまとつてなどいなければ、立派な秘書に見えるであろう。

確か、名を『ローザ』と言つたか。

『言霊』の情報を渡しに行つた時に見たから間違いない。

俺は、美人の顔を覚えるのは得意なのだ。

それは、先程俺が入団を断つたギルド。

あの主人公然とした善人に見えたフェイルがマスターを務める、
銀の騎士団^{ナイツ・オブ・シルバ}のギルドマスター補佐をやつている人間だった。

六話（後書き）

10 / 17 L/Vを少し調整しました。
本筋には関係ありません。

(……まさか、銀の騎士団の連中が？)

ギルドのマスター補佐がPK？

思いもよらぬ遭遇にそう考えて、俺は混乱する。

つい先程まで、フェイルのような男と、その作るギルドについてのいい印象があつたからこそ、余計に思考が乱れていた。

少し躊躇するが、どうにか確認したいという意思が勝る。

それに、確認するとすれば、チュートリアル期間でいられる今しかない、との冷静な部分もあつた。

脳内の迷いとは裏腹に、体は反応する。

音もなく、この一週間で使い慣れた双剣のうちの一一本を手にとると、俺は身を潜めていた木陰から飛び出した。通り過ぎかけていた三人は気づくも、まだ構える間はない。

そして、その隙を待つていてるほど、俺は馬鹿でもない。
狙うのは後方にいた魔術師の男。

「……動くなよ、首への至近距離からの一撃は、ほぼ間違いなくクリティカルだ。防御の薄い魔術師タイプには耐えられないと思うぞ？」

俺に短剣を首筋につけられた男は、それを聞いてコクコクと小さく首を動かした。

それを見て俺も頷くと、このいきなりの状況にも全く動じた様子のない、ローザに目をやる。

「……また会つたな」

「ええ、トールさん。あなたに頂いた情報のお陰で、この世界は初めて塔の一歩を登ることができそうです。その節はありがとうございました」

塔の最初の階層を開くための、『言霊』の場所を見つけたかもしれないという情報を持つて銀の騎士団に行つた時と同じ……本当に嫌になるほど冷静だ。

もしかしたら、こいつは人質としての役に立つ人間じゃなかつたか。構わず一人がかりで押し切られたら……

そんな心境を読んだかのように、ローザが言葉を続ける。

「後をつけたことは謝罪します。ですが私達に害意があるわけでは有りません、もちろん必要と有りば防衛は致しますが」

そしてあつさり尾行していたことは認め、謝罪と共に腰のレイピアを含み武装を解除してみせる。隣の戦士の男も同様だ。

(随分とあつさりしてやがるな)

その対応を意外に感じながらも、なおも俺は魔術師の男に短剣を突きつけておく。

なんにせよ三対一だ、保険はかけておいて損はない。

「……PK目的ではないと?」

「ええ、そんな事をするとフェイルに怒られます。」

「ネイルを、魔術師の彼を開放してあげてもらえませんか?」

「それだけで、偶々面識があるだけに過ぎないあんたが信じられる」と？」

「……そうですね、言い方を変えましょ。あなたを襲つて得られるメリットと、あなたの情報の価値の利益計算ができるほど愚かだと、私はそう見られているのでしょうか？」

すごい自信だな、おい。

しかし、傲慢に聞こえるその言葉に、俺は不思議なほど納得してしまった。

……その美貌と目線に気圧けおされたわけじゃないぞ。

「……悪かった、俺の勘違いだったみたいだな」

そういう、捕らえていたネイルと呼ばれた魔術師を解放する。

「まあ、あつさりと捕まつたそいつが悪いに^よう〇点」

隣の戦士が、ニヤッと笑つて呟く。

でかい。190cmを超えているのではないか。

体格がいいだけではなく、引き締まっているのが解る。

その隆々とした体の上に乗るのは、灰色の短髪の下にぎょろりとした目と鷲鼻わしほなを配置した角張った顔。そして目につくのは一の腕にある大きな龍の刺青。

あの、どこかその筋の御方でしょうか？ プレイヤーの皆様、我が家VRMMORPG【Babylon】は、万人に開かれております。

そんな俺の一歩引いてしまった心境にもかかわらず、男は近づいてきて、バンバンと俺の肩を叩いた。

「いいね、お前。嬢ちゃんが気になるつて言つから付いてきたけれど、いい動きするじゃねーか。俺はリュウだ、フェイルの野郎と銀の騎士団の幹部をやつてる。つつてもまだ入団10日目だけどな。よろしく頼むわ」

そしてガツハツハと豪快に笑う。

肩が痛いが、どうやら氣に入つてもらえたらしい。うん、結果オーライ。

「ひどいなあ、リュウさん。僕は後衛職なんですから、しつかり守つてくださいよ。これで本当にPK専門の人間相手だつたらどうするんですか」

その結果オーライの元はといえば、そのさうりとした金髪をかきあげながら、リュウに文句を言つ。

そのリュウとは対称的に細い体格。そしてその容姿は文句なしの美形、西洋系とのハーフの様に見える……見ようによつてはフェイ尔よりも綺麗な顔立ちかもしれない。強面のリュウなどよりもよっぽど騎士団と言つた感じがする。

でも、どこか仕草にナルシストが漂つていて、俺にとつてはリュウの方が好印象である。

「でも確かに、今回は僕の負けを認めるよ。トールさんだつたね、僕はネイル、人は轟炎の魔術師、と呼ぶ予定だ」

予定かよ！ しかも「一つ名自称つてどんだけ……リュウさんとは違う意味で強者だ。

瞬間に、俺の中でネイルは残念な一枚目として認定された。異論は認めん。

フヨイルのどこまでも濃いキャラが揃つてゐるなあ、さすがだ。

とりあえず一人と挨拶を交わした後、ローザに改めて目を向ける。

「で、何で着いてきていたか、話してもらえるんだひうっ。」

俺がそう問うと、ローザは頷き、少し考えて言つた。

「ええ、そのつもりです。ただ、その前に一つお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「……この先には特に何も無いはずなのですが、トールさんはどちらに向かつておられたのですか？ 差し支えなければ、教えていただきたいのですが」

なる程ね、それは疑問に思うか。

俺はローザの言葉にそつと納得する。

「言ひより実際に見せたほうが早いな、隠すもんでもないし。でも、別にアイテムとかそういう実利的なものがあるわけじゃないから、そんな期待はしないでくれよ。そう遠くはないから、そこまで急ぎでもないけれど、歩きながら話そう

そしてそう言って歩き出す。

後20分もかかるないが、この先モンスターにはち合わないでもないので進んでおきたい。

というか本当にただ付いてきてたんだな。書意はないとすると、

何だらう。

ギルドに入らなかつたことについてかな。

「わかりました。貴方達はどうしますか？ リュウ、ネイル」

「俺は行くぞ、面白そつだしな」

「僕も今更一人で帰る気はしませんよ」

ローザの確認の言葉に、当たり前のように着いてくると答える二人。

ちつ、美人と一人デートも悪くないのに。

内心で思うと、ローザから一瞬冷たい目線が。

……あれ、心読まれた？ というか追尾けられてたの俺なのに何でこっちが悪者みたいな目で見るの？

コホン。

取り敢えず、そんなやり取りの後で、俺と銀の騎士団の三人という変則パーティは目的地へと歩を進める事になった。

その後話してもらうと、後をつけていた理由としては、俺のもたらした情報があまりに正確だったので、どのような方法で狩りをしているのか気になったのだという。

そして、ギルド入りを断られたと聞いて、その情報収集の手法を出来れば聞きだそうと探していたところ、街を出る俺を発見、見ていれば、よくわからない方向へと進んでいく。これは何か在るのかと思い、三人で着いてきた結果今に至るというわけらしい。

聞いてみれば、確かに馬鹿馬鹿しいような普通の話だ。

ローザの態度を見ていると、どうもまだそれだけでもなさそうだったが、害意があるわけではないのは確かのようだったので、放置する。

多分詮索してもわからん。この人感情表に出ないんだもん。

ちなみに、俺が気になつて、等のフラグでは残念ながら無いのだけは言つておこつ。

彼女はあの美形かつ善人のフェイルのハーレム要員のよつで、裏方の俺には付け入る隙もない。

……甲斐性もないがな。

そうして臨時パーティを組んでみると、三人とも、さすがに大ギルドの幹部クラスだけあって高レベルプレイヤーであつた。

ローザは小技の連続で敵を足止めし、リュウさんが薙ぎ払う。残つた敵はこれまた残念な一枚目の割に強いネイルが、後方で詠唱を重ねて焼き払う。

うわ、そりゃこのレベルのフィールドでは回復役いらないわ。圧倒的だもの。

もちろん、俺は盗賊シーフらしくそそくせとモンスターからアイテムを盗んでいましたが何か？

そんなふうに順調に目的地に近づく俺達。まあ、近いのは俺にしかわかつてはいなかつたが。

そんな時だつた。

森の中に声が響き渡る。あまり現実では出会わない声。

「悲鳴？」

「……だな、多分こいつちだ、100m程先にプレイヤーが三人。モンスターの気配……無し。これは本当にPKかもしけん」ローザの疑問に、俺はそう答えて走りだす。遅れて三人も続くが、

本気で走る盗賊の俺よりは遅い、何せ全基本職種中最速なのが盗賊の特徴だ。もっともそこまで遠くはない、すぐ追いついてくれるだろ？。

悲鳴の声は女人の声だった。……それも、相当切羽詰まつたようだ。

嫌な予感が脳裏をよぎる。

俺は、自分に出来る限りのスピードで、声の方向へと向かった。

六話（後書き）

ご覧になつて頂いてありがとうございます。
この後につなげるため、締めの部分を少し修正しました。

本当に、嫌な予感ばかりが当たることだ。
走り抜けた先では、ある意味ではPK以上に忌避されるような事が起ころうとしていた。

その日の前の光景を見て、即座に意味を悟った俺は、すっと頭が冷えるのを感じた。

正直、内心ではわかつていたのだ。

『アル』は、この世界を、もう一つの世界と呼んだ。

ここは、仮想ではあるが、現実だと。

元々、今回が初の試みとなるVRMMOには、大きな懸念もあつた。

それは、これまで画面内の話であつた暴力やハラスメント行為が、実際に行動としてできてしまうということ。

だからこそ、それを行つたことに対する黄色マーカー等があるし、様々な倫理コードでの対処等が存在する。

ただ、それは運営が機能していることが前提の対策であつたりもする。

『アル』という、この世界での神とも呼べる能力が前提である、対応策。

しかし、『アル』はあるのアナウンス以来、姿を見せていない。

そして、次は、この世界を現実とするための、最終アナウンスだとも言っていた。

それは、現在、運営といふ名の絶対的立場からの監督が存在しな

いことを意味する。

『アル』にとつては、犯罪者も、被害者も、等しくプレイヤーに過ぎないのだ。

システム上不都合となる場合には別だらうが、仕様上影響を及ぼさないものに対しては、何も行動は起こさない。

そして、この世界には、法律というものは存在しない。

『死亡』に気を取られて、それ以外にも、どれだけ薄氷を踏むバランスのもとに成り立っているものがあるかということにまで、考えが及んでいなかつた。

……いや、それは嘘だ。

考えることを放棄していたのだ。

ここは、この世界は、現実だ。

ただ、『死』だけがそうなるわけではない。生活するということ全てが、現実なのだ。

俺の索敵^{サーチ}にかかつっていた人数は三人。

だが、ここには四人いた。

男性プレイヤーが三人、女性プレイヤーが一人。

男のうちの一人が呪術師らしく、女性プレイヤーに麻痺の呪文をかけて動けなくした上で、残りの一人が押さえつけている。

その座標がかぶつっていたからこそ、三人だと思ったのだ。

一人の頭上に黄色のフラグが出ではいるが、気にした様子は見られない。

男達が突然の闖入者ちんにゅうしゃである俺の方に顔を向ける。

その顔に浮かんでいるのは、醜悪で下卑た笑み。

そして、その背後で麻痺パラライズの呪文をかけ続けている呪術師の男と曰が合づ。

っ！

それを見た時、俺の中で何かが弾けた。

瞬間、俺は投げナイフのカードをオブジェクト化し、その呪術師に向けて投擲とつてき。そのまま女性プレイヤーを組み伏せている男達に向かってその双剣からの一撃を放った。

三対一だということも、後から来るローザたちの事も、頭から消し飛んでいた。

虚しくナイフは避けられ、俺の双剣もまた、空くうを切る。

しかし、その行動によつて組み伏せられていた彼女は解放された。即座に、俺はその女性を背後にかばうようにして双剣を構える。

飛び退いて避けた二人は、片方は戦士のようだった、背中に担いだ剣を抜き、威嚇するように構えてくる。

そして、もう一人が何事かを呴いた瞬間、俺の動きを絡めようと地面から茨いばらが伸びてくる。

ローズ・バンド
束縛の薔薇。

咄嗟にそこから飛び退くも、俺はその攻撃により判明した相手の職種に驚愕する。

(なつ！……もう一人も、呪術師だと！)

呪術師は、相手の行動を阻害したり、パラメーターを低下させたりすることの専門家だ。その効果は多彩なものがある代わりに、攻撃力は低い。しかも、モンスターによつては妨害が効きにくい相手も存在する。

壁役の戦士と攻撃力の低い呪術師一人などというパーティは、歪^{いびき}もいい所だ。

明らかに、モンスターを狩る面子ではない。

……一人のプレイヤーを、嬌^{なぶ}りながら狩るための、三人だ。

おそらく、交互に^{バラライズ}麻痺^{パラライズ}をかけ続けるつもりだったのか。

その考えに行き付き、吐き気がする。

思考が、得体のしれない憎悪と嫌悪感に飲み込まれる。

「…………う」

しかし、その感情に身を任せて斬りかかるうとしたその時、背後の、麻痺から解放され起き上がるうとしている女性から漏れた声に、沸騰しかけていた俺の頭が少し冷える。

そうだ、今は守らねばならない。この背後の女性を。

「……すまない。あんたを、助けるから」

そう小声で告げ、さらに攻撃を加えてこよつと身構える眼前の男達を見据え、片手を上げて口を開いた。

「待てよ……お前ら、正気か？ 三対一で女を襲うとか……状況、わかつてんのか？」

そして、背後の女性の手をとつて何とか立ち上がらせ、あとまわる後退りする。

「へつ、何だよお前。正義の味方気取りで飛び込んできたわりにはもうビビッてんのかよ、ああ？ わかつてねーのはお前のほうだ。こんな訳の解らん状態で、一度も死なずにクリアだ？ 出来るわけがねえじゃねーか、俺たちは死ぬんだよ！ なら、それまで楽しませてもらつて何が悪い！」

そんな弱腰な俺を見て、戦士の男が構えたまま、俺を嘲笑うかのよつに笑みを浮かべ言つてくる。

「……なんなら、お前もどうだよ。俺らの後で良ければ混ぜてやるぜ？ 見ろよ、そいつはきっと極上だぞ」

そして、それに追従したかのように、一緒になつて取り押さえていた呪術師の男が、詠唱を中断し、嘲笑つた。

その言葉に、掴んだ腕あわいごとに女性がビクッと強張るのが解る。

うちの先輩達は本当に優秀だ。

……綺麗なものだけでなく、こんな醜悪な表情まで完全に表現しきれているのだから。

せめて少しでも安心させられるよつて、掴んだ女性の腕に少しだけ力を込めて、そして嘲笑する男にむけて俺は憎々しげに本心を吐き捨てる。

「クソ食らえ、つて言葉を初めて自然に使うよ。下種げすが」

挑発するような言葉に、二人が激昂する中、たった一人無言でいた残りの呪術師が、急に背後を振り向く。

チツ、バレたか。

「……む……三人。仲間か？ 分が悪いな」

目を細めそう言い、すつ、と手を地に広げ、転移の呪文を用意しようとする。

こいつだけは他の一人とは違う。挑発にも乗らずに決断が早い、このまま逃げるつもりのようだ。

少し頭が冷えた結果、俺の後を追つて近づいて来ているローザ達の気配に気づき、何とか時間を稼ごうとしていた俺だったが、仕方がない。こちらもやられてしまうかもしねいが、誰か一人でも倒せば、その相手の情報は得られる。

今は、名もわからぬまま逃がす訳にはいかない。

【BabyOne】は広く、運営はいない。

ここで逃すと捕らえるのは難しくなるだろう。

後は、ローザ達が何とかしてくれるだろうと考え、相打ち覚悟でも二人は道連れにしてやると決める。

「下がつてて、もうすぐ助けが来るから

そして、そう言って掴んでいた手を放すと、その空いた手を改めて掴む感触があつた。

「…………待つて…………待つて下さい。10秒だけ、三人を同時に

足止めつて、できますか？

その後に続く思いも寄らない言葉に、俺は咄嗟に振り向く。

…………初めてきちんと顔を見たが、息を呑むほど綺麗な、意思の強い目をしている。

何がそうさせるのだろう、今も、まだ恐怖に震えているだろうし、そんな彼女の肩を震わせながらも俺を見る目線はまっすぐだった。その手を振りほどけない程に。

俺は、余裕が無い中で考える。

三人同時では長くは保たないが、倒すことを考えず時間を稼ぐだけなら出来なくもない。それに今ならば、一番注意が必要そうな呪術師の一人は、どこかに転移する準備に追われているはず……

そう判断した俺は、しかし、一応最後の確認を取る。

「…………できたら逃げて欲しいんだけど」

その言葉には、案の定首を振られた。

怖くないわけがないだろう。本当の心の中などわからないし、事情も知らない。

それでも、彼女が逃げることも守られることもよしこせづ、戦おうとしていることは分かった。

だから、頷く。

「わかつた、任せる」

それだけ言うと、俺は行動を開始した。

コートのポケットからアイテムカードを取り出し、転移の陣を構成する呪術師とそこに集まる一人の頭上に投げ上げる。最も、これはただのフェイクだ。

しかしその意味ありげな行動に三人の目線が集まつた所で、持ちうる技能^{スキル}のうち、最速の攻撃を俺は発動させた。

『時雨の舞い』

DEX（器用）とAGI（敏捷）が一定の値に達したプレイヤーが、あるイベントをこなすことで習得できる。

先日、仕様通り取得できることを確認し、技能イベントを公開したばかりの、おそらく現段階では俺にしか使えない特殊技能。

俺の発した言葉がシステムの流れに乗る。この流れに逆らってはいけない、逆らえば、脳と行動の差異に、行動が中止してしまう。そして、無事双剣が攻撃の初期動作に入り攻撃を開始した。攻撃によるHPはほとんど減らないが、三人はただ防ぐしか無い。この技は攻撃力は無いに等しいが、複数の相手に攻撃できる上、防御に時間をとらせられる、後衛が詠唱することを見越した時間稼ぎの技^{スキン}能だ。

そんな双剣の乱舞に身を任せた俺の耳に、歌が聞こえる。攻撃の中でも不思議と響く、透き通った綺麗な声。

『彼方へ捧ぐ、風の詠』

『想念いのままに、奏でましょ!』

『虚空に搖蕩つ、言靈』

そんな歌が流れる中、俺の技能^{スキル}が終わり、その反動である硬直時
間が俺を襲う。

それを見て、憤怒に顔を歪めた戦士の男が防御の体勢を解きその
剣を振りかぶるが、俺には不思議と恐怖はない。

(綺麗な声だ……そうか、吟遊詩人だつたんだな)

そんな場違いなことすら考える余裕が、何故かあつた。

そして、振りかぶった剣が振り下ろされる前に、歌が終わりを告
げる。

戦士の背後で転移準備をしていた呪術師が顔をゆがめるが、もう
遅い。

『永遠^{とわ}の終わりを、告げましょ^う』

『シルフ・ディマイス
終焉^{うた}の蒼風』

最後の詠唱と共に、その技が発動する。

吟遊詩人は、基本的に支援系に優れた職種である。
フィールド等にある言靈を使い、謳い、パーティ全体の防御力を
上げたり、仲間に攻撃している相手の動きを止めたりといったこと
が専門だ。

ただ、この【Baby-0】ではそれだけではない。

その詠唱に時間がかかるものの、自分の属性に関する歌では、後方からの攻撃系である魔術師よりも威力を發揮できる場合がある。

彼女の歌は、開発者の俺ですら初めて聞くほど、綺麗なものだつた。

そして、その効果も。

「……これは、何？」

ようやく追いついてきたローザが呆然と咳き、それに少し遅れて現れるリュウとネイルも絶句する。

その様子も無理は無い。

何せ、未だ先ほどの三人を取り巻いている竜巻は、その終わりを告げる事なく、目の前でその威力をまざまざと發揮してくれているのだから。中に取り込まれれば、抜け出すことは不可能だろう。

そして、俺の様子で声をかけてきたのが味方だと悟ったのか、糸が切れたように隣でふらりとよろめくそれを引き起こした女性。俺は慌ててその身を支える。

フワッ、と顔にかかった髪から、柔らかい良い香りが漂う。

「『』、『めんなさい』」

そう慌てていう彼女を何とか支えて、体勢を立て直すと、風が止んでいるのに気づく。

後には、^{スタン}気絶状態に陥っている三人の男。

おそらく男達とは相当のレベル差があつたはずだが、それでも恐ろしいことにHPを瀕死状態まで追いやり、その上気絶状態まで追加されたらしい。

さすがにこんな犯罪に走ったプレイヤーを野放しにするわけにもいかない。

当分三人が起きそうにないのを見て、俺は、とりあえず状況を把握していないローザ達に事情を話すのだった。

八話（後書き）

仕事から帰るとPVが10000超えてました。

正直こんなにご覧になつて頂けていると思ってなかつたのでびっくりです。本当に感謝です。

後回しにしていたこれまでのものの見直しと改稿をして見ました。

ではまた機会がありましたら。よろしくお願い致します。

眼の前の三人を見て、俺は咳いた。

「さて、どうするか」

事情を理解したローザ達 説明を終えた後の、リュウとネイルの激昂も結構なものだったが、それよりも、普段より更に冷たくなったローザの視線と雰囲気のほうが怖かった と俺は、取り敢えず装備を解除させ、『監獄の檻』という犯罪者プレイヤー用のアイテムで動きを封じた上で、その処遇について話していた。

今ネイルが、ローザに言われて団長のフェイルにフレンドメッセージ（ゲーム内のメールのようなもの、連絡をとる際に使用できる）を飛ばして連絡をとっているらしい。

するとローザが不意に俺の隣にいた、襲われていた女性に目を向け、口を開く。

「初めてまして、私はローザ、ギルド、銀の騎士団に所属しています。あちらの二人も同じ所属です。剣士の方がリュウ、魔術師がネイルです。失礼ですが、貴方のお名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

「あ……すみません。私、助けていただいたのにお礼もまだで

私は、さ……あ、じゃなくて、トゥーレーネ、です。えっと、職業は吟遊詩人です。このたびは、危ないとこを助けに来ていただいて、本当にありがとうございました」

彼女が、そう言って深々と頭を下げる。

トウレーネ、か。そういえば俺も説明や後始末を先にしていて、自ら紹介すらしていなかつた。

咄嗟に言いかけたのは、現実での名前だろつ。もしかすると、MORPG自体、そこまで詳しく述べはないかもしれない。

そういえば不思議だ。

ここから出られなくなつて、曲がりなりにも生活しているの、俺も、他の人間も、ここアバター名で通じていて、それを疑問に思つたことはなかつた。

まだ、ここにいることを現実とは認められていない、といつことなのだろうか。

「私たちは何もできていません。お礼なら、その方に」
俺が、トウレーネの言葉にそんな事を考えていろと、ローザがこちらを指さして告げる。

その言葉に、俺の方を見るトウレーネ。

「あ……あの、ありがとついでござました。えつと……」

そして、お礼をいつて口にさる。そういえばまだ名乗つていなかつた。

「トールだ。……いや、そんなにかしこまらなくていいよ。結果的にあいつらを捕らえたのはあんただからな。 綺麗な、歌だつた」

そう自ら紹介をして、思つていたことを告げる。

「ありがとうございます。これだけは、私の取り柄だから
トールさんも、助けてくれた時凄いかつこよかつたです。」

その言葉に、にっこりと微笑んでそんな事を言つトウレーネ。すこし頬が赤らんでいるのが超絶的に可愛い。

…………やばい、こいつ直球派は苦手だ。

先ほどは混乱で、その意思の強い目しか印象に残つていなかつたが、初めて、真正面からゆつくりと彼女を見る。

背はローザと同じ位、俺の肩に目の位置が来るほどだから、160cmは無い程度だろう。

ライトブラウンの大きな瞳に、淡く赤みがかつた茶色の髪が似合つてゐる。

ローザと同じく美人なのだが、雰囲気とあいまつてそこに佇む様には、可憐、という形容詞が浮かぶ。

仮想現実、バーチャル現実を問わず、俺には縁がないような人種だ。それにして、フェイルにあってから、美形に大勢出会つ口などだ。

「生まれて初めてそんな事を言われるのがこんな状態とはね。でもあなたはあれをどうしたい？」

俺はそう肩をすくめて言つと、アイテムの中でおとなしくしてい（というか身動きはできないのだが……）三人に目を向けた。言葉が少し邪険になつたのは仕方がない。その裏技的な知識での一週間は前線にいるものの、基本性能モブキャラ（またの名を村人一号）を自負する俺の防衛本能がそうさせる。

その容姿で、裏方性質の俺にそんな直球で褒めてくるとは、俺がうつかり惚れてしまつたらどうするんだ。

…………そしてローザさん、こんな時だけ怜俐なお顔を優しく向けるのはやめてください。面白そうなものを見る表情もやめてください。

「……どうしよう。本当なら警察とかのはずですが、いつこの場合はどうするのですか？」

トウレーネは、少し嫌悪感を目に浮かべそちらを見た後、目に目線を戻しそう叫び。

（しまった、俺の馬鹿野郎。少し落ち着いてきたのに思い出せりどりする……）

自分の気の利かなさに後悔しつつも、ローザ達を見て俺は尋ねる。
「本来なら、こうこうのは運営者側でアカウントを削除するものなんだが、今回は期待できない。銀の騎士団で引き取つてもらえないだろうか？」

「ええ、そのつもりです。その件で今团长に連絡をとつてこりますが……」

ローザは俺の言葉に頷き、そしてネイルの方を見、それを受けてネイルが答えた。

「はい、今連絡が取れました。そういうプレイヤー用に場所を用意して受け入れるから、転移させてくれ、ということだそうです。僕も説明のため、一緒に戻ります」

さすがに早い対応だ、頼りになる。

そう思つた俺は頭を下げ、頼む。

「すまないな、面倒事を押し付けて」

「いいえ、…………では、その代わりに、私どもへこれから先も協力いただけるということでキャラ、こうことによらしょく首を振つた後、少し考えた後ローザはそういった。

「……元からそのつもつだつたけれど、あくまで交換条件みたいに言うんだな」

俺がそう言い笑うと、

「それは当たり前だと思います。……犯罪者の男^{モロ}と、見目麗しい歌姫。少々差がありすぎるとは思いませんか」

あれ？ やりつと言つたけれど、何か単位おかしくね？
まあいいか、さつとローザさんは怒らせてはいけない御人だ。

そう思つた俺は、華麗にスルーしてもう一つの懸念を話す。

「……こちらの歌姫も、保護してあげたほうがいいと思うんだが」「もちろん、お望みとあらばいつでも御受け入れは致しますが…」

「いや、そりゃギルドに入ったほうがいいだらつ」
少し言葉を濁したローザに、俺は言つた。

「フェイルの直々の誘いを断つた方のセリフとは思えませんね…それに」

「それに…？」

「そちらは、銀の騎士団に入らなくとも、もつ他に騎士^{ナイツ}の方が多いつしやるようですね」

そのローザのいたずらっぽい笑みと、それまでの話を黙つて聞きながらじつと俺の方を見つめてくるトゥーレーネを見比べて、俺は頭をかく。

だから、俺は騎士でもなく（むしろ盗賊だし）、一般人なんだって……

そんな俺を見て、さらに可笑しそうに笑うローザ。

お、この人が笑うところ初めて見た、レアだな。笑われてるのは俺だけど……

「…………何だよ？」

「…………いえ……お言葉ですがわびしい人生を歩んでいらっしゃったのですね」

やかましい、勝手に人の心を読んで同情するな。
しかも決め付けるな。

……ええ、そりや、こんな美人になつかれた経験は皆無だよ。

つて、リュウさんまで「ヤーヤ」してると、あなたが静かに笑うのは怖いって、旦那。

「あの、トールさんはギルドの人ではないんですか？　だったら私も……まだ、お礼も全然できていませんし、それに、私戦いとかに慣れていないんで、厚かましいですけど教えて欲しいというか……」

そして、トウレーネが空気を読んでか読まずか止めをさしていく。

……ああもう、わかつたよ。覚悟決めればいいんだろう？

「わかつたよ、あんなことがあつた後、一人で放り出すわけにもいかないしな、とりあえずトウレーネはさつきのを見るかぎり戦力になりそうだし。自分の戦い方を覚えて、身を守れるようになるま

では手伝つてもいい。フレンドリストの登録、わかるか？

俺は半ばヤケにそう言つて、自分をメッセージでいつでも呼び出せるよう、トウレーネをリストに登録し、パーティに迎え入れる。

…………だから、そんな嬉しそうに笑わないでほしい、耐性無いんだつてば。

その様子を見て、三人を転送させたネイルまで、こちらを見て笑っている。

お前は笑うな、残念な一枚目のくせに。

「…………では、名残惜しいが僕は戻るよ。皆はビックするんだい？」

そんな声が聞こえたわけでもあるまいが、ネイルが俺達に向かってそう聞いてくる。

「そういうえば、そうだったか、いい時間ではあるな

俺は当初の目的を思い出し、そう呟く。

そして、トウレーネ達を見て言つた。

「トウレーネ、パーティ結成の記念だ、いいものを見せてあげるよ。お一人は、どうする、すぐそこだしせつかくだ、来るか？」

「私達がいて、お邪魔じやないのかしら？」

…………だから、もういちめいで下さい。

少し悲しい顔をした俺の肩を、リュウが叩いて言つた。

「男ならしゃんとしろ、しゃんと。……で？ どうにこきやいい

んだ？「

心強い、らしい言葉と、行く気満々な言葉が帰ってきた。まだこの方がいい。

「いっただ。もつ近いはずだか」

何故こうなった。俺はそんな事を想しながら、よしやく田舎町に向けて本格的に足を進めた。

先ほどの戦闘の会つた場所から、森の中を歩いて五分程、俺は、トウレーネ、ローザ、リュウの四人でパーティーを組み、当初の目的地にやつてきていた。

トウレーネは、先程からローザと話しながらも、俺の方をチラチラと見ている。

懐ぐ、という言葉が正確なものかは分からないが、どうも、あの状況が彼女の中で美化された結果……俺にとつて居心地の悪いこの状況になつたらしい。

素直な美人に目を向けられて、生意気に居心地が悪いとか言つと、何様だと思われるかもしれない。

しかし、思い出してくれないか？　　俺は、『臆病者』『優柔不斷』、そして、『裏方』だ。…………いや、言つていて哀しくなる、やはづ忘れてくれ。

「…………」には？　ただの行き止まりのようですが、なにがあるのですか？」

ローザが、戸惑つたように尋ねてくる。

トウレーネやリュウも、あたりを見渡しているが、不思議そうな表情を浮かべている。

「何も無いよ……ただ、これから起ることを、たまたま知つていてな。三人とも、少しだけ時間をくれないか？」もうすぐだ

俺は少し苦笑して、答える。そう、もうすぐ、日が暮れる。

ローザの感想も無理はない。

「ここは、『深淵の森』の奥にある、このフィールドにおける最終地点の洞窟から、少し南に外れた場所。

アイテムがあるわけでもなければ、モンスターもない。

従来のRPGで、画面の中のアバターを操作する場合であれば、

「おい、行き止まりなのに宝箱も何も無いのかよ！」

と画面に突っ込んで（声に出す、出さないは、皆様の自由となつております）　来た道を戻るだけの場所。

他のゲームで、そんな経験が実際にあつた俺が、このバーチャル・リアリティの構築に携わる上で、それでも敢えてこだわったもの。

（……何とか間に合つたな）

俺は内心でそう思い、眼の前に広がる、透明な深い闇のよつた泉を眺める。

『深淵の森』

言葉の通り、樹々に頭上を閉ざされた、闇深い森。

正直、俺が言つのも何だが、RPGのダンジョンによくある設定だ。

少しだけ、ほんの少しだけ違つのが、これから起ることだと

。

「……始まつた」

俺のその言葉に、三人がこちらを見る。

「…………これが見たくて、ここに来たんだ。この状況で、この先、きついことがもっと起こるだろつ……だからこそ、この世界にも少しは綺麗なものもあるつて、見たかつたんだ」

そんな三人に、俺は咳く。

変化の兆しが訪れはじめた、ただのフィールドの一部である、森に湧き出す泉のグラフィックを、静かに指し示しながら。

【Babylon】では、現実と同様に時間が流れ。何も変わらず、太陽は東から昇り、西へと沈んでいく。

実際この世界を球体に作っているわけでは無いが、全ての『言霊』が開放され、全フィールドに行くことが出来るようになると、『バル』を出て一定方向に真っ直ぐ進み続けられれば、街の逆側にたどり着くようになつてている。

それで、俺が考えたのが、この、目の前の情景。

とはいえ、俺は仕様とデザインのパー^ツを色々とまとめて、お願^いしただけ。実際に見るのは、この中でと決めていた。

タバコ¹カートンの報酬で、俺の妄想の実現に協力してくれた、グラフィックデザイナーの先輩には感謝の念に耐えない。

頭上には、太陽の光をほとんど遮^{さえ}つて^{さへ}いる樹々。

ここは、この森の南西の端……少し戻った先の樹々のトンネルを西にぐぐると、そこにはまだ開放されていないエリア、『熱砂の砂

漠^モが広がっている。北には洞窟のある山が荘厳に聳え立ち、東にはバベルへと続く道が存在する、深き森の名も無き場所。

太陽がその役目を終え、紅く輝きながら眠りにつく時間。
その、長い一日の、限られた数分間、ある一定の角度からのみ、
木漏れ日が挿し込む場所がある。

計算に計算を重ね、実現した場所。

闇深く、閉ざされていた泉を、夕日の橙色が照らし始める。

「…………これは、すごいもんだな」

「綺麗…………」

リュウと、ローザの声が聞こえる。

その光りに照らされた先には、その本来の姿を現した泉。
線状に漏れる光が、配置された泉の中にある水晶に乱反射し、色
とりどりのハーモニーを奏でる。

そんな、光の競演が織り成す幻想的な光景の中、不意に歌声が響く。

呪文の詠唱ではない、純粹な歌。

息を止めたように、光景に見入つていたトゥーレーネから、漏れ聞こえる声。

それは、少しづつ大きく、光の波に乗るように奏でられていく。
演奏も何もない、ただただ透明な歌声。

だが、俺達はそれをただ、自然と静かに聞き始める。

夢を求めて、ここに来た。

希望を胸に、ここに来た。

夢は現と混ざり合い、

绝望と共に、ここに居た。

光は安寧、人は言つ。

闇は混沌、人は言つ。

そして私は、知りました。

優しい闇を、知りました。

闇にその身を寄り添えて、

私の心はなぜめいで、

そして私は歩き出す。

夢の終わりに、歩き出す。

そして、聞き終わると共に、体温が上昇するのが解った。

(.....)

そんな俺の内心とは関係なく、静かに奏でる声の終わりと共に、光の競演もまた、終わる。

後には、沈黙と、静かな闇が広がるのみ。

パチパチパチ、と拍手が鳴る。

その音にはつとして、俺も、手を鳴らす。

ローザが、そんな俺の方を見て、微笑^{わい}つている。

俺は今、どんな表情でいるのだろうか。

向けられるのは、とても、綺麗な微笑^{わい}。

脳裏を過^{おこ}るのは、とても、嫌な予感。

そして、微笑が極上の笑顔に変わり、淡々と告げられる。

「…………やつぱり私達、お邪魔だつたでしょ？」

…………お願いです。これ以上ござめないで下さい。

情けない顔をしていたのだろう、他の三人がそれを見て笑う。

そして、そのうちに俺もつられて笑い出す。

ここにきて初めてかもしれない、じつして苦笑でもなく、心から笑うのは。

そうしているうちに、本格的に日が沈み始める。

そろそろ、宿に戻る時間だ。今日は、色々なことがありすぎた一日だった。

「本当は、色々と聞きたいことがあるのですが、今日はやめておきます。……いいものを、見せて頂きました。また、次も機会がありましたら

「借りができたな、何かあつたら、いつでも言ってこいよ

そう言つてくる一人に、俺も頷いた。

「いや、一人で見ようと思つてたけれど、大勢で見るのも、悪くないな。……いい歌も、聞けたしな」

そして後半は、照れくさいながらも、トゥーレーネに告げる。

【Babylon】にログインして15日後、その夜宿に戻った俺は、久しぶりに深い眠りについた。

簡易登場人物パラメータ

【トルル】LV・24

職種：シーフ盜賊

主要武具：双剣

属性：闇

性質：臆病者・優柔不斷・裏方

【トゥーレーネ Lv.15】

職種：^{パート}吟遊詩人

主要武具：棍^{こん}

属性：風

性質：純真・温厚・歌姫

【ローザ Lv.27】

主要武具：^{レイピア}細剣

職種：^{ウォリアー}戦士

属性：霧（水）

性質：冷静・慎重・女帝

【リュウ Lv.26】

主要武具：^{グラン・ソード}大剣

職種：^{ウォリアー}戦士

属性：地

性質：豪胆、勇猛、ギャンブラー

十話（後書き）

眠い中勢いで書き上げたけど、少し無理くりになっちゃったかも。とりあえず投稿、してみます。

10 / 22 12:00 起床後、誤字修正

正直関係するといえはするししないといえはしないんですけど、「↙とかパラメータの設定どうしよう、とか。多分数字書いてもしょうがないんで、STRとかINTとかは必要な場面とかを除いて省かせて頂きますが、ご了承ください。

後、作者の甘えなんですが、もしも性質で良い単語、ご存知でしたら教えて頂けたら幸いです。思つてなかつたキャラが出現した時に地味に考えるの楽しいんですけど、時間がかかりそんなんで。…あ、『地味』もありだな。うん。

【Babylon チュートリアル開始 16日目】

窓から差し込む光と共に、俺は眠りから覚め、目を開けた。
不思議なものだ、現実にいたときは、起きるためには、目覚まし時計が必須だったのに（むしろそれでも一度寝デフォルト……）、ここに来てからは、朝日が差し込むと共に自然と目が覚めるのだから。

この一週間で見慣れた、木造の一室。

俺は、オブジェクト化したままの双剣を取り、いつものように食堂へと向かう。

ここは、始まりの街『バベル』西部にある名も無き宿屋の一つだ。恰幅の良いおばさんのNPCが経営している（基本AIが『アル』に影響されているようで、結構会話が成立するのが驚きだった）、朝飯が美味しい俺の住処。

他はレンガ造りのモダンな雰囲気であるのに対して、ここは木造で大通りからも外れた場所にあるため、俺以外にはここを使っている人間は今のところいない。

そもそも、200万人以上が同時にログインするのもザラである世界だ。

現在ログインしている15000人程度なら、この街だけでも余裕がありすぎる。

しかし、人気があろうがなかろうが、目の前にあるのはふかふか

のベッド、清潔なシーツ、そして朝日が挿し込む東南向きの窓。

……俺の現実の家である、アパートの一室等よりも健康的で快適なのは間違いない。

いまさらだが、この世界について、説明しておこう。

この世界には、フィールドからフィールドの間に、町や村が点在している。

それぞれに和洋中の特徴があり、この『バベル』の街並みは西洋風で表現されている。

そう、西洋風なのだ。

そんな中で、俺が、大通りから離れた便利でも無いこの宿に滞在することを決めたのは、今俺の目の前で落ち着く香りと共に湯気を立てている、それにあつた。

白いご飯に味噌汁。そして、絶妙な塩加減で調理された、いい焼き色の付いた赤身の鮭。

やっぱ朝は味噌汁だろ？…………現実ではカロリーメイトが多かつたが。

ところで、基本的にNPCの作成する料理は、いうなれば普通である。

まづくはない、しかしあざわざ通う程でもない。そんなところだ。
近頃は、『料理人』であるプレイヤーの店なども出てきたようだが、まだまだレバが低いためかそこそこのレベルでしか無い。

例えば、俺がフェイルと会った喫茶店は、実はプレイヤーの経営する店だが、そこはコーヒーに特化しており、他のケーキ等はあまり美味しいではない。…………見た目はいいんだよ？　見た目はね……。喫茶店だからコーヒーが美味しければいいとも言えるが。

しかし、しかしだ。

この宿は西洋風である『バベル』の中で、数少ない和風の食事が
出る宿。

しかも、美味しいのだ。昼や夜は別の場所で食べたりするが、俺は
まだここ以上のものを食べたことはない。

もちろん、そんな例外なのだから、その分不都合もある。

俺はここに来てから一週間、ずっとこのメニューを食べ
続けている。

何故か？

それは、このお品書きを見てもういたら理解してもらひえるだらう。

＼お品書き／

朝の部

焼き鮭定食（味噌汁・卵付き）・・・50ナール。宿泊の方は無

料。

昼の部

焼き鮭定食（味噌汁付き・漬物付き）・・・50ナール。

夜の部

焼き鮭定食（味噌汁付き・大根おろし・漬物付き）・・・50ナール。

nr。

烏龍茶・・・10ナール
ビール・・・30ナール
白雪の酒・・・100ナール

攻撃力アップ効果 稀にステー

わかつたか？……いや、感想はいろいろ。

きっと、ありとあらゆるツッコミせこの一週間で俺が終えている（果たして誰だ、こんな宿を作ったのは……）。

それでも美味しい。しかも和食。俺は、これを越える『料理人』プレイヤーが出るまでは、ここで食べ続けるだろう。

…………早く出てきてくれないだろ？　頑張ろつよ生産職の皆さん。

「ホン。

ところで、初めてここ登場願つたが、ここでの通貨は共通でコードナールといつ。

基本的には、1コード = 10円で考えてくればいいと思つ。

ちなみにだが、モンスターを倒してもお金は得られない。
代わりに落とす、素材アイテムなどを売却することことで、日々の収入を得られることになっている。

これが曲者で、プレイヤーのキャラクターのみならず、NPCですら値切つてくる（誰だよこんな仕様考えた奴……）。

しかも、全体での流通により相場が変わるため、例えば季節によって素材の購入金額が変わる。

現在の俺はと言えば、情報収集のため（本当だぞ？）、雑魚モン

スターの落とすレアアイテムなども効率よく集めることができたのと、『言霊』の情報をローザに買い取つてもらつたため、結構裕福である。

せつかくなので、『言霊』についても少し言及しておこうか。

『バベルの塔』の中は、迷宮型のダンジョンとなつていて。

広さとしては、500m四方のダンジョンが上空まで100層積み重なつてゐる積層型。上空から『バベル』を見たならば、綺麗な四角形が二つ重なつてゐるよう見えるだろつ。

1階層ごとに、次の階層へ至る為の広場には、一体の『守護獣』、つまりボスモンスターが存在する。そして、厄介極まりないことに（すいません考えたの俺達です）、一定期間でその『守護獣』ガーディアンは復活し、再度倒さなければ広場を通過することはできなくなる。

しかし、ただ一つだけ、各階層の広場にある『言霊』を開拓することと、『守護獣』ガーディアンの復活もなくなり、街にある『マルドウク神殿』から、塔の開放された広場に転移することが出来るようになる。

ちなみに、これまためんど……いや、凝つた造りになつており、『言霊』の出現場所はある程度以上には決められていない。

何故ならば、それはモンスターに宿つてゐるからである。

モンスターを倒せば、『言霊』の封じられた水晶がドロップし、その水晶を塔の内部の広場にある対応する窪みにはめれば、開放されることになるのだが、このモンスターがまた曲者なのだ。

一度誰かがマークすれば、居場所が判明するものの、特殊な技能スキルをもつてゐるものや、やたらと逃げ足が早いものなど、一筋縄ではいかないモンスターが、決められた範囲のフィールドやダンジョンのどこかに湧出する。ボップ

…………一応言つておぐが、このアルゴリズムを考えたのは俺じゃないからな。

これは、難易度に文句が多いコーナーのスレとか見てほくそ笑むような、額に『ドリ』って書いてそうな先輩の作品だ。

ちなみに俺も全容は把握していない、なぜなら、俺ももちろん【Babyon】が完成したらやりますよ、って言つたらさ、「じやあお前は知らないでいい」、って言われた……あの人本物なんだよ。自分の仕事量増やしてまで、ゲームの中の俺に必死で『言靈』探させたいんだよ……。

以上だ。わかつてもらえただろうか？ 思考がだだ漏れでいるのはいつものことだと諦めてくれ。

「ふう、やはり朝飯は味噌汁がいいな」

俺が満足してそう呟き、いつものようにいつもの朝食を平らげた時だった。

ガチャ、と木の扉が開き、宿に人影が入ってくる。

怜俐かつクールな眼差しに似合う眼鏡。

笑うと怖い、とても珍しい女性が、そこにいた。

もちろん、銀の騎士団長補佐、ローザその人である。
ギルドマスター

そういえば先日別れるとき、トゥーレーネの宿などについて任せっきりにしたのだったが、「明日、何点かお伺い出来なかつたお話をあるのですが、大丈夫でしょうか」と言わされたのだった。

いつらに気がつき、頭を下げ、近づいてくる。

何故か、自然と背筋が伸びる俺。

……出会って一日にして、既に苦手意識が芽生えた俺は、

今日の平穏な朝は短かつたな、などと思いながら、立ち上がった。

一話（後書き）

今回は短めですみません。

生みの苦しみと読む楽しみ。

はい、今日は他の小説読んで、書く時間が短かった作者です。

前回で凶切れたかは怪しいですが、今回からは「一章」と「二章」と二通りになります。

話が進むかとおもこきや……お品書きにあったので、「一章」の第一話はお金の単位とか、諸々の説明にあててしましました。

通貨単位、『ナール』はイラクのティナールからとつてきました。

何でイラク?といつて、バベルの塔のモデルとして最も有名なのは、は、「ウルのジックグラト」というものだそうです。

ウルは、イラクでバグダッドからクウェート方面に350kmほどの場所にあります。

ちなみに、バベルの塔のあつたと言われるメソポタミアの古代都市「バビロン」。古代メソポタミアとは、主にティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地帯で、イラクの殆どがその地域に該当します。

そんな感じで通貨を決めてみました。
読んでいただきありがとうございました。

I | 話（前書き）

10 / 23 13 : 40

ローザとの会話内容を改稿しました。

俺の周りの風景が、どんどんと流れしていく。

今俺は、過去最高の速度で走っていることだらう。きっとオリンピック選手も真っ青だ。

「こ」は、『バベル』の街から南に広がるフィールド、『紅の平原』。

視界を流れるのは、赤土が延々と広がる平原とそこにそびえるむき出しの岩肌、それをといひに覆う、もじりとした形状の縁色の植物たち。

高さにして、俺の腰ほどまではあるだらうか、丸い形状は、とても柔らかそうだ。

もつとも、実際に近くまで行けばわかるが、表面は細かく鋭利な棘が並んでいるため、取り囲まれ押しつぶされた日には、一瞬でHPが削られてしまうだろうが。

しかし、遠目から見るそれが立ち並ぶ光景は、正直癒されなくもない。

……今俺が、まさにその植物型のモンスター、『モコ』LV18の群れに追いかけられているところでなければ、だが。

(なんだよ)の俺の全力に付いてくるモンスターは!? こんな仕様に作った覚えはないぞ……?)

俺は涙目で毒づきながら、必死に足を動かす。

今にも、俺の背後に迫ろうとしている『モウ』。

元々は、非アクティブ系（こちらから攻撃を加えない限りは何もしてこない、その代わりなかなかレベルが高く強い）の植物モンスターのはずである。もちろん、植物だけあり、そこまで行動速度も早くはない。

そんなモンスターが、何故こうして、基本職の中で最速を誇る盗賊である俺のスピードに付いてきているのか、それは、その群れの中心にいる一際大きな『モウ』の額に、『言霊』を宿した水晶が埋め込まれているからである。

そう、以前に話したよな……俺の開発者の先輩に、『ドS』の人

がいるって。

つまり、そういう事だ。

（…………動かないことが条件で強く設定したモンスターに、スピードを加えてんじゃねえ!!!!!!）

そんな心の叫びは、届くはずもない。

届いたとしても、あの人はこいつだらう。

「……うん、頑張れ」

それも、とても良い笑みで。

何故こうなつた。

俺は必死で足を動かし、走り続ける機械と化しながら、これまで

を思い出す。

そう、俺は甘く見ていた……あの、クールな才媛を。

「…………」今は、良い喫茶店ですね

ローザが、店内を見渡しながら、そう呟く。

俺は、落ち着いた場所で話をしたいというローザを連れて、フュイルと出会った店に来ていた。

NPより喋らないプレイヤーである、そのマスターは、無言でいつも通りの美味しいコーヒーを入れてくれる。

…………」それで、ゲーム内にデフォルトで煙草^{タバコ}があれば完璧なのだが、まだ無い。

まだ、というのは『アーテックシステム 錬金術師』のプレイヤーが、今開発中との情報掲示板（ウインドウから確認できる、ゲーム内のコモニティだ）が上がっていたのを昨日見たからだ。

その名も、スレッド【素材持ち禁断症状者求ム】。

これまで余裕がなくてみていなかつたが、結構あちこちで普通に生活するための話し合いもあるらしい。

先日のような人間もいるものの、基本的には皆、前向きになろうとしているようだ。

それとも、忘れるためにいつも通りを貫こうとしているのか。

生産職でも、戦闘はできる。何故か『料理人』は結構強くなるこ

とが可能で、下手したら盗賊などより肉弾戦に強かったりする。まあ、戦闘用技能^{アクティブラジカル}が無いから、本気でやれば別だが。

そんな中、『鍊金術師』は戦闘に向いていない。その代わりといつては何だが、この世界に存在しないもの（理論や構築の完成などに時間と労力、それにセンスが必要となるが）を、作成することが可能となっている。

例えば、それこそ煙草^{タバコ}とかな。

なので、その供給を欲する需要者達が、素材を集めて提供する事になる。

もちろん、俺も参加しようと思つていてる。

そんな事情もあり、俺は早く行動したいのだが、ローザの話とは何だらうか？

そんな事を思つてると、ローザが話を切り出してきた。

「何点か、お願ひと」報告が

「昨日のことについてか？」

俺は、そう尋ねる。

「……ええ、それもあります」 それにそつ頷いて、ローザは話を続けた。

「まずは、先日捕られたものの処遇についてを、彼等は、私たちのギルドに加えて、他の大手ギルドである『探求者の集い』『円環の理』も含めた3つのギルドで管理する、『牢獄』に入れることになりました。ここでは、被害者の許しがなければ、解放はしません」

「……成程。つまり、【Babylon】の三大ギルドで、警察の役割を果たしてくれると、そういうわけか？」

「はい、この状況で早急に取れる対応としては、最善かと。元々、ご存知のようにMMOでは、プレイヤー同士の問題は、できるだけ当事者たちで解決するのが求められていましたから。もちろん、権力の集中を避けるため、平等の立場として、共同で管理を行うことに決定しています。また、無力化した犯罪者プレイヤーを『牢獄』に転送するための道具も、現在ギルド内の『鍊金術師』アルケミスト達が作成中です」

「わかつた、俺も異存はないし、むしろあっても、その三大ギルドに逆らいはしないぞ」

ローザの説明に状況を把握し、俺は頷いた。

そもそも、今回は偶々（たまたま）当事者であつただけで、元々俺個人でどうにか出来る問題ではない。

他の一大ギルドについては、あまり詳しくはないが、悪い噂も聞かないし、何よりフェイルとローザがいるのだ（いざとなつたら強面のリュウもいるし） もうとつまくやつてくれるだろ？

「もう一時点の件ですが、トウレーネさんは、ギルドの女性プレイヤーのもとにいていただいている。……やはり、貴方以外の男性の方にはまだ抵抗があるようとして。基本、我々のギルドには比較的女性が多いとはいえ、トウレーさんは美人ですから目立ちます。トルさん、いつそ一緒に住みになつてはいかがですか？ ギルドに協力いただいた見返りとして、住居くらいは融通できますが」

「ゴホッ！」

俺は、後半の言葉に口をつけっていたコーヒーを吹いてしまつ。

(…………絶対今の、タイミング見計らって言いやがった)

「……[冗談]ですよ」

そんな俺に澄ました顔を向けながら、ローザはやつて言った。明らかに楽しんでいる。咲さん、ここにいためっ子がいます（涙）

「ナント、カラダーワルイジョウダンダ」

「何故片言なのですか？」
なじゅべ

（あんたが動搖させるからだよ！　つていつかわかつて言つてゐるだろ絶対）

俺は心中で、表情を変えずといひと笑えない[冗談]を言つローザに突っ込む。

これ以上言葉に出さないのは、ほら、解るだりつへ、じりせ、そこからまたいちめ…………いや、やめよつ。

長いものには巻かれる。強いものには逆らわない。

そう、それが平和に過ぐす方法だ！

この女性に逆らうくらいなら、一人でモンスターの群れに突っ込んでほうまだましな気がする。もちろん特攻なんでしたくはないけど。

俺が人生の何たるかを残念な方向に悟つていると、ローザが更に続ける。

「後、これが最後です。確認なのですが、トールさんが持つてゐる情報を共有するというのは、フェイルにもおっしゃっていたとお聞きしていまます」

「ああ、もちろんだ」

最初の一いつのつこでのつて聞いてくるローザに、俺は頷いてみせる。

情報の独占等する気もなし、あなたに逆らつなんてとんでも……

……いえ、何でもないです。

「…………その言葉で、嘘はあつませんよね？」

「？　ああ、べどいぞ？」

念を押すローザに、俺は疑問に覚えつつも、そう答える。すると、ローザの目が、にこやかに微笑の形をとった。

(……………)

背筋に冷たいものが走る。……あれは、獲物が網にかかったのを確信した目だ。

そして、身構える俺にて、ローザはくへつと爆弾を投下する。

「…………では、お言葉に甘えてお伺いしたいのですが…………現在の状況を、貴方の同僚が解決する可能性は、どのくらい残されていますか？」

「…………！」

油断した後に警戒して、その警戒心すらあつさり乗り越えられた俺の顔に、じつじようもなく狼狽^{じはう}が走る。

「…………！」

何とか俺は声を絞り出した。

そして、それを見てローザは、今度は形だけの微笑ではなく、本当にニーッ「ひとつ微笑み、俺に止めをさしてくれた。

「確信したのは、たった今です。フェイルもそうなんですが、男の人はどうしてそんなに表情が出やすいんでしょうか」

その言葉に、簡単に引っかかり過ぎではないかという哀れみすら乗っているように感じ、俺は内心で呻く。

「ええ、腹芸なんてできない、素直ないい子だと言われてすぐすぐ育ちましたとも。168cmだけどな……ぐつ。

焦って変なことを考えた上に、自爆思考を行なっている俺に、ローザは淡々と告げていく。

「……私はMMO通信の愛読者でした。もちろん、【Baby】紹介の談話記事も読んでいます。内容は、ご存知ですよね？」

（坂上さんの記事か、あれで相当いじられたんだっけ？）
（そう思い当たった俺は、黙つて頷いた。）

「私が、今の状況に陥った際にまず思い出したのが、そのことです。元々、このようなゲームの開発に携わる人も、同じようにMMORPGをプレイするといふことが、当たり前の事なのに、私には新鮮に感じられて、印象に残っていた……そして、その人ならば何らかのアクション起こすのではないかと、そう思いました」

「……」

「でも、そんな行動を取る人間はおらず、貴方は全く目立ってい

なかつた。もしかしたら、そんな人間はいないのではないか、とまで考えていました」

……地味な裏方で申し訳ない。

「ただ、ある時あなたに注意を惹かれる事があつた」

「…………ビリだ。『言霊』の情報を渡した時か？」

「それは、空想が、懸念に変わつた時です。……貴方は、他のプレイヤーにモンスターの情報を紛れ込ませていましたね？ 目立たず、でも目立つ人間の言葉を補足するなどして」

俺はただローザの言葉を待つ。
そんな俺を見て、ローザは続けた。

「あるとき、私の情報に貴方は書き加えた。そこであなたの名前を知りました。私が書いたのは『深淵の森』の『トレント』という植物モンスターについて…………貴方が書いたのは、そのモンスターに『光』属性の攻撃を加えると、成長してしまうという注意点」

確かに、そんなこともあつたような気がする。
俺が情報を公開し始めて少し経つた頃だ。

「その時は、まだ何も思いませんでした。ただ、フェイルが『光』属性のため、伝えておこうと記憶にとどめただけです」

「『』存知のよう』に、このゲーム内での掲示板には、中傷行為を減らす狙いでもあるのか、匿名ではなく、必ずアバター名が表示されますね？ 私は、その後もあなたの名前を何度も見ました。正確な情報をもたらす情報屋プレイヤー。そんな風に考えていました」

「そして、貴方が銀の騎士団に、『言霊』の位置の情報を持つてきました……。その時、貴方が『闇』属性だと知った。それでもまだ、誰かとパーティを組んでいるんだと思いました」

それはよく覚えている。

必要な素材の話題と関連から、属性を話したのだ。

「…………ただ、貴方はその後のファイルの誘いを断つた。ソロでやると、団体行動が苦手だから誰とも組んでいないと、たしかそのような回答だと聞いています」

「ああ、その通りだ」

「では、何故ソロで活動している『闇』属性のあなたが、他の属性、それも貴方とは反属性となる（光と闇のよう）に属性にも相性が存在する） 攻撃を受けたモンスターの影響を知っているんでしょうか？」

「…………」

俺は、その言葉に黙りこむ。しまった、そんなところで……。そう思つがもう遅い。

「それで貴方の提供している情報を調べました…………少しだけ、情報の質に反して収集スピードが早すぎましたね…………おそらく、情報が足りないことでの『死亡』を抑えるためだったのでしょうかし、その事から、貴方が敵ではないと、巻き込まれたうちの一人なのだ

と判断したのですが

そこで、ローザが一回言葉を止める。

「…………そして、懸念が予想に変わったのは、先日の一件リュウなどは、いい場所見つけやがったな、と言つておりましたが、あの場所、元から知つていましたね？」

「…………本當は、一人で行くつもりだつたんだが、あの日の俺は少し浮かれていてな。他の人に見せるのも、いいんじゃないかと思つた。どうするんだ？ この事を公開するか？」

そんな俺の言葉に、ローザは首を振る。

「いいえ、今日は確認をしたかつただけです。…………個人的に、隠しておきたい気持ちも理解できますし、何より公開したところで何の利益もありませんからね。必要な人物にはともかく、口外する気はありません」

そこまで言われた時点で、俺に選択肢はなかつた。
静かに認める。

「あんたの思つてゐる通りだよ。まずは、最初の質問に答える……おそらくだが、後五年は無理だ」

「…………五年、ですか？」

「『アル』はな、本当に優秀なんだ。さらに言えば学習もするし成長もする。そして、この【Baby】の根幹部分に関わっている『アル』を何とかするために、同等のAIじや駄目なんだ。性能面で、遙かに超えたスペックでないと、な。……どんなに早くても、そこまでものが開発されるまで、五年はかかるだろう

「成程、では、例えばその五年間、無理をせずじいじで生活すると
いつのはどうでしょうか？」

「……それも、俺個人としてはおすすめしない。言つただろう？
最短で五年だ。もしかしたら十年かもしれない、そんな時は、来
ないかもしない。それだけの時間、現実から離れて、本当に戻れ
ると思うか？ 社会的にも、肉体的にも……精神的にもだ」
覚悟を決めた や、決めさせられた俺は、ローザの質問に
淡々と答えていく。それは、俺が一週間の間、ずっと考えていたこ
とだったから。

「わかりました。では、貴方の持つている情報は、どんなものが
あるのですか？」

「雑魚モンスターの仕様と、ある程度の技能取得イベント……後
は、昨日みたいな、攻略には関係のないものばかりだ」

ローザの次の質問に、俺は自嘲気味に答える。

「……成程、わかりました。それは、何かあればその度に聞くと
しまして。では、そんな貴方に手伝っていただきたいことがあります」

役に立たなくてすまない……そんな俺の内心をわかっているうな
のに、ローザは気にした様子もなく、俺に囁つ。

「……何でも囁つてくれ、できることは、やるつもりだ」

「『言霊』のモンスターの居場所は、おかげで判明しました。た
だ、問題が一つ生じております」

「問題が？ 何だ？」

殊勝にそういう俺を見て、真顔でローザが説明する。

「どうも、そのモンスターが手強いようにして、敏捷に優れたプレイヤーが必要なのです、あなたのような。……本来は壁役を犠牲

にしてクリアするのかもしぬせんが、チユートリアルとはいえた
いいえ、だからこそ、誰も『死亡』を出さずに倒したいので

す

「…………わかった、俺は、何をすればいい

先ほどから思つてはいるが、正直ローザには脱帽している。彼女に逆らうくらいなら、モンスターの中に放り出されたほうがましだと、本氣で思つていた。

…………」の時までは。

ローザが、その返答を聞いてニッコリと笑つた。いつものあの笑みだ。

もはや条件反射的に、俺は身構える。

「トールさんこよ、囮として、モンスターの中に突っ込んでいただき、指定の地点まで引き寄せていきます。もちろん逃げるルートは確保いたしますし、計算ではトールさんのスピードなら、大丈夫、のはずです」

あつさり警戒など乗り越えられる。

つて学習しろよ俺。さつきと同じパターンじゃねーか……

といいますか、あの……比喩でなく、本当にモンスターの中に突っ込めど？ さつきマシとか言ってごめんなさい。覚悟はあつさり崩れ、情けない目で見る俺に対して、ローザは笑みを絶やさない。

これが噂の『二重の束縛』
ダブル・バインダ

前門の虎、後門の狼、といつやつですね。わかります。

そして数秒後、俺は力無く頷いた。

そして今、俺は走っている。

背後には結構距離を詰められていく気配がブンブンしている。

はつあつ言って、怖い。

俺のこの何ともいえない感情は、モンスターを作った先輩に向ければいいのか、状況を作ったローザに向ければいいのか、はたまたこんな世界に追い込んだ『アル』に向ければいいのか。

とりあえずわかつていることは、誰であれ言い負かされて終わるだろう、ということ。

俺に出来ることは、この先の地獄まで『モロ』達を誘導することだ、ということである。

誰か、誰か俺に癒しを……………『モロ』がスピードを上げる。

お前じゃねーよ、勝手に心読んど貳心するさじやねえ！

半ば涙目になりながら、俺は走り続ける。

何とか作戦が成功した後、その日一日は、ぐつたりと何も出来なかつたのは言つまでもない。

一話（後書き）

はい、今回の主役はローザさん。取り敢えず開発者バレしました。

そして、隠れ主役は『モコ』です。僕の描写では、おそらく表現しきれないため、参考画像はひらりの一枚目の写真ですね。

<http://1abaa.com/archives/51697856.html>

こいつがもうちょいでかくなつて、高速で追いかけてくるところを想像してみましょう。しかも追いつかれたらアウト……その時トルの気持ちがわかつて頂けたら、幸いです。

トル、生糀の裏方でありながら、主役級美女が裏で動くのを好みことで表にはじき出される男……

では、予約投稿して眠りにつきます。誤字脱字は起きたら見ます。
○
読んでいただき、ありがとうございました。

「指摘を頂き、設定書き追記
後三話後位に登場します（予定は未定）、何か急に思いついたりしなければ

「」の世界の属性

『反属性』

火 地 光 無
水 風 閻

アイテムにも様々なもの（回復役や投げつける攻撃アイテムから、設置型の罠など）があり、回復役などは属性なし、ダメージ判定を持つものは各属性をもちます。

それが自分の属性であれば効果が二倍、反属性であれば使用できない、または特定のアイテムは使用出来ても効果が半減します。なので、『闇』属性のトルは『光』属性の攻撃はできません。でも、公開しました、迂闊。

しかし裏方はその人生経験から、誰かが自分のことを注意して見ているとは想像しないのです。なぜなら目立たないからこそその裏方。

無属性プレイヤーは、どの属性アイテムでも使えます。また、自分が属性関係なく何でもアイテムを使える職種・性質もある予定、どう出すかは微妙。

ちなみに言うと、生産職は、全て無属性となります。

以上、おいろいろ色々情報出してくれます。

閑話 ある開発者の一幕（前書き）

お陰様で、10万PVを超えていました。
感謝の念に絶えません。

ちなみに、少しローザとのやり取りに違和感との感想をいただき、「二章一話、ローザとの会話を修正致しましたので、『』覧になつていただければ幸いです。

今回は閑話です。

言つなれば三人称と、ゲーム外の世界を描く練習ですが。よろしければ「」覧になつて下さい。

本編続きは書け次第今晩、無理なら明晩投稿いたします。

関話 ある開発者の一幕

（西暦2027年10月24日（日） ある開発者の休日）

事件から、一週間が経過していた。

それが世間に発表されてからは、激動の一言にて死んでしまった。広報の電話は、今も鳴りっぱなしでいた。

マスクハマ連日、無責任な報道を続けている。

VRMMOとは何か、原因は何か、ネット社会に生きる若者との問題に至るまで、自称専門家が語っていた。

ある意味、ここまでVRMMOが世間のすべての人間に認知されるのは初めてのことだろう。

ネット上では、『羨ましい』と『不謹慎』という言葉が連日バトルを繰り広げ、その騒乱はどどまるところを見せない。

中には、本當はすぐにでも救出できるのに、VRシステムのデータを取るためにプレイヤー達を犠牲にしている、などといつ陰謀論まで飛び出す始末。

これも、自称専門家が、仮想現実に取り込まれるなどありえない。ログアウトせることは理論的に可能なはずだ、といつれも都合の良い希望的解釈を語っているからだ。

本当に現場にいる晃達からすれば、「誰だお前」と言いたいところだが、そんな機会は訪れることがない。

（実際にここに来てみる。この状況で何が出来ると言つたんだ）

そんな情報の氾濫に吐き気を覚えながら、須藤晃は田の前に開い

たＰＣのブラウザを閉じる。

よく、営業に行つた先でその筋の人間と間違われるその強面の顔は、今も不機嫌そうに歪んでいる。

晃は、缶コーヒーがなくなっているのを見て、ついでに煙草を吸いに行こうかとポケットの小銭を取り出し、習慣で斜め前の席に目を向けた。

空席。

晃の遊び道具が居たはずのその席は、この一週間、埋まることがなかった。

どこにいるのかはわかっている。

今月、嬉々として自分の作ったモンスターを倒しに、その世界に旅立つた男は、休暇が明けてもなお、晃の元に戻っては来なかつた。

「…………」

晃は、無言のまま席から立ち上がり、喫煙所へと向かつた。近頃は、どこも愛煙家には厳しい世の中だ、オフィスから出て、わざわざ指定の場所まで歩いていかなければならない。

税金は上がり、場所は奪われる。全く、ままならない世の中になつたものだ。

ビルに囲まれた一角。黄色のラインで区切られた、晃のような喫煙者が集うその場所だが、今日は本来ならば休日であることも先立つたものだ。

つて、人間の数はまばらだつた。

そんな中、紫煙をたゆたわせている見知つた顔を見つける。

その男は、近づいてくる晃に目を向けると、吸っていた一本を灰皿に押しつぶし、上着の胸ポケットから新しい一本を抜き出した。どうやら付き合つてくれる気らしい。

男の名は海堂圭一。
かいじょうけいいち

180cmを越える身長に、細長い手足、この業界に来るまではモデルをやつていたという変わり種。晃の同僚にして、内外に評価の高い、腕のいいグラフィックデザイナーだ。

プログラマねだである晃とも仲がよく、よくあいつで遊んでいた。確か、強請ねだられて、色々細かいグラフィックを作っていたはずだ。

「……暇そудаな」

圭一が晃に声をかけてくる。

「……お前にそな」

晃はそう答え、自分も煙草に火をつけ、ふつ、と白い煙を吐いた。煙が、空気に混じり合つて、消える。

現在、オフィスには【BabyOne】開発に関わったうちの半数が詰めていた。

あれだけの騒動の後、どこから嗅ぎつけてくるのかマスクマスクミミが家まで押し寄せてくることもあるためと、「待機」という名前で人がいなければならぬため、晃達は開発メンバーは交替でここ、【BabyOne】システムにアクセスするビルに来ている。

……何かが出来るわけでもないのに、だ。

『アル』にその端末のアクセス権を奪われた今、晃達にできることが何もないのが現状である。

やつていることといえば、プログラムコードを見て、バグを発見してしまうことくらい。

発見できたとしても、修正を行うこともできないというのに。と、うかあの馬鹿、致命的なものはないにしろ、バグを何個か残してこきやがった。…………影響がないといいが。

晃はそんな事を内心で思つ。

あれから、『アル』は、現状の状態とそれに関わる全てを全世界に公開した後、誰の前にも姿を見せていない。

文字通り、ネットワークの波の中に消えてしまった。

その後、調査を行うメンバーから、物理的にサーバー、そして『アル』の本体があつたスーパーコンピューターを破壊するという案が出て、検討された。

晃達からすれば、馬鹿なことを言つた、といったところである。

21世紀初頭から始まつた、データのクラウド化によつて、今はプログラムや、それに関するセーブデータなどは、世界中のデータセンター（保存する場所で、地震などの災害のないとされる場所）に多く配置されてゐる為、様々な業界のシステムがそこを用いている（分割され、暗号化されて保存されている）に分割され、暗号化されて保存されている。

ソフトウェア（簡単に言つと、Hクセルやワード、のような

プログラムのことだ）　　が『アル』に抑えられているなら、ハードウェア（これはPC本体のような機械のことである）を壊せばいいと思つたらしいが、そうするのであれば、その中のものを区別して壊すことなどできはしない。

わかるだろうか？　PCが壊れれば、何の変哲もないデータも、奥底に隠してあるかもしれない1-8禁データも、これまで集めた色々な情報がもれなく失われるのだ。

そして、バックアップごと壊さなければ、今回は意味が無い。何せ、壊れても大丈夫にするためのバックアップシステムだ。メインだけ破壊しても意味はない。

特に、世界初のVRMMORPG【Baby10】のデータ量を舐めてもらつては困る。

15000人のために、様々なサイトの、様々な情報を壊して、さらに世界規模のネットワークに、経済的にも物理的にも影響を与えていいのならば別だが。

しかもその場合でも、プレイヤー達の安否は不明。いざとなれば電腦世界に潜り込めるほどの性能を持つ『アル』に、影響があるのかも不明。

言つまでもなく、割りに合わなすぎる賭けだ。

………… いっそそれならば、あの馬鹿で素直な遊び甲斐のある後輩が、クリアして戻つてくるのに賭けるほうがまだましだ。文字通り、苦渋の選択だが。

「……無事、帰つてくるだらうか」

「帰つてくるわ」

圭一の眩きに、晃は反射的に答える。
そして、内心で願い、謝罪する。

(…………すまんな透。相当難易度は高いだらうが、死ぬなよ)

『言霊』の配置と、ボスモンスターの設定を担当したプログラマとして、晃は自分の作ったものを考え、遠くを見た。そしてその立場上、そして事件の性質上決して言葉にはできないが、思う。

(…………無理かもしれん)

今頃、どうなっているのだろうか?
起きているのは、混乱か、それとも……命をかけてまで、攻略なんでものをしている奴らがいるのか。

晃の記憶が正しければ、最初の階層の『言霊』のモンスターは、特にハードな造りにしてあつたはずだ。

物事は初めが肝心だからな、等と嬉々と設定をきつくした自分を今となつては殴りたい。

それを含め、考えれば考えるほど、あれを死なずにクリアするなど夢物語だと思つ。特に……中層以降にかけては。

おそらく、あの愚痴の多い後輩なら、勘弁してくれと叫ぶだらう。涙目になりながら、それが更に遊び心に火をつけるのに気づかず。

そう思い当たり、本当に不謹慎ながら、晃は笑う。
そして思う、それでも、帰ってきて欲しいと。

ビル街に、風が吹いていた。

何も出来ず、自分の構築したものが人を殺すかもしないことに
実感を持つず……。

晃は今日も一日を過ごしていた。

ただ、この悪夢が早く終わることを願いながら。

関話 ある開発者の一幕（後書き）

以上、トールのボヤキに出てくれるDの先輩と、煙草1カートンで綺麗な風景を作ってくれた先輩たちのいる、現実世界の一幕でした。

一応

主人公 ^{トール} = 透

Dの先輩 = 晃

深淵の森の「デザインでお願いした相手」 = 圭一

になります。わかりにくいと思いますが、失礼しました。

本当にこの後にすぐ書きたかった話が続く予定だった（というかこの話はそこまでのつなぎだったはず）んですが、合わせると量が微妙になりそうなので、先に投下することに致します。

おそらく後一時間ほどでもう一話投稿しますので、読んでいただけている方で、ちまちま読むのが嫌という方は少々お待ち下さいませ。

一応区切つてはあります…………間違いました、区切つたつもりです。

【チユートリアル開始 20日後】

先輩を恨みながら、ローザに毒づきながら、『紅の平原』を『モロ』を連れて走りまわったあれから4日後、俺はギルド『銀の騎士団』の本部になつている建物に来ていた。

「あ、トールくん」

建物の前にいた俺を見て、ちよつと買ひ物から戻ってきたらしくトウレーネが声をかけてくる。

出合つて一日田、ものすゞぐ丁寧な敬語で話していくトウレーネに、どうにもむず痒くなつた俺が、慣れないからできたら敬語はやめてくれないか、と言つたら、たゞたゞしい変な言葉遣いになつて少し萌えた俺だ。

……きっと間違つていないと信じている。

まあ、その後さすがに、普通に喋りやすいままでいい、と言つたら戻つたが、「さん」は「くん」になつた。

これもまた……いや、自重することじよ。

隣にいる、トウレーネよりもさらに小柄な女の子にも頭を下げられる。鈍色の髪を後ろ手にまとめ、歩くごとにその髪が揺れるのが可愛らしい。

その後から、ローザの紹介でトウレーネと一緒にギルドの所有する建物に住んでくる、銀の騎士団所属の『アイナ』という大人しい

女の子だ。職業は『僧侶』、人選はさすがローザとでもいつか、トウレーネとはどうやら波長があつたようだ。

ダンジョンに行く前に買い物に行つたり、食べ物を探索に誘つたりと、あんな事があり、普段は二コ一コとしているものの時折暗い顔をするトウレーネに気を遣いつつ、あえて普通に接しているように見える、無口だが優しい子である。

「今日は早いんですね。すいません、ちょっと待つて下さい、すぐ用意してきます」

つられて頭を下げる俺に笑顔でそう告げると、トウレーネはアイナと建物に入つていく。

「……そんなに急がなくてもいいからな」

俺は、足早に去つていく後ろ姿に声をかけ、壁に近づきもたれかかつた。

……まだ、そんな素直な笑顔を向けられると戸惑つてしまつが、さすがに三日目ともなると少しづつ慣れてきた。特に、ローザにいじめられた後などにそうされると、泣きそうになる。癒し成分が足りていないので、きっとあの人もトウレーネやアイナちゃん見習つといふことと思つ。

ゾク！

不意に背筋に寒気が走る。

恐る恐る、俺が本能が警戒を告げる方向、すなわち上を見ると……ギルド本部、その三階の窓から、ローザが微笑んでいた。

(何……だと……、とつとつ遠距離での読心術が……)

俺がその田線に静かに棲き固まつてゐる、面田そつじ口元に笑みを浮かべ、ペコリと頭を下げて見えなくなる。明日には大事な一戦を控えているので、おれりべ、これから話しえてもあるのだろう。

ローザさん、俺は怖いです。モンスターに追われるよつもよつぽど貴方という人間が。

注) これは体験に基づいた事実です。

…………気を取り直していこひ、今日は行きたい所があるので。

さて、あの逃走劇の翌日から三日間、俺が何をしていたかというと、俺はバベルの塔第一階層の迷宮を調査していた。

これは、『言靈』^{アーリンゲン}を封じた水晶を得ることができたため、バベルの塔の扉が開き、いよいよ上層への攻略が開始されたからである。

ただ、俺にとつてそれまでと違つたのは、ソロではなかつたといふ点。

俺は、トゥーレーネやローザ、リュウ、ネイル、それにアイナといったメンバーとパーティを組み、探査を行なつていた。

ギルドではない俺と、幹部でもある一人が行動していくいいのか

という質問には、フェイルの許可は得ているので問題ありません、とあっさり答えられたので、その六人（このゲームにおける一番基本とされる人数が、六人なのだ）で行動していたのだ。

何でそういう事になつたか、まずは順を追つて話そつか。

あの、死ぬ思いをして走つた日

俺が何とか指定された地点に『モコ』をおびき寄せると、ローザの用意したギルド所属の呪術師達が、その場に準備していた束縛陣で足止め、そして、ネイルを始めとする『火』属性の魔術師が用意していた詠唱を重ねて一気に焼き払うという見事な連携で、一瞬にしてかたがついた。つまり、死ぬ思いをしたのは俺だけ…………しかも美味しいところは持つていかれた

俺は、開発者であることを知られたという事もあり、ローザに一つの提案をした。

それは転職クエストについての、おそらく現在は俺以外は知りえない情報。

現在、この【BabyTown】にいるプレイヤーは、皆基本職のままである。

生産職は、上位職がないため関係がないのだが（そもそも戦闘職とは比べものにならないほど、熟練度と呼ばれる技能の習得にかかる値の成長が半端無く遅い）、戦闘職にはそれぞれ上位となる職種がある。

転職クエストは、初めてバベルの塔を登った時に開放される『言霊』で言葉がわかるようになる、神殿のNPCから受ける事のできるクエストであり、これをクリアすることで、上級職への道が拓ける仕様になっている。

そして、これをチュートリアル期間のうちに開放し、上級職の戦闘に慣れることで少しでも生存率を上げるべきたと俺は提言した。

本来は、これはある程度街の外の初期のフィールドが攻略され、あちこちの情報が集まつた後、第一階層の『守護獣』^{ガーディアン}を倒すことで初めて得られる情報なので、どう伝えるか考えあぐねていたのだが、ローザに話したことと、フェイルの統率力もあり、今のうちに攻略を進める動きが出てきたのだ。

そしてその結果、その攻略部隊の一員に俺も加わることになり、更には元々言つていたように、トゥレーネのレベル上げも同時進行が良いという話が出たため、それならばと、面識のあるローザ、リュウ、ネイルの三人に、同居者のainaを加えたパーティが結成された。

第一階層からこれが、と頭が痛くなるような罠等^{トライップ}を抜け、上層へつながる広場が判明したのは先日のこと。

そして、ちょうど三週間目となる明日、『守護獣』^{ガーディアン}に挑むことになり、今日は休養日とされた。

長かった。この四日間、俺は平原を追い回され、ダンジョンの性格の悪い罠の解除をし、歩いてる途中は胃が痛くなつたりもする(トゥレーネは何故か俺などに笑顔で好意を示してくれる 俺はあたふたする ローザ達からかいの微笑 倦怠^{イモト}し、中々大変だった。…………正直、それでもソロでいるよりも、樂しかつたがな。

そんな中、ようやく俺は四日前の目的を果たせる時間ができたのだ。

そう……聞いてくれ！ 今日こそは、待ちに待っていた、『煙草』を練成してもらうための素材を取りに行くのだ！

…………あれ、反応薄い？

いや、そんな目で見ないで聞いてくれ。

近頃世間の目は厳しいが、この中でなら吸い放題……もちろんマナーは守る。

どんなに吸つても現実の体には影響はないし、現実ほど吸う場所や捨てる灰皿を必死に探し求める必要もない。何故ならアイテムは基本的には使うと消えるからな…………まだ詳細は知らないのだが、考えた奴は天才だ。

完全に自分のための用事だつたため、本当は一人で行くつもりだったのだが、その話をしたところトウレーネも一緒に行つてくれるといつことになり、いつもして今日も迎えに来たのだった。

ちなみに、どうやら三日間行動を共にした人間の中では喫煙者は俺だけのようで、それを聞いた時、俺はリュウさんに裏切られたように感じた。…………何故、何故俺なんかよりタバコが似合いますな外見の貴方が健康志向なんですか、リュウさん！ 、その話に乗つてくれたのはトウレーネだけである。

「お待たせしました！」

俺がそんな回想にふけっていると、扉が開き、トゥーレーネが建物から出てきた。

「チハコ」と笑って言つ。

「一人でどこかに行くのって初めてですかね？ 私も頑張ります、前衛よろしくお願ひします」

そして、ぐつと拳を握り締めるように気合を入れ、そう言つてさくさく歩き出す。 前衛のはずの俺を置いて。

「ちよ、待て待て、張り切り過ぎだつて、第一場所わかつてないだろー？」

そう言つて、慌てて俺も後を追うのだった。

二話（後書き）

本来は閑話みたいな文章が作者にとって自然に書きやすい文章なんですが、軽く重くで書きたいので、日々試行錯誤中。変な部分もあるかと思いますが、取り敢えず話を進めます。ありがとうございました。

四話（前書き）

10 / 24 連続一話程更新致しました。よろしくお願いします

「こは、『バベル』北東に抜けた先にあるダンジョン、『無名の遺跡』。

この奥にある、『火』属性の魔石アイテムが、『煙草』の錬成に必要という事で、俺はトウレーネを伴い先へと進んでいた。

レベル的には、現在開放されている中では、難易度中のレベル。決して楽では無いものの、この二日間、結構な時間を『バベルの塔』内部で過ごしていた俺達にとっては、無理さえしなければそこまで危なくもないダンジョンだ。

古びた石柱が立ち並ぶ通路を越えて、崩れた壁を迂回し、遺跡の中に入ると待ち受けている罠を解除しながら、少しずつ奥へと進む。ここまで何の問題もなく進めていたが、そろそろ最奥部が近いため、モンスターも強くなってくるはずだ。

そろそろ罠も多くなっててくるし警戒を、と俺が言いかけたその時、

カチリ

「あ……」

物珍しげに壁に手をおいたトウレーネが、乾いた音の後、少し間の抜けたような声を出す。

続いて、石と石がこすれるような、鈍い音。

「…………めんなさい」

トウレーネの声がか細く響く。

少しだけ、声をかけるタイミングが遅かつたようだ。

今俺達がいる遺跡内の通路。

不思議な光沢を放つ石でできた壁には、幾何学的な文様が刻まれている。

(難しかつたって言つてたなあ、これを表現するの)

少しだけ、現実逃避をしてみる俺。

そうしていふうちに、鈍い音が終わり、一部分が凹んだように動いた壁の中から、石兵型のモンスターが現れる。

壁のある位置に触れると、現れるような仕様になっていたらしい。幾何学模様のせいで、罠の場所を見逃してしまった俺のミスだ。
…………一応、あまり壁とかに触れないでって言つたんだけどなあ。しかし、ある意味褒めよう。

その、目の前のモンスターを見て、そつ思つ。

俺たちの前に立ちふさがつたのは、『レムナント・ゴーレム古代機兵』LV.18。こいつは、男のロマンに固執した俺の会心作だ。目の前で威嚇してきたいなければ細部にわたり自慢するところだが。…………やつぱりこじういう風に見ると違うなあ、等と考える。

巨大だ。

頭が通路の天井に届こつかといふ巨体。

なめらかなフォルムにして無骨な石の光沢。

そして、画面で見るのであればわからないであろう威圧感をひし

ひしと肌で感じる。

やべーかつけー。

何で俺、無機物系は捕獲^{アイテム}できない仕様なんかにしたんだろう……痛恨のミスだ。

ああ、このゴーレムに乗つてファイールドを歩いてみたかった……

このゲームでは、特定のモンスター（特殊な技能を持つたものが多いう成成長型モンスター：全部で20種類程）と戦闘し、瀕死状態にした場合、超低確率で捕獲^{アイテム}することが出来ることがある。そもそも出現率が非常に低く、出会えること自体ままならない上に、捕獲できる確率も低いため、出来るのは幸運の女神に微笑まれたものだけだ。

そんな中々手に入らないモンスターにはそれぞれ特徴があり、治癒効果を持つものであったり、支援効果であったり、戦闘参加であつたりと様々だ。そして、そんな幸運に導かれ、一度何らかのモンスターを捕獲^{アイテム}すると、一度とそのプレイヤーは他のモンスターを捕獲することはできない。

これは、オフィスのデスクに『人生は一期一會』と書かれたカレンダーを置いている（毎年どこから持つてくるんだろう？）先輩デザイナーの発案である。

ちなみに、そのモンスターが『死亡』した場合の措置としては、『死亡』後、そのモンスターはカードとして持ち主にドロップし、これまたフィールドで得られることのある、『黄泉の実』というレアなアイテムでのみ復活させることが出来る。

そんな事を思う間に、ゆっくりとその足音を響かせて『古代機兵^{レムナント・ゴーレム}

が近づいてくる。

今俺がソロでいるならば、時間をかけてヒットアンドアウエイで削っていくか、さっさと逃げ出すところだが、今は背後にトウレー
ネがいる。

仲間がいる。…………しかも美人の。

おそらく性質にもう一つ空きがあれば、『見栄』が入っていたかも
もしれん。

遺跡に入る前にトウレーネにかけてもらつっていた支援効果と秘
密スキル（注意 そんなものは存在しません 運営チームより）『
男の見栄』を受けた俺が、いつも以上の速度で、相手に小さく攻撃
しながら注意をひきつける。

太い腕が俺を襲う。速度はあまりないが、動きが厄介だ、食らえ
ば一撃でもかなりのHPを持つて行かれるだろう。注意しながら、
タイミングを縫つて攻撃を浴びせていった。

その間に、背後で、聞きなれてもなお、聴き惚れるような綺麗な
声が滔々と響き始める。

俺にとつては援護となる、田の前にいるじつにとつては死へ向
かう詩。

『 私の声が聞こえますか？』

『 戦いに赴く人を助けたいの』

『私の声を聞いてくれますか?』

『共に終わり導く歌を歌いましょう』

『そんな私の声を風に乗せて届けて』

『ファウエルクテス・ハーム
減衰の詠歌』

数節の詩の終わりと共に、景色の風が眼前の敵にまとわりつき、田に見えて、ゴーレムの動きが鈍くなる。

（作成時間72時間の愛しき我が子よ、最後に綺麗な声を聞かせたトゥレーネに感謝して眠れ）

俺は心中で田の前のゴーレムにささやき、先ほどまではその腕が邪魔で狙えなかつた額の石を狙つて飛ぶ。

数秒後、その巨躯に見合う大きなライトエフェクトと共に、ドロップカードを残して影は消えた。

「やりましたね、トールくん!」

「…」

「…」

かけながら駆け寄つてくる。

「ああ、いいタイミングだった、ありがとうな」

俺も、そう言つて笑う。

正直、大人数でのパーティ行動やソロには慣れていたが、一人でダンジョンに潜るというのは経験がない。

それも、田を引くような美人となんてなおさらだ。むしろ少ないと言つた、無い。

あれ、よく考えてたら、俺近頃恵まれ過ぎてない?
これってフラグ立つたりしてないよな?
まさか俺……死ぬのかな?

そんな事を半ば本気で思つくり、近頃調子のいい俺だ。色々愚痴つて入るが、最初の一週間に比べて恵まれすぎていると感じる。俺の内心などには気づかず、トゥーレーネが笑顔を向けてくる。

(何で、俺なんかをそんなに信用するのかな)

例え、あの状況で助けたとはいって、何でだろう。心から不思議に思う。気になつてこつそり尋ねたところ、ローザやアイナなどには、冷たい微笑と困ったような微笑ではぐらかされた。どっちがどっちかは……言わなくてもいいよな?

そろそろ目的のものがあるはずの、最奥部手前の広場に着く。帰りは転移で街に戻れるため、もうひと踏ん張りで終わりだ。

ふう、と一息ついて回復アイテムである『治療薬』を復元する俺。味は100%オレンジジュースの味である。

ちなみに、MP回復用の『治療薬』はやたらと甘い為、順番を間違えると非常に飲みづらい。味音痴の後輩に、飲み物タイプのアイテムを作らせた先輩が悪い、きっと。…………そして、理解つて敢えてそうしたんじゃないと信じたい。

そんな事を考えていた時、俺の索敵サーチに、また新たなモンスターが引っかかった。

随分と近い。

そして、気配が近づいてくる方向に目を向ける。
トウレーネも気がついたようだ。

『黒影虎 L V 3』

その姿を見て俺は心のなかで歓喜の声を上げる。

(おお！ ここに来て黒影虎、確か結構肉がつまい設定で、ドロップするんだったはず)

しかしL Vが低くて良かつた。現在のような少し大きな黒猫のような外見の状態なら大した敵ではないが、こいつはL Vが高くなると文字通り虎になる。

しかもピンチになると影に潜る強敵である。こいつは、モデルが実在の動物であつたりしたため、結構作成時間は短かつたが、成長する要素を持つレアなモンスターだ。

ちなみに、先程言つていた捕獲対象のモンスターでもある……がペットなんかよりも肉だ肉。

そう思つた俺が、有無を言わざず先制攻撃^{ファーストアタック}を仕掛けようとした時

「ゴッ！」

背後から結構な衝撃が走つた。仲間からの攻撃でなければ、HPが数ドット削れていたことだろう。

そしてよろける俺の横を人影が走り抜けた。

俺は、その衝撃をもたらした主、味方のはずのトゥーレーネに恨みがましい目を向ける。

「…………お前、何を……」

俺の言葉を聞かず、トゥーレーネが言つ。何故か憤つてゐるよう見える。

「…………トールくんー、こんな可愛い子に何してるんですか！」

「え？ と、はい？」

俺を背後から不意打ちしておいて、どんな言い訳が返つてくるのかと思えば、何故か怒られている俺。何でこうなつてる。

「弱いものいじめる人だと私は思つてませんでした！」

ポカソ、とした俺に、やや涙目で訴えてくるトウレーネ。
やばい、可愛いかもしれん。そんな風に思考がそれるが、しかし
それでも内心でツッコむ。

いや、トウレーネもさつきゴーレム倒すのは手伝つたじやん。
ここまで相当のモンスター倒したぞ？

何か？ 見かけが可愛い猫はダメで、ゴーレムはいいのか？
そんな数時間で描き上げた猫の方が、俺の3日間の徹夜の集大成
たる『古代機兵』よりもいいと？

ん？ っていうかおこ黒影虎、お前何トウレーネになつてんだ
よ。

戦いもせずに捕獲タイムつておかしいだろ？

俺がそんな事を呟くと、トウレーネがすつと自分のメニューを開
き、指差す。

『黒影虎は、仲間にいたそつこつちを見ている』

……とはさすがに出ていなかつた（当たり前だそんな仕様は作つ
ていない）が、捕獲した旨の表示が出でていた。

何故だ？

俺は疑問に思いながら、何故か戦わずして仲間になつたらしい『黒影虎 L.V.・3』を見た。

トウラーの腕に抱かれて、柔らかい感触に気持ちよさをうけている。…………羨ましいとか思つてないんだからな。

まだ怪訝そうな俺に、トウラーがちょいちょい、と手招きし、自分の性質と、パーティのステータスを見せる。指さされている部分を覗き込むと

【トウラー】

性質：

『純真』（効果：被支援効果アップ。稀に戦闘なしでモンスターを捕獲する 0・1%）

『温厚』（効果：雪原ダンジョン・フィールドでの状態変化・『凍結』防止）

『歌姫』（効果：呪文・詩、詠唱時効果三倍）

【トール】

技能（パーティ全体に効果アリ）：『幸運』、『闇系モンスター捕獲率アップ』

マジですか？ 捕獲モンスター初遭遇で、更に0・1%の確率？ 一体どんな確率になるの？ 何その幸運、何のフラグ？

『黒影虎』はトウラーを飼い主と認定したようで、静かにその影の中に潜り込み、顔だけだしてこちらを見ている。

何故同じパーティの俺が警戒されているのかはわからないが。

「もう、いじめちや駄目ですからね」
それを見ていた俺は、トウラーに念を押され、疲れたように頷く。

いいや、わざと取るもん取つて帰ろ。

【Baby】ログインの田田、じゅりゅう可愛らしい黒虎がパーティーに加わったようです。

四話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
拙作ですが、今後とも宜しくお願いします。

ちなみにどうでもいいですが、作者は猫派です。
犬には吠えられます……何故か散歩中の犬にまで吠えられたことがあります。飼い主がびっくりしてました。
注意：決して不審者ではありません。

五話（前書き）

今回は三人称です。

何故か？ それは、この場面のメモ書きをどうしてか三人称で書いていたからです……というのは理由の半分で、他の人達を主人公の目線以外から出したかったからです。

【～第一層ボス攻略前日、銀の騎士団ギルド本部～】

「トールのやつとリュウ レーネは、もつ遺跡に向かったのか？」

『銀の騎士団』^{ナイツ・オブ・シルバ}の本部三階では、ギルドの面々が、明日に向けての話をしていた。

そして、その話し合にも一段落した所で部屋に入ってきたアイナに、リュウが尋ねる。

「……はい、トゥーレーネさん、凄い張り切ってました
リュウの言葉に、と先ほどまで一緒に買い物に行っていたアイナ
がコクリと頷く。

「そうか、トールのやつもちつたあ男らしくしてるといがな。
……いつまで経っても照れてばかりいやがつて、どっちが男だかわ
かりやしねえ」

がはは、とそれを聞いてリュウが笑う。

最初は、少し怯えていたアイナも、話していくうちに、その外見
とは裏腹に面倒見がよく、ぶっきらぼうながら優しいリュウの顔を
直視できるようになっていた。

「でも、一人共、優しいです」

そう呟いたアイナの頭を、リュウがくしゃっと撫でる。

節くれだった、固く、暖かい大きな手だ。

最初はそうされる度にビクッとしていたアイナだったが、今では

そうされる事に少し落ち着きすら感じている。

(何か、お父さんに似てる)

そんな事を内心アイナが思つていると知れば、意外と繊細なこの大男は傷つくかもしねないが。

「……………そうですね、一人は甲斐性なし、一人はよくわからぬ天然の娘ですけれど」

今頃ぎこちなくなつてしているのであるうつ一人を思い浮かべて、ローザが淡々とそう言った。

「あはは、それはまた随分なお言葉だねえ。もっとも、僕も否定はしないけれど」

ネイルがその言葉を聞いて、肩をすくめて苦笑する。
いちいち行動が大きさなのにはもう誰も突っ込まないが、常々変わらないところを見ると、この状態が素なのだろう。

今、ここにいるのは四人。

出かけている一人とパーティを組んでいるメンバーだ。

おそらく、戦力のバランス的にも、明日は最前線に立つパーティの一つになるだろう。たつた三日ではあつたが、相当な時間を塔の探索に費やし、即席ながら各自の癖などもわかつてきていた。

団長のフェイルはといつと、今他のギルドとの調整に向かっているため、不在だ。

元々休養に当てる為の一日でもあり、トールとトゥーレーネは、正式にはギルドのメンバーではないことと、あれ以上、ギルドの鍊金

術師の一人が開発した『煙草』を我慢せると、鬱陶しそうとこつ理由でローザが呼ばなかつた。

今日はなにここまで重要な話し合ひでもない、あくまで確認のためのものだ。

それに まだ聞かせたくない話もある。

「後で、フェイルが戻つてきたら改めてお話ししますが、キャラから『犯罪者』プレイヤーを転送するためのアイテムができると報告が来ていました。…………あの娘は、まだうなされるのでしょうか？」

ローザがそう口を開く 後半は、アイナに向けて告げた言葉だ。

「はい……でも、最初の一回に比べたら、全然ましです。あの日は、眠れなかつたみたいだから」

「そう……リュウの言つ通りにして正解だつたかもしぬませんね」

トウレーネは、いつもにこやかにしているため、人を見る目に長けているローザですら鈍感なだけかと思つていたが、同居しているアイナによると、初回は夜中になくなされては目をさまし、一睡も出来なかつたらしい。

それでいて朝皆の前に姿を現した時にはあの通りなのだから、その話をアイナから聞き、逆に意外に思つたものだ。

そして、それを聞いたリュウがこいつ提案した。

「悪夢なんて見る暇もないほど連れ回せばいい。考える余裕がなくなるほど限界まで疲れさせて、腹一杯にしてベッドに放り込みや、そのうち時間が解決してくれる。後はトールのやつの仕事だ」

乱暴すぎるよに思われたが、効果の程は十分だったらしい。

(まあ、騎士様役があんな感じの方ですからね、確かに荒療治もありだつたのかもしません)

そう内心で思い、ローザが口元を緩める。

「……意外だね。ローザはああいう可愛い感じの娘は嫌いそうだ
けど　もちろん、悪い子ではないと思ってるけどね、僕は」
その様子に、ネイルが本当に意外な口調で尋ねた。途中からの言
葉は、少し睨んできたアイナに対してである。

この無口な少女は、初日トウレーネにいきなり抱きしめられて可
愛がられた時は目を瞬かせて戸惑っていたが、それからも一緒に過
ごす、というか構われるにつれて、短い期間ながら驚くほどよく懷
いている。

ネイルには、それが現実にいた頃からなのか、こんな状況に巻き
込まれたからなのかは分からないが、ほとんど自分からは口を開か
なかつたアイナが、曲がりなりにも自分から意見を言ったのは、ト
ウレーネがうなされていることをここに二人と団長であるフニ
イルに告げた時だった。

「あら? 私は元々可愛い物を愛する^{むすぶ}るのは好きですよ。……も
しあれが、計算したような天然もどきでしたら別ですけれど」
そうネイルに言って、ローザが微笑む。

何故か、何かを思い出したようにイラッとしたように見えるのは
……きっと触れないほうがいいのだろう、そう思ったネイルが、
更なる疑問を口にする。

「何で純正の天然つて解るのさ?」

それを聞いたローザが、端的に告げた。

「躊躇なく地雷を踏めるのは、本物の天然だけです。計算高い女性は、あれほど危険な罠を、躊躇なく発動させません。…………それに、それが自分に振りかかりさえしなければ、可愛らしいじゃありませんか？」

ああ、とそれを聞いて三人とも納得する。

その後始末を全てトールに押し付け、それを何とか解決したところをトウラー・ネに涙目で謝られたトールが照れ、そしてローザが遊ぶ、というパターンが三日間ダンジョンで繰り広げられたのをここ の面子は知っている。

それを見て、リュウが笑い、ネイルが肩をすくめ、アイナが静かに微笑むのもまた、定番になっていた。

「きっと今頃、また嬢ちゃんが罠を発動させて、トールが現実逃避してはカッコつけて頑張ってるんだろうぜ」

そのリュウの言葉に、四人とも笑う。
明日攻略に望むながらも、そんな柔らかな雰囲気の脣下がりだった。

【～第一層ボス攻略前日、夕方～】

遺跡から戻ってきた後、クロ（黒影虎はそう名付けられたらしい……）あれ、そのうち虎になるのに（）の食べ物を買うのです、アイナちゃんにも見せるのです、と張り切つて（何故あんなに元気なんだ……？）いるトゥーレーネをギルドまで送り届けた俺は、『烟草』の素材を渡すためにローザから紹介された鍊金術師の店に入り、それを見て固まつた。

もしかすると、他の人間にとつてはそうでもないのかもしがれないと解るもの。

その少女にも、背の低い大人の女性にも見えるプレイヤーのアバターは、燃えるような赤い髪に、茶色の大きな目をしていた。

まだそれだけなら、この世界では決して珍しくはない。俺を固ませた原因は、その顔に付いているとがつた耳、そして、明らかに人の体には着いていないもの。

「少し変わった人間ではあります、腕は確かな『鍊金術師』です」

「キヤルさんは、とても可愛らしい方です！」

ローザと、既に会つたことがあるらしいトゥーレーネは、そう紹介していたが、予想の斜め上過ぎる状況に、混乱した俺は内心で全力でツッコむ。

（何でだ！？ 何で猫耳にふさふさの尻尾のアバターなんかいるんだよ！ バグか？ それとも誰かの隠し仕様か？ ……いか

ん、思い当たるフシがありすぎる）

遺跡で、色々と精神的にも肉体的にも疲れ果てた俺を迎えたのは、現実の容姿を変更すること位しか許されていないはずのこの世界で、何故か猫耳をはやし尻尾を垂らした女性が座っている道具屋だった。

簡易登場人物パラメータ2

【ネイル Lv.29】

職種：魔術師

主要武具：ロッド

属性：炎

性質：自己犠牲（パーティの誰かが瀕死時、HPを分け与える事ができる）、自己陶酔（自分への支援効果アップ）、厨一病重症者（HP1／4時、魔力暴走効果）

【アイナ Lv.27】

職種：僧侶

主要武具：杖

属性：無

性質：内向的（回復呪文時、自己回復）、無口（無詠唱時効果ダウン軽減）、？？？

五話（後書き）

まだ出していなかつたキャラ一人の簡易紹介です。
二章終了後、人物設定をどこかに置く予定です。

六話（前書き）

今日も無事投稿できました。仕事から帰ると週間一位になつててびっくりしながら嬉しく、そのテンションでお茶を取りついしたらドアに小指をぶつけて悶絶した作者です。

お読みいただきてこの皆さんに感謝を。
では、お楽しみ頂けたら幸いです。

「うちに何か用？ もうそろそろ店閉めないとなんせ忙しい。用あるんやつたら明日こしくくれる？」

立ち尽くす俺を見て、その猫耳女はそう告げてくる。とても密商
売の言葉とは思えない。

(関西弁かよ!? ってツッコむのはそりじゃねえ!)

そして、そんな一人ヅツコミで懶々としている俺を見て、何かを
思い当たつたようにその女は手を打つた。

「ああ、あんたトールやろ？　トウレーネちゃんからも、口ザ
からも聞いとるわ。まああの一人は言つてることが違ひすぎて、ホ
ンマに同一人物について語つてんのかわかれへんかつたけどな、黒
ずくめやで言うとつたし、『煙草』欲しがつとるからよろしく、と
は言われとつたからそろそろくるんかとは…………ってなんやの？
さつきから黙つてばっかで、トールちゃうの？」

まだ衝撃から立ち直り切れていない俺が黙つたままなのを見て、
そう言ってくる。

慌てて俺は頷いた。

「そうだ、ツールだ。あんたが……」

「キヤルや。『鍊金術師』で、この『猫耳亭』の店主やつとる俺が、名前を思い出せなくて詰まっていると、キヤルと答えたその女性がそう指さしながら答えてくる。

そこには、確かに店じまいだったのであろうつ、しまいかけの看板

が置いてあつた。

『雑貨屋 猫耳亭』

「猫耳亭？ そのままか！？ ……つていうか何だその耳は？ 尻尾は！？」

俺は、こじ数分で何個目になるのかわからなにシッ ハリビリヒリ更に混乱しながら、そう疑問の言葉を吐く。

「アホか、目えついとんの？ それとも見えてへんの？ これが猫耳と猫のしつぽ以外の何に見えるんよ」

そんな俺に、はあ？ と言った口調で告げてくれるキヤル。

「つ…… そう見えてるから問題なんだりうが！」

そつたまらず叫んだ俺をつむれたり見ながら、キヤルは端的に言った。

「最初からこいつな訳とちやうわ。大体そんな設定はこのゲームにはないし、ネ」「好きやから自分で作ったに決まってるやう？ アホなんかあんた、一遍医者行つたほうがええんとけやつ？」

(黙田だこ)いつ、かみ合わない上に精神力が削られていいくつとこいつは、紙一重の方だ)

そんな風に、よく動く口からポンポン現れ出る毒舌に何もかも諦めて肩を落とした俺に、ほれ、とキヤルが手を出してくる。

「…………え？」

間抜けな声を出す俺に、イライラしたように告げる。

「『炎の魔石』。持ってきたんぢやうの？ 作つたるから早よつ

よこし

「あ、ああ、やうだつた」

俺はその言葉に自分が何をしに来たのかをよひやへ思ひ出し、オブジヒクト化した『魔石』を手渡した。

「……へえ、結構純度の良い魔石やん? 奥までいつたん?」

それを見て、少し感心したよつた声で言ひキャラル。

「ああ、トウレーネとな……えつと、知り合いなんだよな?」
俺は疑問にそつ答へ、確認する。

「そうや、つていうかあの娘が作つたつてくれて言ひから、待つ
とつたんやんか」

キャラルが、その薄い胸を張つて答える。

(こや、あなた明らかに最初追ひ返そつとしてましたよね? 店
閉めよつとしてましたよね?)

そんな俺の内心をよそに、キャラルが俺に尋ねてくる。

「まあえわ、あんた属性は?」

「ああ、『闇』だが?」

「わかつた、今からすぐにできるから、そのへんのもんでも見て
待つとき」

どうやら、属性が関係あるらしく、言ひことだけ言ひと、キャラ
ルは少し奥に行き作業を始めてしまつた。

待つていろと言われた俺は、手持ち無沙汰なまま店内を散策する
こととする。

そして、俺はそれを見つけた。

見つけてしまった。

『透視スコープ』

そう札が貼られたそれは、5000ナール。他の回復薬が50ナールや100ナールであることを考えれば、明らかに高いが、俺はそんな事よりもその効果に目を惹かれていた。

『ダンジョンなど、壁を透視して、その障害物の先にあるものを見通すことが出来る』

そう説明書きが書かれていたそれを見て、俺はキャラの方を振り向く。

(「これはまさか漢の夢… 服の下の、あんなものやこんなものまで透視できる、伝説の……」)

俺がそのあれこれを想像して、拳を握り締めていると、そんな俺の内心を見透かしたように、キャラが手を動かしながら淡々と告げた。

俺の夢をぶち壊す現実を。

「……あんたがアホなんやなあつて言つことと、今何考えてんのかは解る氣いもするけど、多分あんたには使われへんで、自分の属性『闇』なんやろ？ それ視覚効果に必要やさかい、『光』属性プレイヤーの限定アイテムやねん。大体、どっちにしたつて『闇』属性のプレイヤーは反属性の『光』のアイテムは使われへんやろ

「なん……だと……つー

その告げられた言葉に愕然としながら、俺は再度それを見る。確かに、先ほどの説明の続きにそう書かれていた。

「ちなみに言つとな、それは凄い分厚い壁でも透視できる代わりに、微調整にはむいてないねん。使う度にMPも持つて行かれるから、盗賊のあんたやつたらどっちにしろ無理や。何せスーパーカー並の馬力で、街中走るくらい燃費悪いもんやからな」

止めを刺された俺は、がっくりと肩を落とす。

そう言えば、属性についての明確な説明がまだだったか。この世界の属性の基本については前に言つたと思う。そして、それにはそれぞれ反属性というものがあるのだ。どうこいつらのかどうと、こんな関係性になつてている。

『反属性』
火 地 水
光 風 無

アイテムにも様々なもの（回復薬や投げつける攻撃アイテムから、設置型の罠など）があり、回復薬などは属性『無』、ダメージ判定を持つものや、特別な装備アイテム等は各属性をもつていてる。それが自分の属性であれば効果が一倍、反属性であれば使用できない、または特定のアイテムは使用出来ても効果が半減してしまう。ちなみに、生産職はその様々なアイテムを使えなければいけないという特性もあり、全て『無』属性である。

そして、『性質』は変化することもあるらしいが、『属性』

は変わることはない。正確には、『火』が『炎』になつたりすることはあれど、『火』が『水』になることはありえない。

つまり、何が言いたいかといつと
俺には一生このアイテムは使用できないのだ。

(神よ……俺は恨む……何故だ、何故俺は闇……！　しかし！
まだだ、きっと同じ志を持つ人間がいるはず。そうだ、『光』属性の魔術師か僧侶を探せば、そして『光』属性ならば、視覚同調スキルを持つものもいる筈……！)

「ちなみに言うとくとな、多分やねんけど、性格って属性に表されよんねん、『光』なんていうたらフェイルの旦那みたいな真っ直ぐな奴ばっかとちやうか？　多分あんたの思つてることに協力するような奴は、皆『光』属性ちやうと思うわ」

そう最後の希望にすがる俺の心を読んだかのようだ、淡々とキヤルが告げる。口元に笑みが浮かんでいるのが悔しい。

(…………くつ、漢の夢を、そんな簡単に諦められるか…)

俺は、心に決めた。
たとえどんなにレアであるかと、この条件に見合ひプレイヤーを見つけ出す。

(く……せいぜい首を洗つて待つている…)

そう心のなかで決意し、ビシッ、と『透視スコープ』に向けて宣

言する俺を見て、呆れたような声でキャラが出来上がりつた『煙草』を差し出してくる。

見かけは、唯一一本だけの煙草だ。

違うのは、それが紙で葉をくるんだものではないところこと、俗に言う電子タバコのような形状だ。

「ほれ、あんた専用の『煙草』や。残念ながら吸って短くなるもんちやうから、本物の感じは出せんけどな。味は、『吸う』という事実があんたの感覚から補完して、一番覚えてるもんにしてくれるはず、どうしても違つたら、追加料金で微調整したるわ。……後は、使つたんびにMP少し使うから、ダンジョンとかでアホみたいに吸つとつたら、いざというときに戦えへんから氣をつけや。火は、その口に加える側を歯で噛んだら動作するようになつとる……大事に使い」

そう説明をしてくれるキャラ。

俺は、キャラの了解を得てから、早速それを使ってみた。

肺に染み渡る煙、そして吐き出した煙が宙に漂つて拡散する。

(「いいつは……天才だ）

その現実と寸分変わらぬ煙草の感触と、先ほどのアイテム『透視スコープ』を作成したキャラを、俺は本気で尊敬した。

そしてその心からの思いを告げる。

「俺は、お前を尊敬する。何か必要な素材があれば、何でも言ってくれ。特に、『闇』属性でも使えるアレを開発するためなら、俺はどこへでも行こう」

「いつなら出来る！ そう確信を込めて俺は告げる。
そんな俺を面白そぞろに見上げながら、キヤルは言った。

「それを女のうちに堂々と頼む当たりがホンマにアホやな。……
まあ、そう言つてくれるんは正直嬉しくないことも無いし、うちも
鬼ではない…………あんたがうちの言つ通りに色々融通してくれた
ら、いつか作つたる事もできるかもな？…………多分無理や
けど、こいつ使えそりや（ボソッ）」

「な、何！？ 本当か？ 本当だな？」

後半はぼそぼそと呟いたのでよく聞こえなかつたが、いつか作る、
の部分以外は何も聞こえなかつた俺は、肩に手をやり叫ぶ。

そんな俺に、天才『鍊金術師』キヤル様は告げる。

「うちは嘘はつかん（……ちゃんと『かも』で言つたしな）。……
せやから頼むわ、今度来るとき、アイナちゃんを連れてきてくれ
へん？ うち、あのちつさい可愛らしき子にこの猫耳と尻尾をつけ
て愛でたいんや。なのにあの娘一回着せ替え人形にしたら来てくれ
へんねん」

「よし、任せろ」

俺は断言する。

アイナには悪いが、漢の夢には変えられん。

（すまん、俺の夢の為に、犠牲になつてくれ、アイナ。今度何か
奢つてやるから）

さう、心の中で謝る俺を見て、可笑しそうに笑いながら、キヤルは
しまいかけの看板を店内に引き込み、告げる。

「じゃあ、行こか。あんたも攻略前の決戦式とやらに行くんやう？」

「……ああ、そういうえば、そんな事言われてたな、何でもすいべく美味しい飯を出す所があるとか」

「びっくりするで？ うちなんかと違つて、ホンマもんの職人であり天才やで。……ちょっと氣むずかしいのと、『料理人』の癖にフィールドでとるから、あんま店はやつてへんねんけどな」

そう言ひ、ニヤッと笑うキヤル。

(まあ、焼き鮭定食以外の美味しいものがあるなら大歓迎だな)

俺はそう思つて、キヤルに頷き、その銀の騎士団御用達という定食屋に向かうのだった。

六話（後書き）

次回までは日常、キャラ紹介の話。残り二話でボス戦含めての話。
そこで設定などの説明をあらかた終えて、一章終了予定です。

投稿後すぐに誤字発見、訂正、失礼しました。

10/27 勢いで書き上げ過ぎたので(つーか主人公が勝手に...
...)すいません。少し修正しました

六話（前書き）

10/27 この一つ前の話、六話を少し改稿しました。合わせてお読み頂けたら幸いです。ただそこまでストーリーに影響はないです。

役目を終え、今にも歸らうとする夕日に低い空が紅く染まり、真上には少しずつ夜色とこの街のそれが満ちてくる頃、俺はキャラルと共にその店、『満月亭』に向ってきていた。

ここは、俺の時おととしている街の西側の宿とは塔を挟んで反対側、同じく街の東側にあるキャラルの『猫耳亭』からは歩いて五分ほどの場所になる。

キャラルの店が街の中央を十字に走る大通りに面しているのに対し、そこから細い道を入ったところにある分、随分と寂れた印象を受けた。

「本當に、ここだ合つてゐるのか？」
その店の前で、俺はそう告げた。

それもそのはず、そこは、そんな寂れたように見える道沿いの建物の中でも一際立たないところにあり、唯の空き家のように見えた。

目の前の煉瓦の壁の中央にある扉は閉しきされ、看板も立っていない。ある、と分かっていなければ見向きもしないような場所。

「せやで、あんたは來たこと無いんか？」
「ああ、俺は宿の飯が一番つまいと信じてたんでな」

少し意外そうに尋ねてくるキャラルに、そう頷いて答える。

「そりなんや、そんなに自分のとこの飯はつまいんか？」
「…………」

「…………」

「そりなんや、そんなに自分のとこの飯はつまいんか？」
「…………」

「…………」

「そりなんや、そんなに自分のとこの飯はつまいんか？」
「…………」

「…………」

二度目以降は、他の味を欲しながらも食べてしまつたな、そんな食事だ。一度来てみるといい」「

キヤルの言葉に、俺がそう答えていると、後ろから声がかかった。

「あ、トールくん」

その声に振り向いてみると、トウレーネがアイナの手を引きながら、歩いてくるところだった。

黒影虎である『クロ』は、アイナの頭に絶妙なバランスで乗つかっている。既にペット化は完了しているようだ。

その様子は、まるで仲の良い姉妹のようで、微笑ましい。

そして、俺の隣にいたものが動いた。

「ア・イ・ナ・ちやーん！ 元気にしどったか？ 何かまた縮んでないか？ ちっこくて可愛えなあ」

盗賊の俺も真っ青なスピードでアイナの元に駆け寄つたキヤルは、これまた神速の域でトウレーネの後ろに隠れたアイナを覗き込もうとしている。

…………クロは、怯えて影の中に潜り込んだようだ。
モンスターを怯えわせるとは……何ていう生産職。

「…………」

アイナは、トウレーネの裾を掴み、震えている。

(……一体……何をすればここまで怯えるんだ？)

俺は、そう内心で思い、取り敢えずキヤルを引き剥がす。

「ちよつとい、何すんのー。協力するこつたやねー。」

「馬鹿、怯えてるだろ？が、流石に自重しろ」

「なんやの？ アレが欲しいんぢやうんか？」

「ぐつ……」

そんなやり取りを交わす俺達を、トウレーネは微笑ましく見て言った。

「随分と仲良くなつたんですね。ね、キヤルさんは可愛らしこ方だつたでしょ？お田舎てのものはいただけましたか？」

「ああ、言伝しておいてくれたみたいで助かつたよ」

そう、首袖を掴んだままにこじやかに会話を交わす俺に、キヤルが咳く。

「あんたは、透視スコープが欲しいんぢやうんか？」
「……透視スコープ？」

その言葉にて、トウレーネが反応する。アイナは恐る恐るこじりを見ているが、キヤルと田が合ひとまた隠れた。

……どこの小動物だ。とこうかましい、何あつせつぱりしてくれてんだキヤル。暴れるんぢやない。

呻く俺……トウレーネはそんな俺を見て告げる。

「ああ、あの高いやつですね…………欲しいんですか？」
「うやうや、飛び抜けて高かつたことから覚えていいへじじへ、思い当たつたように頷き、そして見上げてくる。

(不思議な)こともあるものだ、全然暑くなんてないのこ、汗が出

てきたな)

「そうですよね、トールさん盗賊だから、アーリング探索とか索敵とかの為に、あつたほうが便利ですもんね？一瞬、変なこと考えちゃいましたよ」

「……へんな、事？」

トウレーネがいつも以上の笑みで、俺にそう告げるのを見て、アイナが聞く。

「ええ、でも、アイナちゃんも知つての通り、トールさんは私を助けてくれた優しい人ですから、関係ないと思います」

「……？」うん

トウレーネが、少し屈んでアイナに告げると、アイナは首をかしげながらも頷いた。

(……あれ？おかしいな？何も言われてないのに、むしろ褒められているのに汗が出て寒くなってきたわけだが)

流石に、俺の不純な動機に思い当たらないほど世間知らずでもなかつたようだ、そしてこれは、直接言われるより…………くつ、済まない『透明スコープ』よ、今はまだ、俺はお前とは縁がなかつたのかもしれない。しかし、しかしこいつか必ず。

俺は血の涙を流すような決意で、それを飲み込むと、キヤルに向け告げた。

「そういうわけだ

「何がやねん！」

血口完結してそう告げる俺に、キヤルが喚ぐ。

「…………何、店の前で騒いでんだ、もうローザとリュウは中で待ってるぞ？ フェイルとネイルは遅れてくるらしいから、お前たち待ちだ、さっさと入れ」

その時、ガチャリ、と扉が開き、のそり、とその姿を現した男はそう低い声で告げた。

リュウほどではないが、180cmはあるだろう大柄な体、太い腕、そして円を描く強面の顔の頭頂は、見事なスキンヘッド。更に口元は、短いあご鬚に覆われている。

つまり、なかなか怖い。間違つてもリュウとは並んで欲しくない。

これでバイクにでも乗つて革ジャンを羽織つていれば、目を合わせること無く逃げ出す自信がある。今は、料理人らしく白いコックコート姿だつたが。

「ジンさん、すいません」

「……こんばんは」

男に、トゥーレーネとアイナが挨拶をする。

このジンと呼ばれた男が、この店の店主にして『料理人』らしい。そして、それに頼み、無言で背を向けたジンに続いて、俺たち四人は店内へと足を踏み入れた。

トゥーレーネとアイナは、前にも一緒に来たらしく（……確か『モロ』討伐時、俺が疲れすぎて断つた時だ）、ジンに頼んで『クロ』の分をお願いしているようだ。

内装は、そこまで広くないものの、カウンターと、4つのテーブル席。

今は、それを中央につなげて円を描くように座っている。

「あの二人は波長があつてたみたいで何よりだな、わかつてたのか？」嬢ちゃんは

「……まさか、偶々です。ただ、アイナは氣を遣える子ですから

それを見て、リュウが尋ねるにそつ答えるローザ。キヤルもうんうん、と頷く。

「仲が良くて良かったとは思つけれど……女の子同士なんだから、あんなもんじやないのか？」

そう何でもなく会話に加わる俺に、三人が目を向けてため息を付く。

「……あなたは、本当に女性といふ生き物をよく分かつていない男性ですね、女性一人が同じ所にいさえすれば仲良くなるとでも？」

「アホやろ、そんな単純なもんとちやうわ」

そしてそう辛辣な口調で言われる。……しまった、やぶ蛇をついたか、しかも一人タッグだ。間違いなく勝てない。取り敢えず謝罪する。

「……すまん、何かそんなイメージがあつた、違うんだな？」

「当たり前です、女性同士はなかなか波長が合いくらいのですよ？ むしろ男性の方のほうがそうだと思います」

そんな俺はローザにそつ告げられ、そういうものかと納得した。

何にせよ、仲がいいのだから良いことだらう。

そう思つた俺は深く追求せず、目の前に置かれたサラダに手を伸ばした。そして驚愕する。

(美味しい。どうしてこんな店が、今まで埋もれていたんだ)

サラダのシャキシャキ感とみずみずしさ、ドレッシングの味、なにより、その後飲んだ水からして美味しい。

不思議に思つた俺が、ここがどうしてあまり知られていないのか、と尋ねると、ため息をついていたローザが説明してくれた。

「ジンさんは、『料理人』にも関わらず、ファイールドで戦闘を行うのが好きなようにして、普段はあまり店をやっていないのですよ」

戦闘好きの料理人、ジン。

それなら、何で戦闘系にしてないんだよ？ そんな俺のつぶやきに、奥から姿を見せたジンが端的に告げる。

「…………俺は料理人だからだ」

…………なら店開けよ！

至極真っ当だと思われる俺のツッコミは、しかしながらスルーされた。

そしてスルーしてくれたジンは、そろそろだが、また見るのか？ と何やら期待したように目を向けるトゥレー・ネとアイナに向けて言ひ。

この店は、街と同じく西洋料理がメインらしい。ただ、それでも日本人の舌に食べやすいものが多いということだ。和風な洋風料理、とでも言えば解るだろうか？

中でもおすすめはオムライスらしい。そしてその作る様を、先ほどの一人が見に行くということと、興味を惹かれ、キヤルにも見たほうがええ、と言われた俺も行ってみることにした。

カウンター越しに、二人と並んでキッチンを見ると、既に、更には湯気を上げたバターライスがお椀型に中央に盛られていた。その匂いだけで既にお腹が反応しそうだ。

(「ここに、さうにオムレツが載るのか）

そう思つた俺は、「クリと唾を飲み、別の皿にも田を向ける。オムライスの具なのだろう、ペースト色になるまで炒められた玉ねぎ、それと薄く斬られた肉がこんがりと焼き田がつき、こちらもそれだけでも美味しそうだ。

「これから割るんですよ、すいんです！」

そうトウレーが言い、アイナも珍しくキラキラした田でジンの動きを追っている。

(割るって、卵割るのがそんなに珍しいのか？　いや、なにか秘技が……）

そんな事を思う俺の田の前で、ジンがゆっくりとよくかき混ぜられた卵黄を手に取り、よく熱せられたフライパンに、バターを落とし、なじませる。

…………あれ、もつすでに割れてんじゃん卵？

そういう感じの、場の空氣から静かに見守る。

良い感じのバターの香りが漂ってきたところに、ジンが卵を箸になじませる間に伝わせて投下する。

それは、バターを吸収しながら広がり、そしてジンの箸が焦げ付かないようかき混ぜながら、具を中心にして置き、形を整え包みながらフライパンの端へと寄せる。そして

ジンが軽く、コン、コン、と柄を叩くと、あたかも元からその形であったかのように、具を包んだ橢円型のオムレツにひっくり返った。

(す、すいいな)

俺はその当たり前のようになす技に、目を奪われた。
そして次の瞬間、ジンが盛られていたライスの上に、その出来立てのオムレツを乗せる。

せりにジンは、ここまでのスピードで動きとまづつて代わり、目を凝らして見つめる俺達に魅せつけられるかのよう、おもむろにナイフを取った。

ツ

静かに線を描いたそれがオムレツを抜けると、ゆっくりと卵が開かれ、半熟の中身が姿を現した。そして、それは意思を持って流れ出すかのようにライスを包み込み、その中から先ほどの具が存在感を持つて顔を出す。

俺の考えていた、薄い卵で包まれたものとは、同じ名前の違うもの。

「…………何回見ても、魔法みたいです」

アイナがそう呟くが、俺も全く同感だ。無言で頷く。

「…………ほら」

そして、その皿を俺の方へ差し出した。

その様には、誇る様子も、照れる様子も見受けられない。

「…………ありがとうございます」

俺は、何故か敬語になっていた。その、食べ物に、それを今眼の前にもたらしたジンに気圧されるように。

職人、か。そう思い、心の底から尊敬の念が沸き上がってくる。料理一つでここまで感動させられるとは、思わなかつた。トウレーネ達に、感謝しなければならない。

もちろんのことながら、差し出されたオムライスは、死ぬほど美味かつた。

七話（後書き）

ジンは、作者が昔バイトで料理を作っていた店のオーナーがモデルです。書いてみたかった。オムライスの描写は、作者が初めてまかないを出された時の心境そのもの。書ききたかはわかりませんが、本当に感動したものです。

これで初期に考えていた一章まで出すキャラは出したので、少しずつ人物補完を行いつつ、設定と前フリを出してつつ、物語を進めています。

お読みいただき、ありがとうございました。

八話（前書き）

なんか今日は筆が進ます。搾り出した感じです。。
第一層攻略前夜 後半、よろしくお願ひ致します。

「トール、言靈の件では助かつた、礼を言つ

「何だかあんたには、いつもそうやつてお礼を言われてる気がするな。気にしないでくれ……實際うまくいったんだからな」

食事を終えた頃、ネイルと二人で入ってきた銀の騎士団團長がそう告げてくるのに答えて、俺は笑いかける。そんな俺に少し頭を下げ、二人は空いている俺の右斜め前の席に座った。そこはちょうど、ジンのいるカウンターから対面、扉の前になる場所だ。

…………すまない、内心どうしようもなく感じているので聞いて欲しいんだが、現状、テーブルを中心に、一人ずつ座つているわけだ。

俺の座っている場所の右側には、今来たばかりの美形一人。そして対面には濃い顔に大きなガタイのリュウさんと、怜俐でスレンダーな黒髪美人であるローザが座つている。

さらに、左側にはクロと戯れる一人。ほんわかとした笑顔が似合う美人、その適度に丸みを帯びたスタイルがバランスの良いトゥレーネ、小柄で、頭を撫でたくなるような可憐さを持つ、くりっとした目の無口な少女、アイナ。ちなみに14、5の子を相手に言つて犯罪者になりたくはないから大きな声では言わんが、その胸元には存在感を示している二つの……後は、わかるか？ 察してくれ。威力は皆に任せよう。

最後に、俺の隣にはそのアイナを虎視眈々と狙う（……その度に俺が止める事数回）猫耳赤毛の鍊金術師、キャラ。その小柄なスター

イルは前言つたように貧、…………これからに期待だが。

言い直したのは、隣から殺氣が来たわけじゃないぞ、負けてなんかいないからな！

「ホン。

そんな中、俺は思うわけだ。

このメンバーでいたらただでさえ無い俺の存在感が更に薄くなる気が……いや、いいんだ、自覚はしている。しかし、自分の存在感を自分ですら感じ取れなくなるようなこの異常さ、わかつて欲しい俺の気持ちが伝わるだろうか？……伝わるといいな、物語には、俺みたいな奴がきっと必要なんだって。

そんな事をうじうじと考えていると、ジンさんが奥から現れる。そして、遅れてきた一人のためにまたあのオムライスを作ってくれよう。それを聞いてまた見に行くアイナとトウレーネ……飽きない一人が凄いのか、それとも飽きさせないジンさんが凄いのか。

（ウインドウ・オープン）

それを横目に見やり、俺はそう静かに呴き自分の性質を確認する。そんな俺の行動に、他の皆は何をしているのかと目を向けてくるが、そんなものは知らない。

『裏方』

その二文字が輝いている。

よし、現実を見ろ、俺！

敢えて確認することでやりきれなさを振り払った俺を見て、ロー

ザが眩いた。

「では、フェイル達も到着してトールさんが思考の迷路から戻ってきたようなので、話しておきたいことがあるのですが、あの子達は……後で話します」

(……だから、心を読まないでくれよ)

そして、そう内心で哀しくなる俺を無視し、目線を一人が嬉々としてカウンターに乗り上げてジンの技を見ているのに向けて、静かに続ける。

「キヤル、アレについては、もう完成しているんですね？」

「アレって、いうのは？」

「……犯罪者プレイヤーを拘束し、『牢獄』に転移させるためのアイテムです。このゲームには、犯罪者を入れる場所は用意されていましたが、そこに飛ばすためのアイテムが何故かありませんでしたから」

疑問に思った俺のつぶやきに、ローザがそう答えてくれる。

(そうだな、それは元から無いんだよ　　『アル』を含めた運営が、そのPKをされた人間に依頼されてから送るシステムだつたからな)

『アル』は当初のルールは守るはずだ。しかし一週間後以降、その人間が神殿に復活し、報告することなどありえない。

俺はそう、内心で眩き田を呑わせた。それを見て、何かを悟ったようにローザはその目線をキヤルに戻し、俺も自然とそちらに目を向けた。

「もちろんや、ただ、やっぱり条件があるんやけどな…………」

そんな俺達にキャラがそう答え、少し口ごもる。

「どんなものだ？」

フェイルがそう口を開き、キャラはそちらを向いて答えた。

「そもそもな、何らかを拘束するためのアイテムは全般的にそうやし、今回はそれを元に転移効果を入れて作ったから、結構条件が厳しいんや、相手のHPを五分の一程度まで減らした後で、陣の中に放り込まんと転送できん」

「……まあ、仕方が無いだろつ。急遽作成してもらつたものではあるしな、ただ、そつか」

その言葉と共に、息を吐くフェイル。

考えている」とは解る。

おそらく、このチュートリアルとされる期間終了後のことを、どこで皆考えている。

今のところは、PKの噂プレイヤーキラーは聞こえてこない。だが、この状態が最後まで続くはずと考えるには、知らない人間の数が多すぎた。信じたくはないが、想定しないなんてことはありえない。

実際に『死亡』が現実の『死亡』とリンクした後でも、PKをする人間が存在するかどうか、ということを。

カウンターに居る一人が歎声を上げる。そろそろ出来上がるのだろつ。

俺は、そんな二人を見やり、フェイルに告げる。

「なあ、分かっているかもしけんが、一つだけ、忠告させてくれ
「何だ？ 気にしなくていい、言つてくれ
それに落ち着いて答えてくるフェイル。

そして、俺は心に引っかかっていたことを、口にする。

「あいつに、あの三人のうち、一番落ち着いていた呪術師のやつにはくれぐれも気をつけてくれ」

頷いて先を促すフェイ儿にそう答えながら、俺はあの時のそいつの目を思い出す。

「……ゾッとしたんだ、あいつと最初に目があつた時。それで頭が真っ白になつて、三対一なのも忘れて飛びかかつた」

「そいつは、実際どんな野郎なんだ？　俺は正直終わつた後にしか見てないから、そこまで詳しくはねえんだが」

俺の言葉を聞き、そう疑問の声を発したリュウに、実際にその三人を転送し、その後の対応をしたネイルが補足する。

「そうですね、随分と澄ましているといいますか、冷めているといいますか。ゲームをやつっているような？　いや、言い方が悪いですかね」

「なんだよそりや？　はつきりしねえな」

説明し、うまい言葉が見つからないな、と人差し指で額を叩きながら呟くネイルに、リュウが言つ。

(ゲームをやつしているような)

しかし、そう、まさにそんな感じだ。

本当の時間つぶしにゲームをやるかのように。

惰性でつまらないものを見るかのように。

あいつは、トゥレーネを麻痺^{バラライク}させ、一人に襲わせる様を見ていた。

ここはもう、ゲームであつてゲームではないのに。そんな事は無いと信じているふうでもなく、ただ、つまらなそうに見ていた。

「少しだけ、現実リアルでの話をしていいか？」

何故か、自然とこの【Baby】ながタブー【Babylon】で、外の現実の話をするのが少し禁句タブーのようになっていた。それはいつからだろうか、そんな事を思いながら俺は告げる。

「……ああ、続けてくれ」「変なこと気にすんな、構わねえぜ」
そんな俺に、フェイ儿とリュウがそう言い、他の三人も首を縦に振る。

「時々さ、テレビで流れてたりしなかつたか？殺人事件で、理由が『ただ何となく、誰かを殺してみたかった』っていうやつ」

そして、皆が静かに聞いてくれているのを見て、俺は続ける。

「あれは、実際のところはどうなんだかわからないし、専門家はいろんな事を言つけれど、俺は、病んでるとか、敢えてそう言つてるんじゃないくて、むしろそのままの言葉なんじゃないかと思うんだ。何というかな、普通の思考の延長線上にあるような。……それに比べたらまだ、他の一人の事は感情としては理解できたんだ。共感は決してできないがな」

醜悪な表情をむき出しにして俺に語りかけてきた戦士の男と、それに追従するように笑っていた呪術師を思ひ浮かべそう告げる。

でも、あいつは違った。

次に浮かんできたあのまとめているように見えた、後方にいた呪術師の事を思う。

「あれはそう、何もなかつた。何も感じてないんじゃない、感じた上で普通にしていたような。さつき言つたみたいに『やってみたかった』からしてみたような……何だろ、すまん、うまく伝えら

れないが

「いえ、ネイルの言葉と、貴方のその例えで、理解したつもりです……少なくとも、気を付けたほうが良いといつことば……」

俺の言葉にローザがそう言い、フェイ儿がそれに頷きつつも続きを受け取る。

「だが、実際今日他の一大ギルドとも話してはきたのだが、捕らえたとして、その後につまでもうするか、というのも問題なのだ」

「アホか、そんなもん一生閉じ込めとつたらええやないか」

その言葉に、これまで黙つて聞いていたキャラが吐き捨てるように告げた。顔が不快そうに歪んでいる。

「その、犯罪の質にもよるのだ。例えば、殺人と盜難をひと括りにまとめるわけにもいくまい？」

俺も心情的にはキャラに近いが、フェイ儿がそう落ち着かせるよううに告げる言葉もわかる。

「犯罪者なんて皆同じや、軽いか重いかなんて関係ないわ。トウラーがされたこと忘れたんか？」

「…………田には田を、歯には歯を、ですよ」

そんな叫ぶようなキャラの声に、横からせつ言つたのは、他ならぬトウラーだった。

見ると、アイナと共に料理を運んできている。少し声を抑えて喋つていたのだが、興奮したキャラの声が大きいので、聞こえらしい。

(トウラーにはあまり聞かせたくはなかつたが、しかし、当事

者のトゥーレーネに決めるべきか）

「せやろ？ やられたらやり返さなー」

俺がそう考へていると、そのトゥーレーネの言葉にキヤルが勢い良く告げる。

「違いますよ、そりこつ意味じゅありません」

ゆつくつヒネイルの前に湯気を立てるオムライスをおいたトゥーレーネはそう言い、見回して続けた。

「『田には田を、歯には歯を』とこつ言葉は、目をやられれば目まで、歯をやられば歯までしか罰を『えてはいけない、必要以上にやりすぎではない、』というのが本来の意味なんだと、昔、人に教えてもらいました。だから、フェイルさんの言づ通り、全てと一緒にしては駄目だと思いますよ」

「……話し合この結果としては、とりあえず、被害者の許しがあれば釈放すること」とて仮決定はした

そう、静かになつた席に、フェイルが言つ。つまり、何にせよPKは釈放なし、とこつ」とか、等と考えて俺は少し氣分が悪くなる。

どうしても、そのことについて考えてしまつ。

何にせよ、今回の三人は釈放は無しだな、とも主觀ではあるが思ひ。

「はい、わかりました。許したら、釈放ですね
静かにフェイルにそう告げるトゥーレーネ。

「トゥーレーネ？」「トゥーレーネさん？」

あつやつ言つて、元の髪を搔く俺が名前を呼ぶ

び、同じように声を出したアイナが、そんなトウレーの裾を掴む。影の中に潜つていたらしいクロも、頭を出して鳴いた。

「ありがとうございます。大丈夫ですよ、私にはもう皆さんがないですから。もちろんアイナちゃんもクロちゃんもいるから、怖くないです」

自分のそばの、そんな一人と一匹の頭を撫でて、呟く。

「……あの三人に関しては、当分許す気なんてありませんし、これから先もわかりません。でも、だからって他の人にまでそれを押し付けるのは、良くないと思います」

最後の言葉は、キャラに向けてだ。
その言葉に、キャラが手を上げて呟く。

「わかった……うちは納得はせえへんけど、わかったわ」「そして、そのまま手を伸ばし、当たり前のようになailの前にあるオムライスを奪う。

「なつ、ちょっと待つてくださいよ、それは僕の……」「ジンさん、もう一個追加、よろしく頼むわ」

そう声をかけ、美味しそうに食べ始める。もちろん二個目だ。ネイル、場の空気を変えるためとはいえた前まで来たそれを奪われるとは、不憫な奴。しかし、その様子を見ていたらおれもう少し食いたくなる。

何せ、それだけ美味しいのだから。

他の人間も同じだったのか、少し空気が軽くなつたことが原因なのか、ジンに飲み物や食べ物を頼み始めた。

それに黙つて頷き、調理を始めるジンさん。あなたは、
職人の鑑かがみです

「トールくんも、ありがとうございます」

再びそれぞれ飲み食いを始めた頃、トゥーレーネが近寄ってきて、
そう告げる。

「…………それでいいなら、俺になんか言つ権利はないよ
顔が近いことと、その漂つてくる香りに戸惑いながら、少し席を
引き俺はそう言つ。

「大丈夫です、信じてますから」

「ハリ、と笑つてそう言われ、顔が赤くなるのを感じる。

だから、直球派は苦手だ。

「ヤーヤしている一種類の毒舌の視線を感じる。

(ああ、今日も胃が痛くなるのか)

俺はそんな事を考えながらも、楽しそも感じていた。そしてその後は攻略の為の準備についての話などしつつ、美味しい料理に酒に舌鼓を打ちつつ、夜は更けていった。

八話（後書き）

明日は、ちょっと出かけるので投稿や、頂く感想の返信ができるかもしません。明後日には頑張ります。ただ、一章は後一話の予定で、締めの部分はメモがあるんですが、次の攻略部分が…

『塔潜入、ボス戦描写』

『その後一章終了部分につなげる感じで終わり』

果たしてこの一行のメモをどこまで膨らますことが出来るのか…
…乞うご期待、はあまりせず暖かく見て下さると幸いです。
では、お読み頂けてありがとうございました。

九話（前書き）

戦闘の途中なので、この後すぐ、書け次第第十話も投稿します。すいません、個人の好みで一話5000字位までと決めてたんですけど、收まりませんでした。

朝、俺は約束の時間より少し早く、『塔』の前に向かっていた。昔から、何がある日の前日は、早く目が覚めてしまう。そして、二度寝すると起きれないことも既に経験済みだ。

今日塔への攻略に参加するのは48人、6人からなるパーティーが八組だ。

うち、四組が第一層のボスのいる広場へ、残りの四組は、それで実際にボス戦を行うパーティーを送り届けるメンバーだ。
もつと大人数で行けばいい、と思われるかもしれないが、ボス戦の広場はそこまで狭くはないものの、あまり大勢で行つても意味はない。何故なら、同じパーティでない者の魔法などは、ダメージを受けるのだ。後は連携の問題もある。

例え100人プレイヤーがいた所で、同時に攻撃できるわけではないのだから……むしろ、多すぎる人数での攻略は弊害のほうが多い。

そこで、四方からも攻撃できる最小限の精鋭で、攻略は行うことになる。

そこまで送り届ける役目の人間は損な役回りなのではないかという意見もあるかもしだれないが、この辺は三大ギルドの一つ、生産職メインのギルドである『探求者の集い』が、レアなアイテムや、今後融通を効かせる、等の見返りを与えることで納得してくれたらしいプレイヤー達が行なってくれる。これは、実際にボス戦に挑む人間をそれまでに消耗させないための必要な策だ。

何故こんなものが必要になるかといえば…………塔の内部が随分

な難易度であることと、そしてその一因として、他のRPGダンジョンなどで見かけるHPやMPを回復出来る場所があるにはあるのだが、50%までしか回復してくれない事に原因がある。つまり、フルの状態で戦いたい場合は意味が無い。

俺を含めていつものパーティーは、広場へ向かうつむの一組に含まれている。

(初っ端から、罷も厳しいしなあ)

俺は、これからを想像し息を吐く。

ちなみに言うと、宝箱などにも罷が仕掛けられており、解除に失敗すると爆発してダメージを受けたり、しかもそのダメージの後でモンスターが音に呼び寄せられ集まって来たりと、多分、はあると精神的にくるものがあるだろう。…………かくいう俺も今まで二回程、都合よくテレパシー能力に目覚めて、これを作った先輩に愚痴を言いつつ攻略法を教えてもらいたいと真剣に願つた、いや本当に目覚めないかな超能力。

そんな事を考えながら、塔の前行くと、思いがけず既に人影がいた。

フエイルだ。

珍しく一人で、塔の前に立っていた。ただ遠くを見つめるように、空を見上げている。銀色の髪が朝日に照らされて、一枚の絵のようになっているのに、正直少し見とれてしまう。

「……トールか、随分と早いな」

自分のことは棚に上げて、俺に気づくと手を上げて言つてくる。

「お前こそな……何を、見ていたんだ？」

「空をね……ここは、どんなに綺麗でも、やはり現実ではないんだなと思っていたんだ」

そう言い見上げるフェイルにつられて、俺も空を見上げる。

透き通った透明な青。今日の天候は雲ひとつ無いが、あの腕のいい先輩の作品だ、俺には現実と変わらないように見える。

そう疑問を持った俺を見透かしたのだろうか、フェイルがポツリと呟く。

「私の現実での家の近くには、空港があつてね……出勤の時に見上げれば、自然とよく飛行機を見かけたんだ。何というか、時には五月蠅いとさえ思ったものなのだが……それが無くなると、どうも寂しく感じるものだな」

「…………あんたのそういう話は、初めて聞くな」
いつも毅然とし、ギルドの人間の先頭に立っているイメージのあるフェイルの少し弱音にも聞こえる言葉に、意外に思つた俺はそう言った。

「そうかもしないな、君は　トールはギルドの人間でもないし、寄分なわけでもないから、本音を漏らしてしまうのかも知れない」

「そうか、まああまり、無理をするなよ」

俺を見て、そう言つたフェイルにそんな言葉を告げてしまつてから、この状況で無理をするなも無いものだ、と自嘲気味に思つ。

「ありがとう」

そんな俺に、そう告げるフェイル。

俺よりも少し高い目線にある切れ長の目は、穏やかな色をたたえている。

「…………礼も言うな。言つただろう? 気恥ずかしいんだよ」

「ふふ、すまない」

俺がそんな視線に目を逸らし言つと、くつく、とフェイルが笑う。

「来始めたようだな、今日は、よろしく頼む。ある意味前哨戦だ、まだ大丈夫などとは言つても、誰も死なせずに攻略したい」少しずつ、こちらに向かつてくる人影に、フェイルがそう言い、俺も頷いた。

初めてとなる、『バベルの塔』上層部へ向かう第一歩が、今日始まる。

両脇に煌々と火をたたえた松明が灯る大きな扉の前、その、ボス戦の広場の入り口に、俺たちは立つていた。
此処から先は、何が待ち受けているのか。

「後は、任せます」

俺達を送り届けてくれた人間のうち、そのリーダー格でもある『狩人』の男がそう告げる。

レベルはそこまで高くはないが、状況判断に優れた支援を行なつてくれる、いぶし銀のような男だつた。

「ああ、君たちも、本当にご苦労だつた。決して無駄にはしない」そうフェイルが告げるのに対し、頭を下げた四組のパーティ達は、それぞれの転送陣にて塔の外へと離脱していく。

「さて、初陣だ。作戦は、私を含めた戦士・格闘家タイプの人間

が前衛。トゥーレーネくんを含めた吟遊詩人・呪術師で補佐、ネイル等の魔術師・狩人で後方からタイミングよく相手を削ってくれ。トルを含んだ盗賊は、ボスに追随する他の敵が出現しないかの注意を払いながら遊撃を頼む。僧侶のものは、各自のHPに注意を払いつつ、回復を 特にアイナ、君の無詠唱で行えるにも関わらずダウン効果の少ない回復は重要だ、頼んだぞ」

そんなフェイルの流れるような指示に、俺たちは頷き、そしてその広場に足を踏み入れた。

そして、四組全員が広場に入った時、少しの暗がりの中、それが姿を現した。

『Asterios』
アステリオス

そう、頭上のHPを表すゲージと共に、その巨体の名前が浮かび上がる。

隆々とした体躯 リュウですらその肩に身長が届いていないの、二足歩行の怪物。

神話の世界や、絵などではポピュラーなもの。

牛を思わせるその顔、しかし、その血走った目、頭部の螺子巻かれた角、そして、背中と肩から生える四本の腕は、威圧感をひしひしここちうに伝えてくる。

ミノタウロス。

そう言葉に表したほうが、伝わるだろうか。

そして、その俺達の前に立ちはだかった怪物が、地が轟くような声を上げる。

「…………来るぞ！ 散開しろ！」

そんなフェイルの声に、全員がはっと各自取るべき行動をとり始めた。

俺も、側面に回りこみながらその存在感の他に出現する敵がいかを探る。

（先輩…………たしかにダンジョンといえばメジャーですけど、第一層からこれはひどいでしょう！ もっと最初はゴブリンとかそういう優しいボスじゃないんですか！－）

そう内心全力で呪詛を吐きながら、今のところはその一体だけであることを確認する。…………というかそう願いたい。

フエイルの声に一番に反応したリュウが正面に立ち、その腕の一撃を大剣の横腹で止める。後衛職が距離を取る時間を稼ぐためだ。

すら超えてHPが微量に削られている。

「…………おいおい、戦士で硬いリュウさんでそれって、俺が喰らつたら一撃でレッドゾーンじゃねーか」

俺がそれを見て慄いていると、そんな中勇敢にも背後に回りこんだ格闘家の一人が、その空いた背中に飛びかかった。

「…………！」

しかし、あたかも背中に目があるかのように、リュウに攻撃している一本とは別の一本の腕が反応し、体ごと受け止められる。

押しつぶされる！

「やばい！ ネイル！」

そう感じた俺が後方でタイミングを伺っていたネイルに叫び、そいつの足元に双剣の連撃 哀しいくらいHPが減らない を浴びせかけていく。しかし、それでも俺の攻撃が癪に障ったのか、そのまま引き裂こうとしていたその男を俺に投げつけ、吹っ飛ばされるも何とか難を逃れる俺たち。

「ブレイズ・フレイム
轟の紅炎」

そこに、ネイルの詠唱が間に合い、追撃は免れた……しかし、それでもHPゲージはそこまで減らず、ほとんど最初と変わらない。

(くそつたれ、冗談じゃねーぞ。マジすぎだらこのレベルは)

俺は起き上がり、内心で呻く。投げつけられた男が礼を言つてくれるも、お互ひ答えている余裕はない。

ネイルにしろ、リュウにしろ、今俺と共に弾き飛ばされた格闘家の男にしろ、現状の上位プレイヤーである……にも関わらず、攻撃はあまり通らず、下手したら一撃でほとんどが削られる。どんな無理ゲーだ。

そんな絶望感の中、フュイルとローザがそれぞれ別の側面からその剣戟を加え、リュウが正面に上段から大剣を振り下ろす。その連携と精神力はもはや感嘆するしか無い。

「…………ツ！」

俺も、盗賊専用の投劍をオブジェクト化。その頭部に向けて投げつけた。

「グオオオオオツ！……！」

響き渡る雄叫びと共にその腕を振り回し、全ての攻撃をはじき飛ばすモンスター。しかしそこに、すかさず魔術師達の攻撃と、弾き飛ばされた前衛達への回復がかけられる。

巣原田に見て、10分の1程削れたか。

そして、初めてダメージらしいダメージを受けたそいつは、吹き飛ばされる範囲にいなかつた結果、一番近い位置にいる俺に目を向ける。…………ほんとうに勘弁して欲しい。

「…………やべえ」

咄嗟に回避に入ろうとするも、一瞬の迷いのせいで横薙ぎの腕を避けられないと見た俺は、一か八かの賭けに出た。

『柔法の一・受け流し』

俺の性質『優柔不斷・柔術スキルアップ』のおかげで使用できる本来格闘家のための戦闘技能。

「…………くっ！ らあ！」

俺は双剣の柄を使いながら、腕全体をしならせて衝撃の方向を変える。

(…………完璧、だろ！)

そう俺の思った通り、タイミングは完璧だった。相手の巨体もも少しよろめぐ。

なのに何故、俺は今後方へとよろめき、エマは三分の一も削られているのだろうか？

(少しじぶりごと血口満に浸らせよう！ 何で成功したのに喰らってんだ！？)

しかし、その隙を本来の前衛である者たちが見逃さずに攻撃する。そしてアイナの回復とトゥーレーネの支援の歌の効果が俺を包むありがたい。

もう少ししずつ、削っていくしか無い。

それが全員の共通認識。

そしてそんな薄氷を踏むような戦いが、15分ほど続いた時、ようやく相手のHPはレッドゾーンに差し掛かってきていた。

しかし、そんな時だった。急に『Asterios』^{アステリオス}の行動パターンが変わる。それまでは、あくまで自分に近い標的が攻撃対象だつたのに対し、突然後衛のトゥーレーネやアイナに目を向ける。地味ながら、回復と支援で戦闘の要となっていた二人だ。

「まずい、後衛を守れ！ 来るぞ！」

フェイル達がそれに気づき、即座に応戦するも、体ごとダメージを受けるのにも構わず突進するそれに弾かれる。

その前には、トゥーレーネとアイナ。

(間に合わねえ！)

そう俺が思つた時、その眼前に小さな生物が顕現した。……影の中に隠れていたはずの『クロ』だ。

そんなクロが、その巨躯の放つ威圧感に動けずに入るトウレーネとアイナの前に立つ。ミノタウロスの巨躯に比べてあまりにも小さいが、精一杯の威嚇の後、その巨体の影を掘るような仕草をした。

「ガ……ウ……？」

そして、その行動に急に足元が崩れたようにたらを踏んだその隙に、二人は他のプレイヤーによつて距離を取るように導かれる。

その結果、アステリオスの目が向くのは、思いがけない邪魔をしたクロ。そして、いらっしゃいた様に腕を振り上げる。

「くそつたれ！」

一人を助けようとした結果一番近くにいた俺は、それを見たとき咄嗟に飛び出してしまっていた。

人ではない、A.Iで動いているモンスターの為に、なんて考えている暇など無い。その手がクロに届くと共に、俺は背中に息が止まる程の衝撃を受け、壁にたたきつけられた。

（…………グッ！）

声も出せずうずくまる俺。腕の中に温もりを感じる。

「……………グル」

弱々しい鳴き声が聞こえる、クロは何とか無事か……しかし、視界の隅が赤い、おそらくHPが1／4以下に削られてしまっていた。そんな俺達に地響きと共に足音が近づいてくる。

剣戟の音からして、必死で止めようとしてくれているようだが、止まらない。

牛という特性から、レッドゾーンになると猪突猛進にでもなる設定なのかよ、と内心で思つ。まだ、体は動かない。

田を何とか向けると、リコウの巨体ヒトツヒル達が吹き飛ばされるのが見える。

(これは……やばいかも)

もう感じた。 その時。

「…………！」

衝撃音としか言いようがないような打撃の音が、聞こえた。 音の源は……杖を持った小柄な少女。

アイナ！？

俺は動かない体で驚愕する。

無口な僧侶であるはずの彼女が、普段とは違い怒りに満ちた表情で、何故かモンスターの巨体に攻撃を浴びせながらひるませていることが信じられない。

「くそ……まだしごれは取れないのか……一体何が起つてる」

俺は信じられない気持ちで、眼前の光景を見やつていた。

九話（後書き）

中途半端なとこ切つてすいません。九話が長くなりすぎて十話が短そ娘娘たので……次書き上げたらすぐ投稿します。
お読みいただけの方、ありがとうございました。

十話（前書き）

本日2つ目の投稿です。よろしくお願ひいたします。

目の前にそのモンスターの巨体が迫ってきた時、アイナは動けずにいた。

(…………怖い、嫌…………)

恐怖心しか出てこない。

隣にいるトウラー＝ネも動けずにいる。

無理もない、先ほどまでですら、フエイル達が弾き飛ばされるのに恐怖を覚えながら、何とか自分の仕事をこなしていたのだ。

その矛先がこちらに向かられれば、抑えていた逃げ出したい気持ちが溢れてしまつ。

そんな時、一人の前に小さな影が現れる。

「…………クロ、ちゃん？」

目の前に現れた影は、先日トウラー＝ネが連れて帰ってきた黒猫。正確には黒い虎らしいが、だつた。猫が好きなアイナは、一瞬で気に入つて、昨日も一緒に寝たのだ。

そのクロが、自分たちの身を守るために、自分の何倍もあるうかという相手に対して威嚇している。

(…………あ、ああ)

それでも、アイナの足は動かない。

「早く！　こっちへ！」

それから田を離せず、かと言つて動けずについたアイナは、他のプレイヤー達に引かれ、その場を離脱する。

「…………ツ！」

そして、引っ張られながら、それでも田を逸らせなかつたその瞳が見開かれる。巨大なモンスターの腕が、クロに迫り、そして飛び込んできた黒い影と共に弾き飛ばされた。

「え…………トール……くん？」

隣で、トウレーネの呆然とした声が聽こえる。

優しい、抜けているところもあるけれど、抱きしめてくれる腕が暖かい、トウレーネの震えた声がする。

彼女と仲のいい、今弾き飛ばされたトールは、壁にたたきつけられたまま動かない。そんな彼が必死に腕に抱きしめているのは、口。

そして、動かないトール達に、アステリオスと呼ばれるモンスターは近づいていく。

「…………よくも」

そんな光景を見て、怒ったような声が自分の口から漏れるのを、アイナはかつとなる頭の一方で冷静に驚いていた。

それも束の間、頭が熱に侵される。体の指の先までが、燃えるようになつた。

そして、アイナはその衝動に従つままで、地を蹴つた。

性質開眼 : 『? ? ? ?』

『狂戦士』
バーサーカー

アイナの性質のうち、一つだけステータスで見る事が出来なかつたものが、形をなした。

その時に、ステータスを確認する余裕があれば、全ての物理パラメータが急激に上昇しているのが見て取れたであろう。

目の前で、モンスターを止めようとしていたリュウ達が飛ばされる。

それでも、衝動の赴くまま、アイナは舞い始めた。

杖術スキル『終の舞・三散華』。

光速の連撃を繰り出すアイナの細腕に激痛が走る　でも、止まらない。

みるみるうちに、その醜悪な表情を浮かべたモンスターの命の火が、削られていく。

そしてそれは、攻撃を始めてから15秒間、続いた。

しかし、足りない。

あと僅か、そのモンスターのHPゲージを残したまま、アイナの舞は終りを迎える。

アイナは急激に体が重くなつたことに耐えられず、膝を付いた。

(もう、立つていられない)

そして大きな影が、アイナの小さな体に覆いかぶさる。

ツ！

その衝撃が振り下ろされる前に、アイナの前に立ちふさがったのは、龍の刺青が目立つ巨躯。そして、その大剣を支えるように左右にいるのは、フェイルとローザ。

「……つたぐ、無茶しそぎだ、嬢ちゃん」

すんでのところで間に合つたリュウはそう告げ、目はそらさずにそのまま腕に渾身の力を込める。……この戦いが始まって以来、初めて前衛がモンスターを押し戻した。

すかさず細かな連撃を加える他の二人。背後からは、他の前衛達も攻撃を加え、一瞬ながら、モンスターに硬直が起きる。

そして

「そのまま退いて下さい！」

「…………もう、許しません」

ネイルと、そしてどこか静かな怒りをまとつたトゥーレーネの声が響く。

その声に、アイナを抱えて飛びすぎるリュウ達。

『アーダー・ポインツ
『灼熱の雲』
『シルフ・ディマイス
『終焉の蒼風』

二つの魔術が発動し、それぞれ相互的に作用して、硬直しているモンスターを包みこむ。

「…………」

言葉に表せないほど、広場全体に響き渡る絶叫。それと共に炎の渦の中で天井に向けて発せられたライトエフェクト。

静かにその効果が終了した後には、モンスターの影はもう、見ることはなかった。

「…………やつたのか？」

よりける中、何とか壁に手をついて立ち上がった俺は、そう呟いた。

眼の前には、あの威圧感を示していた巨躯は、もう見えない。

その時、地響きと共に奥の壁が動き始め、言霊の水晶をはめ込む窪みがその姿を表した。

俺は、はっと我に返り言霊を嵌めこむようにフェイルに告げる。

頷いて、フェイルがそれを窪みにはめ込んだその時 透明だった水晶が、虹色に輝きはじめる。

そして、ログインするときに聞いた、女性のアナウンスが流れ始めた。

「只今、バベルの塔第一層がクリアされました。繰り返します、バベルの塔第一層がクリアされました。これにより、『熱砂の砂漠』『氷雪の山脈』『死霊の湿原』が開放されます。また、『転職士』

が神殿に降臨致しました。おめでとうございます。それでは今後共、広がる世界【Baby10】を、心行くままお楽しみ下さい」

その声を聞いて、俺は安堵から地面に膝をつく。ほっとしたことからか、激痛が走る。クロガ、頬を舐めてくるのを感じながら、何とかそれを押しつぶさないように倒れこみ、俺は静かに気を失った。

「【Baby10】開始21日後。バベルの塔第一層攻略完了了！」

あの第一層攻略から9日後。

俺は、街の北部にある、見晴らしのいい高台に来ていた。
隣に立つのは、出会ってからの一週間で完全に俺の相棒のようになつたトウレーネ。

少し後ろには、フェイルとローザの二人。

その隣には、リュウの肩に上り、頭にクロを乗せながら遠くを見つめるアイナ。

そして、自称から始まつたものの、本当に『轟炎の魔術師』等と呼ばれ始めたネイル。

つい先程、『アル』の最終アナウンスがあり、この時間、区切りの音と共に、現実が交わる事を聞かされた俺達は、ここ、街で一番遠くが見渡せ、そして天高くそびえる『バベルの塔』も眺められる場所で、死の遊戯の始まりを迎えていた。

天高くそびえ立つ塔のある街に、鐘が鳴り始める。
特に大きな音というわけでもないのに、ただひたすら響き渡る、
鐘の音。

どうして鐘の音は、いつも何かを区切る音として響くのだろうか。

幼い頃のチャイムの音。

一年の終りと始まりを告げる、除夜の鐘。

結婚式で鳴り響く、祝福の鐘。

お葬式で別れを告げる、仏具の鈴。

そして、今。 僕は、「」の音を一度と忘れないだろう。
交わるはずのなかつた、仮想現実と現実が、その境界線をなくした音だ。

「少し、マナー違反っぽいことお願いしても、いいですか？」
その音が終わり静寂を迎えた後、トゥーレーネが、急にそんなことを言つてくる。

「なんだ？ 僕にできることなら、大人的なことでも可だ。むしろその場合敢えて聞く必要はない。大歓迎だ」

俺は胸を張つて答える。マナー違反と聞いて、すぐにそれを思い浮かべた俺は男としては間違つていはないはずだ。 もつとも、本当にそうなつたら腰が引けるとか、そんな事はない……とは思うが、きっとな。

冷たい目線を感じる。

ローザではない、ここにところ悪い影響を受けたようで 僕も

俺も

ある時から少し慣れてきて、[冗談を言えるようになつたからだ]田で語るようになったトウレーネからだ。

「…………こんな時に何ですけれど、一度死んだら、そういうのは治るんでしょうか」

視線の方向から、とても綺麗な笑顔で、綺麗な声が帰ってくる。

「…………おい」

「あ、安心して下せー、今のはコメントに対する話ですからマナ一違反とは別ですね」

「いや、死ねって言つのもマナー的にはどうかと……」

「この間、セクハラする男に人権は無いって、ローザさんもキヤルさんも言つてました」

近頃教育を受け始めたらしい、純粋だったはずのトウレーネさんです。

「…………すまない、俺は、嘘は付けない男なんだ」

「格好良い風に言つてもダメです……ああもう、話が進まないじゃないですか！」

そう、調子に乗る俺に、もう、と頬を膨らませるトウレーネ。

ちなみに、まだそやつて直球で可愛らしい表情を向かれると、平常ではいられない。口調がぶつきりぼつになつていたのが、照れ隠しにふざけるようになつただけだ。

「すまんすまん、で？ なんだ？ 真面目な話何でもいいぞ」

「良かつたです、また無限ループに陥るのかと思いました……」

「死ねと言わされて喜ぶ趣味はない」

話を戻そうとした俺に、じとー、と突き刺さる視線が痛い。いや、本当に無いつてそんな趣味は。

さすがにいたたまれなくなってきた俺は、頭をかきながら謝る。

「すいませんでした」

「……しょうがないから許してあげます。でも、そうですね、やっぱりなんでもあります」

そう言つて、振り向いてアイナのもとに向かひマチカーレーネ。俺は慌てて後を追う。

「……すじく氣になるんだが」「そして、更に謝罪を示しながらトウレーネに聞く俺。皆、そんな顔で俺を見ないでくれ クロまで、お前だけはわかつてくれると思っていたのに。」

「皿で」

「……え?」

俺は情けない顔をして聞き返す、そんな俺にトウレーネは少し笑い、そして皿にも皿を向けて言つ。

「皆でクリアして帰つたら、お祝いがしたいですね、って、そう言おうとしたんです。現実にあるジンさんのお店に行つて、皆でオムライスを食べるんです」

リアル割れ。

素顔の分からぬインターネット上では、マナー違反。

厳密には、お互に教える分には何の問題もないし、実際今回は同じところからログインしているため、それこそすぐに出来うつことになるかもしれないが、不思議と現状のこの中では言葉にしない、事。

でも俺たちは、そんなトウレーネの言葉に、自然と笑つて頷いた。

本当に、いつかそんな日が来ればいいと、そんな日が来ると、そう思ひながら、今いる場所の、美味しい料理を出す店に向かって、歩き出す。

【Baby1on】開始30日後 チュートリアル終了 デ

【アイナ】

職種：僧侶

主要武具：杖

屬性
無

性質：内向的（回復呪文時、自己回復）、無口（無詠唱時効果ダウ
ン軽減）、狂戦士（感情の高ぶりが限界値を超えると発動。20秒
間物理パラメータ大幅アップ。効果終了後、5分間全パラメータ半
減）

十話（後書き）

これで二章は終了です。改稿は入るかも知れませんが。この後に、閑話と人物設定を挟んで三章になります。

ここまでお読みいただけた方、ありがとうございました。

登場人物紹介

今回は、以前ご指摘で頂いたこともあります、キャラの設定集です。内容として出てこない設定もあります。今後の展開のネタバレは省くようにしますが、後から思いつくかもしれない（むしろ書いてるうちに登場人物に暴走されてできたような話のほうが多い）のでは時にはあるかもしれません。更に、基本この物語を書く前に作った元々の設定なので、食い違う可能性も否めません。

＜影山透「トール」現在25歳＞

【職業】：盜賊

【装備】：双剣

【外見描写】

黒髪黒目、瘦身。170cm58kg

普段髪を切りに行く時間がないため、後ろ手に無造作に縛つてい
る。

現実とほぼ同じ容姿。これは、特別格好いいわけでもないのに整
っているため、何か設定を変えると不自然になつたため。

【内容設定】

Babylonシステム開発メンバーの一人、主に雑用王と呼ばれ、サドック気しか無い先輩達に満遍なく可愛がられる（遊ばれる）結果、コーティリティ劣化版に育て上げられている途中。

基本的には長いものには巻かれる体质で優柔不断な裏方、つまりはよくいるモブキャラ。

実は『アル』と仲が良かつた。2chのスレなどを初めに教えた

のもトール。遅かれ早かれ情報としては見ていたはずなので、実際あまり関係はないが、そのことから、必要以上に責任を感じてそれに押しつぶされそうになつており、自覚もあり、ソロプレイに徹していた。その後ローザの脅しと言つ名の気遣いによりソロではなくなる。元々はどんなMMOでも中級程度のレベルであつたが、それはかけている時間の問題であり、開発者の観点から見る戦術は面白かつたりする、予定。

【属性】：闇

【性質】：

『臆病者』

索敵範囲アップ・逃走速度アップ・罠発見効果アップ

『優柔不断』

柔術系スキルアップ・斬撃系耐性アップ

『裏方』

パーティメンバーへのアイテム使用効果アップ・補助呪文効果継続・
隠密効果アップ・モンスター遭遇率^{リンク}軽減

＜フェイル 現在26歳＞

【職業】：戦士

【装備】：ロングソード

【外見描写】

銀髪青目、普通。 176cm 65kg

髪は耳元が隠れる程度の長さで、切れ長の目に穏やかな光をたてる好青年。

容姿をほんどいじつていなが、それでも主役をはれる猛者。男女問わず人気。

【内容設定】

互助ギルド銀の騎士団のギルドマスター。MMOが好きで、様々なジャンルで有名であつたりする。

高校まではサッカー一筋だったが、大学で寮の同室がMMOに詳しくやつていてるうちにそいつよりも上手くなつた多才な人間。そこでも負けたそいつが悔し涙を飲んだとかいないとか。

【属性】：光

【性質】：

『多才』

全スキル取得可能（向き不向き、制限はあり）

『勇猛果敢』

前衛時、物理パラメータアップ・スキル『威圧』無効化・劣勢時、全パラメータ少量アップ。

『？？？』

不明

〈ローザ 現在21歳〉

【職業】：戦士

【装備】：レイピア

【外見描写】

黒髪黒目、スレンダー。158cm（女性の体重はどこからが瘦せてるとか人によつて違いすぎてよくわからんのでこの後も描きません）

髪は肩までの長さを、後ろでくくつていてる怜俐な美人。目は細長、まつげが長く鼻筋が通つていてる。

【内容設定】

銀の騎士団ギルドマスター補佐。

現実では大学生、教職免許あり。教育実習に行つたクラスの子供

達が完全なるまでに忠誠を誓つたとかいないとか。頭脳明晰の才媛。

女性に頼られることが多いが、実際仲がいいのはトゥーレーネとキヤルくらいであつたりする。初日、フェイルに助けられて以来行動を共にする。補佐、といふかむしろ秘書？

戦闘時はその纖細な剣さばきで、小技を駆使して相手を縫いつける。ヒットアンドアウェイの戦法を取る。

【属性】：霧（水）

【性質】：

『冷静』

炎耐性。剣戟に属性『氷』が派生。

『慎重』

罠回避アップ。宝箱解除率アップ。

『女帝』

性別属性のある敵の場合、相手が であれば『威圧』効果（プレイヤー相手でも有効）。モンスター捕獲率ダウン。

〈リュウ 現在29歳〉

炎耐性。剣戟に属性『氷』が派生。

『慎重』

【職業】：戦士
【装備】：グランソード
【装備】：大剣

【外見描写】

灰髪灰目の強面、筋骨隆々。 192cm 98kg

灰色の髪を短髪に刈り上げた強面。右の二の腕には昇り龍の刺青がある。

【内容設定】

銀の騎士団幹部。

兄貴タイプ。筋肉のようで、冷静に現状を把握することも出来るプレイヤーでフェイルにも信頼されている。フェイルと一対一の仕

合をし、負けた後つき従う古風な男。多分ロールプレイでは無く素でそんな性格。思う存分その巨躯を動かせると聞き、応募すると当選し今に至る。

現実では実家勘当中。姪があり、懐かれていたため、同世代に見えるアイナにもそんな感じでつい接している。実は少し怖がられると傷つく程度に纖細。かもしれない。

【属性】：地

【性質】：

『豪胆』

威嚇系効果全無効化。

『勇猛』

前衛時、物理パラメータアップ。

『ギャンブラー』

攻撃判定時、与えるダメージが3倍から2分の一まで変化する。
幸運『スキルと同一の場合効果アップ。

<ネイル 現在19歳>

【職業】：魔術師

【装備】：ロッド

【外見描写】

金髪灰目、細身。 172cm 53kg

カナダ人と日本人のハーフ。

人形のような顔立ちの、黙つていれば絵になる美青年。

【内容設定】

銀の騎士団の魔術師。

現実では大学一年生。ファンクラブがあるとかないとか。

ナルシストな所があり仕草はうざいが実力は確か。圧倒的火力で相手を焼き払う、しかし微調整は苦手。ただ、変な美学があり弱いものは率先して守る上、ある意味同じ田線で遊ぶため地味に子供に好かれる。

残念な美形一号認定。

【属性】：炎（火）

【性質】：

『自己犠牲』

パーティの誰かが瀕死時、HPを分け与える事ができる。

『自己陶酔』

自分への支援効果アップ

『厨二病重症者』

HP1/4時、魔力暴走効果

<アイナ 現在13歳（もうすぐ14歳）>

【職業】：僧侶

【装備】：杖

【外見描写】

鈍色黒目：134cm

鈍色の髪をお下げにしている可愛らしい外見。その体格に見合わぬ胸にコンプレックスがある。かも。

【内容設定】

無口だが優しい少女。

内向的であるが、誰かに流されることはあまりない。ただ黙つて隠れる事が多い。

18歳以下に関しては保護者の承認がないとキャンペーンに参加できなかつたが、とある理由から承認が出たことによつて今回参加

し、巻き込まれる。

猫が好きだが、キヤルは怖い。クロを頭に乗っけているが、いつか虎になつて大きくなるとトールに聞き、少し悲しい今日この頃。

【属性】：無

【性質】：

『内向的』

回復呪文時、自己回復効果

『無口』

無詠唱時効果ダウン軽減

『狂戦士』

感情の高ぶりが限界値を超えると発動。20秒間物理パラメータ大幅アップ。効果終了後、5分間全パラメータ半減。

<トゥーレーネ 現在21歳（ローザの一ヶ月）>

【職業】：吟遊詩人

【装備】：棍

【外見描写】

赤味ががつた茶色の髪（栗色とかあつたつけ？）茶目：156cm
美人だが、雰囲気により可愛らしい感じになつていて。しかし、怒つた時などの目線は強い。

【内容設定】

とある理由（閑話一話目で紹介予定？）から教会の施設で暮らしている音楽学校生。

同じくそこで暮らす義弟や義妹に好かれている、やわらかなお姉さん。歌をうたうのが好き。

ちなみに料理は壊滅的にまずい。そのせいで義弟や義妹の家事ス

キルが上がり、トゥーレーネのスキルは下がっていく一方であるが、それでも愛されるキャラ。

罠によく引っかかり、トールによく後始末をしてもうう。トールに助けられたことから行動を共にし、同居人であるアイナとも仲がいい。ちなみに、性格は違うが年の近いローザとも仲が良かつたりする。後にローザ、キルの教育により、少しづつトールとの力関係が変化していく……予定。

【属性】：風

【性質】：

『純真』

被支援効果アップ。稀に戦闘なしでモンスターを捕獲する 0・1%

『温厚』

雪原ダンジョン・フィールドでの状態変化・『凍結』防止

『歌姫』

呪文・詩、詠唱時効果三倍

＜キヤル 現在24歳＞

【職業】：鍊金術師

【装備】：猫耳猫尾

【外見描写】

赤髪茶目：152cm

大きな瞳と赤い短めの髪が、何か猫耳に合っている。（そのためトールは最初隠し仕様かと勘違いした）。胸は……これかららしい。その体型も相まって幼く見られることが多いが、実は周囲の女性の中では最年長であったりする（ローザより一つ上）

【内容設定】

関西弁のよく喋る女性。自分より小柄でありながら大きな胸をもち、なおかつ可愛らしいアイナにまとわりついで引き剥がされている。

初めて来店したときに捕まえて着せ替え人形にした結果、怯えられもう来てくれない。

商家の娘だが、研究に勤しみ大学にて研究中。現在博士課程一年。ある理由から、犯罪者はなんであれ嫌惡する、が、トルくらい馬鹿だと許せるらしい（まあ犯罪者じゃないけど）

戦闘は苦手な職種だが、開発した薬品や武具で、ザコ敵くらいなら掃討できる、ちなみにアイナと共にクロにも怯えられている。

【属性】：無

【性質】：

『猪突』

突き系武具装備時、効果アップ

『集中力』

状態異常全無効化

『創造者』

道具・武具開発時成功率大幅アップ。

＜ジン 現在33歳＞

【職業】：料理人
【装備】：鉄鍋

【外見描写】

スキンヘッドに黒目：185cm 80kg

切れ長の目、太い眉と鼻。分厚い口。

革ジャンを羽織れば、誰もが逃げ出す容姿。リュウと並ぶと威圧

感が半端無いとはトールの言。

【内容設定】

無口な職人。

元々現実でも料理人だが、客にゲームでも料理ができるものがあると聞き応募、当選。

現実での店は、洋風料理屋『隠れ家』。

戦闘も好きで、ファイアードなどにも参戦し、格闘家顔負けの戦い振りを見せる。トゥレーネやアイナのことは気に入つてあり、よく料理の新作を食べさせている。

ゲーム内の店『満月亭』は銀の騎士団憩いの場となつている。

【属性】：無

【性質】：

『威圧』

自分よりレベルの低いモンスターをひるませることがある。

『無骨』

死靈系のモンスターに対する攻撃力アップ。

『料理人』

元々の現実で作ったことのあるレシピを再現できる（ただし、追加効果はつかない）

登場人物紹介（後書き）

こんな風にキャラの設定だけしてたら、色々この皆さん、僕の実力不足で書いてるうちに暴走なされるので、変になった時指摘してくださいさつた方々には感謝の念を。

閑話 ある開発者の一幕～教会の子供達～

「……ねえ、お姉ちゃんはまだ帰つてこないの？」

「ほく、この間テストで100点取つたから、褒めてもらえるかな……もつすぐ帰つてくるかな」

「ああ……いい子にしてたら、さつとすぐ帰つてくれや……さつ」と

この施設では最年少である小学生の子供達一人に、面倒見のいい、高校生の玲れいが答えるのを遠くに聞きながら、風間翔平は窓の外を見上げた。

建物の裏手にある、綺麗な紅葉が見える。

もう11月も半ばに差し掛かる頃、樹々が色づき、寒さが厳しくなつてくる。

今年で60歳。還暦を迎へ、数年前は比較的黒かつた髪も今は綺麗な白髪となつた翔平には、少し堪える季節だつた。

そして、翔平はいつものように壇上の前に立ち、默祷を捧げた後、それを見上げる。

光の差し込む頭上のステンドグラス。
そして、それに照らされる十字架。

ここは、都内にある小さな教会。

翔平は、区に委託され、ここで様々な事情から家族を失つてしまつた子供達を預つていた。皆、暗い過去を持ちながらも、よく笑う、子供のいない翔平にとつては大事な、本当に大事な子供達だ。

そして、そんな子供達に好かれ、彼等を笑顔にしていた源である彼女の微笑を見ることが無くなつてから、もう一ヶ月が過ぎようとしていた。

今でも振り返れば、カールした栗色の髪を肩になびかせた、柔らかな雰囲気の彼女が食事の時間を告げに来るのではないかと、どこかで感じてしまつ。

「…………おや？」

「ひからに向かい駆けてくる足音に、まさか本当に、等と思つて振り返つた翔平は、そこに立つ少女の姿を見て、そんな事を思つてしまつた自分に苦笑する。

（全く、そんな訳がないでしょ）

そして、翔平はそう内心で呟き、足音の主、かさまかえで風間楓を穏やかに迎えた。

眼鏡をかけ、黒い透き通つた髪の毛をお下げにしたその少女は、息を切らせて膝に手を載せている。

「楓？　どうしたんですか、そんなに走つて」

そして、そんな様子の楓に翔平は笑つて尋ねる。しかし、その良い年の重ね方をしたような皺の多い微笑は、楓の次の言葉で驚きの表情に変わつた。

「カズくんが……カズくんがさつき、お姉ちゃんに会えるかもしないって！　返事が来たつて！…………はあ、はあ」

そう息を切らしながら必死で伝えてくる少女の言葉は、翔平を含めたこの教会にいる全員にとって、大きな意味を持つ、重要な事柄

だった。

「……晃、お休みのところを悪いのだけど、少し起きてもらいたるかしら？」

そんな言葉に、須藤晃は目を覚ます。

時刻を見ると、仮眠室にある時計は、午前8時を少し過ぎた辺りだ。

昨日は同僚の圭一と飲んだ後、終電を逃しオフィスにそのまま泊まつたのだった。

(休みの日だったので、随分と早い出勤だこと)

そう内心でぼやきながら、晃は声の主、広報課の同期である木谷純子の顔を見る。

短く整った黒い髪に、気の強そうな大きな目。

学生の頃は読者モデルをやっていたというほどのその美貌とスタイルは、出会った頃から8年程経つ今もあまり変わらない。もうすぐ30歳を迎えるといつこの間に、本当に年を取っていないのではないかと思うほどだ。

これで生活力も稼ぎも人並であればもう結婚していただろうに、下手すると晃よりも稼ぎのいい彼女は必要がないからとまだ独身である。

今日は休みの日だといつのこと、いつもと変わらないびしつとした制服を身につけている。また、会社に泊まるんじゃないことお小言を

言われるのかと、少し一匂酔いの残る頭で考えながら、晃はその大きな体を起こした。

「……今日は休みの筈だが」

「ええ、だから、ここで寝ていたことは問わないでおいてあげる。その代わりと言つてはなんなのだけれど、少しお願いがあるのよ」

「何だ？」

「……その前に、少し顔を洗つてらっしゃい。特別に熱いコーヒーを入れてあげるわ——瞬で目が覚める程苦いのをね」

その声に、少しずつ眠っていた頭の芯が覚醒を始める。

とりあえず言つ通りにしようと、晃は立ち上がり、まだふらつく足で洗面所へと向かった。

あれから一ヶ月、状況は何も変わってはいないが、世間の飽きは早いものようで、現状死人も出ず、また、新しい情報もない中、繰り続けたままのプレイヤー達の話題は、コースの最後などに少し触れられる程度へと沈静化していた。

あれほど騒いでいたネット上も、いまは人気声優が結婚し引退することを呴くのに必死だ。

「……で、話というのは？」

本当に苦すぎるほど苦い「コーヒーを飲みながら、顔を洗つて少しうつきりした晃は、会議室の向かいに座る純子に尋ねた。

そもそも今日は休日だ。純子がここにいること自体がおかしい。当番でない晃がいることもおかしいのだが。

「私が昔、施設の出身だと言つていたのは覚えてる？」

「ああ、教会にいたんだったか……それがどうした？」

昔、一度飲んでいたときに晃の親の話になり、そこから純子が話したこと覚えていた。そこに少し給料から寄付しているのだと口を滑らし、照れくさそうに内緒よ、と微笑んだ顔が、思い浮かんだ。

「……あれは中々良い顔だつたな」

晃が虚空を見上げながら、そんな事を呟くと、純子が嫌な顔をする。

「五月蠅いわね、何を思い出してるのよ……まあいいわ。そのことで少し、お願いがあるの」

「お前のお願いには嫌な予感しかしないんだが……」

「……それは間違つていないわ。晃、あなた、休日でもログイン会場に入る事のできる管理者の一人だつたでしょう？　そこに、少しの間融通をつけて欲しいの」

一瞬、何を言っているのかわからなかつた。
今、この綺麗な顔をした同期は、何と言つた？

晃がそんな事を思いながら呆けていると、純子が珍しく
に珍しいのだ　殊勝な顔をして頭を下げる。
そして言葉を告げる。

「私の、私の施設の義妹に当たる娘が、あの場所にいるのよ……
そして、私の恩師と、子供数人を会わせてあげたいの……現状の規則だと、二親等以内の親族以外は、立ち入れないことになつていて
から」

「……無理だ」

それに対しても、晃は端的に告げる。

「……何でもするから

「馬鹿かお前は、そういう問題じゃねえ！　といつか同期に色仕掛けを仕掛けようとするなんよ……怒るぞ？　友人としても、その頬みは聞けん……第一、例え俺が入れても無理なんだよ、警備員がいるだろうが？　全然似てもいない上に苗字も違う子供達をどうやってごまかすつもりだ」

少し目を潤ませて流し目を送つてくる純子に、ため息をつきながら晃はそう言つ。　他の男ならいざしらず、何年付き合つてると思つてやがる、そんな思いをのせた晃の言葉に、しかし純子は食い下がる。

「警備員が問題なら、大丈夫よ……あそこの主任は、私の友達の彼氏だから、そのへんの下準備はすんでるわ……だから、後は管理者の承認が必要なだけのはずなのよ。それも長い時間じゃない、五分だけでもあれば十分よ……それに、暴れたりもしないわ」

そう言つて、今度は真顔で真っ直ぐな視線を晃に向けてくる。

(全く、こりこりと表情を変えてきやがつて)

晃はそんな事を思いながらも、このまま押し切られる気が既にしてきていた。この同期は優秀な上に人脈も広い……おそらく本当に後は晃を落とすだけになつていてるのかもしれない。

元々は、家族以外の友人などの面会も、会場にて行われていた：
…在る時までは。

『アル』と『BabyOne』のことが公表されてから三日後、
問題が発生したのだ。

晃たちが見たこともないような専門家が言つ言葉に踊らされ、機械を止めさえすればプレイヤーが戻つてくると信じた者が、無理矢理にカプセルに眠るプレイヤー達の部屋でその動力源を切ろうとしたのだ……すんでのところで様子がおかしいことに気づいた関係者が取り押さえ、結果的には無事であったのだが、この事から、管理者・警備員の付き添いのもと、近しい親族以外は面会ができないことになっていた。

もちろん非難は出た……だがしかし、ゲーム等よりも、よっぽど現実に踊らされた人間のほうが危険なことが在るというのもまた、確かなのだ。少なくとも、外部からの干渉が何もなければ、プレイヤーの安全はある意味完全に保証されているのだから。

……そして現状、血の繋がりのない人間は、たとえ恋人であろううとその娘には面会ができない。

「……そういう事ならば、正式に手続きに回せば承認されるんじやないのか？」

「もうどっくに出しているわよ、実際通知が来るのを待つてもいたわ。でも、待たされた上に来たのは、『例外を作つてしまえば、問題が起こる可能性があるため申し訳ありません』っていう、そんな返答よ。たとえこれ以上交渉した所で、それじゃ遅いかもしない。それまで……あの娘が無事だという保証はないんだもの……あなたなら、よく分かっているはずよ?」

晃の最後の抵抗は、しかし純子の言葉に遮られる。更にその後に続けられた言葉が、晃を揺らす。

「お願い、たとえ血がつながっていなくても、あの子は私達にとっては家族なのよ」

「……万一バレたら、馘首ではすまないな」

「……つー ありがとつ、晃、本当にー！」

そして、迷いながらも諦めたような晃の返答に、純子が花が咲いたような笑顔を見せる。

入社以来8年前から、晃を魅了する、笑みだ。

それが、馘首をかけるようなこれから行動の代償には相応しいのかどうかはわからないが。

「おじさん、ありがとう」「ありがとうございます」

(全く、『おじさん』に慣れるようになるのは、いつ頃からなんだろうな)

そんな子供達の声に、複雑な内心を隠しながら晃は傾いて扉を開ける。

「五分だけだ」

そして、そう告げる晃の言葉に頭を下げ、背筋のピンと伸びた白髪の男性が頭を下げ、子供達を連れて中に入る。純子も、最後に続く。

「何かあつたら合図するから、外のことさせないでいい」

「……ありがとう」

晃が純子にそう小声で告げると、純子は少し立ち止まり、そう咳

き中へと入つていいく。

それを見送り、扉の前で壁に背をもたれかけさせながら、晃は待つ。本来ならば共にいなければならぬのだが、あの小学生も高校生も同じような表情を見ると、家族だけにさせてやりたい。晃にとつては長い、そしてきっと中にいる者にとつては一瞬に感じるのであらう、五分間。

静かな……とても静かなその時は、果たして彼等を……彼女を満足させられただろうか。

そんな事を思いながら、晃はこの奥にいる後輩のことも思い返す。今頃は、どうしているのだろうか。

まだ、誰も死亡はしていない。

晃はふと、当たり前のよう、ここに眠る全員が目を覚ませばいいと、そんな事を願つた。

「本日は、本当に私共の無理を聞き届けて下さいまして、ありがとうございました」

無事何事も無く外に出て、会場から離れた後、深々と頭を下げる

老人 翔平に、晃は慌てて手を振つた。

「……いえ、本来であれば、私どもが謝罪しなければならない立場です。 ですが」

「大丈夫です、他言はいたしません。感謝こそすれ、ご迷惑をかけるようなことはしないと、私も、子供達も理解しております」

少し口ごもつた晃の内心を読んだかのように、翔平が告げる。
そんな彼等に、晃は黙つて頭を下げる。

「では、機会がありましたら、私共の教会にもいらして下さい。歓迎させて頂きます……純子も、疲れたらいつでも帰つてくるといですよ。子供達も……私も喜びます」

そう言つて、子供達を連れて去つていく翔平を見送りながら、晃は呟いた。

「……穏やかな神父さんだな」
「ええ、私達の、自慢のお父さんよ」
それに静かに答える純子。

「戻つてくるといいな……あの娘も」
「透君も、ね……ねえ、今日は本当にありがとうございます、晃」
「……いや、いけないことなんだがな、久々に良い事をした気分だ」

改めて礼を言つてくる純子にそう言つて、晃は空を見上げた。明日からは、また何もできない仕事が待つている。

「この後夕食でも、どう?」
「今日の報酬になら奢られてやつてもいい」
「ふうん、本当に夕食だけでいいの?」
「だから、からかうなと言つてるだろ?」

そうやつて冗談っぽく笑う純子に、晃は頭をかく。
顔が少し赤くなっているのは、夕日のせいなのかどうか。
日が陰り、長く伸びた影が、少し重なりあいながら歩き始める。

}
2027年11月10日 とある開発者の休日
{

闇話 ある開発者の一幕～教会の子供達～（後書き）

途中で書いてるものが消え……傷心の中思い出しながら書き上げた作者です。正直無理くりですが、気力上明日改稿等します。では、お読みいただきありがとうございました。

一話（前書き）

三章、開始します。

今後共、よろしくお願いします。

『深淵の森』を抜けた先にある広大な砂漠フィールド『熱砂の砂漠』。

その一角では、四人と一体の戦闘が行われていた。

「…………ツ！」

俺が、懷に潜り込むと同時に、左後ろになびいた髪を大きな斧がかすめる。

刃先はボロボロ、しかし、その質量から喰らえればただでは済まない。最初から切ることではなく、押し潰すことが目的のよつな得物だ。

盗賊から派生する上級職である『暗殺者』^{アサシン}に転職したとはいえ、元々装甲が厚い職種ではない上に、STR（腕力）とAGI（俊敏）、それにDEX（器用）に多く経験値を割り振っている俺にとっては、その一撃一撃が脅威になる。

『死亡』がそのまま自分の人生の終わりに直結することになった現在では特に、だ。

しかしだからこそ、俺は更にもう一步を踏み込む。

眼の前に立ちはだかっているのは俺が踏み込んだことでの外しバランスを崩している『^{ガイアス・リザード}蜥蜴重戦士』。

近くで見ると、その棘張った肩当、盛り上がった筋肉を抑えつけるような鱗。そして牙が見える凶悪な顔。少し前の俺であれば、逃げ出したくなるようなリアルな外見。ただ、今は周りに頼りになる仲間たちがいてくれる。

俺は踏み込んだ勢いそのままに、双剣を交差させながら脇腹をえぐりそのまま背後へと駆け抜けた。

『双剣技・影炎』かげるう

切り裂いた傷口から、黒い炎が溢れ出し、その巨体を包みこむ。絶叫と共にライトエフェクトをまき散らしながら、静かにその大きな身体は虚空へと消え去った。

「…………よし、そつちも終わつたみてえだな」
同じよつにその背に構えた大剣で敵を屠つたリュウが、こちらを見てそう告げる。

『重戦士』になり、ますますその攻撃力と守備力に磨きをかけたこの強面の男は、味方でいてくれるのが本当に心強い。

実際には、純粹な攻撃力だけなら俺の方が上かもしけないのだが（その分装甲は比べるべくもないが）、その巨躯が近くにいてくれるだけで、精神的に安心するのだ。

「トールくん、リュウさん、お疲れ様です！…………もう少ししたらどこかで休憩しましょう」

「…………一人共、回復します」

トウレーネがそう言い、二人に近づく俺達にアイナが回復をかけてくれる。そしてその頭には、相変わらずクロが乗つかっている。

その影を操る能力で、足止めをしたり、どこかからアイテムを拾つてきたりと地味ながらいい働きをするこの黒影虎は、基本的にどういうA・Eが働いているのかわからないが、休むときはトウレーネの影、出でてきているときはアイナの頭の上が定位置になっていた。

当初は3であつたＬｖも10を超えて、いつかは虎になるはずだが、俺にはもういつそなるのかは正直わからない。

それというのも、どうやら他のNPCと同じように、捕獲モンスターのA・Iも『アル』の影響を受けているようで、作成者の俺が驚くほどに自然に様々な行動をしているからだ。

……………といふかもう結構便利で可愛らしい黒猫にしか見えない。

ちなみに、トゥーレーネは『魔詠師』、アイナは『武僧』にそれぞれランクアップしている。

簡単に説明すると、『魔詠師』は元々の吟遊詩人に魔術師の特性が加わったもの、『武僧』は僧侶に格闘家の特性が加わったものになる。

上級職では、元々がどちらの職種であつたかにより、例えば魔術師から『魔詠師』になつたものと、吟遊詩人から『魔詠師』になつたもので、得意とする技能やパラメータが変化していく。それに、そ重点的にどれかのパラメータを上げるものもいれば、それぞれを平均的に上げるものもいるため、一人として全く同じような人間はない。それに各性質や属性の影響も加われば尚更だ。

現状がどうかといふと、第一層を何とか攻略した後は、チュートリアルのうちに一層。そして、その後の一週間でもう一層を攻略し、現在は第四層の調査が始まっている。

そして、『死亡』者はまだ、出でていない。

これは正直、順調すぎるほど順調であるといえる。

ただ、この理由は、情報の共有が現状うまくなされていること。

上級職に無事転職が成功したこと。そして、あまり戦いに慣れる事が出来なかつたもの、恐怖が勝つたものが次々と生産職へと転職し、結果として精鋭たちで攻略を進められたこと。

さらに、これが一番の理由。単純に、第一層のボスよりも、少し軽めの敵であつたのだ、そこから二層のボスが。

他の面々は不思議に思いつつも楽観視しているものもいたようだが、俺は、この理由が少しだけ想像できる。

このゲームのメインとなるボスを『デザイン』、『塔』内部をメインに担当したあの先輩は、意地が悪い所がある。その性格を一言で言つなれば……『デレのないツンデレだ……』。

俗に、俺はそれをドSと呼ぶ。

あの人をうまく扱えるのは、その同期である、デザイナーの先輩と広報にいる美人の先輩だけだと思つ。

おそらく、最初にものすごい難易度の高い敵を配置し、その後少しだけ緩めた後で、また更に厳しくなつてているのだと思つ。俺に仕事を教えた時と、同じパターンだ。

油断させた所で突き落とすのが好きなのだ。鞭の後の飴は甘い、その事が次なる鞭の厳しさを想像させるが、その時には既に体と心は飴に慣れてしまつている。

そして経験上、そろそろだと俺の警鐘が鳴り響いていた。

色々とバレているローザには伝えたので、うまく引き締めてくれているとは思うが、今も、フェイル・ローザ・ネイルは他の人間と第四層の調査に入つてゐるはずだ。

俺たちは、それとは別で、比較的余裕のあるこの『熱砂の砂漠』で、曖昧だが目撃報告が上がっていた『言霊』モンスターの調査を

していた。

もちろん見つければ一度街へと転移し、体勢を整えるつもりである。

「あ、あそこがよさそうです」

歩く前に、回復ポイントでもあるオアシスを見つけたトウレーネが、そう言つて指をさし示した。

「……前と違つて、流石に連戦が続くのはきついからな、しかも腹が減りやがると力も出なくなつてくるし、ちょうどどいい頃合いだらう」

リュウもさう言つて、その傍らを歩くアイナもその言葉に頷いた。

俺も、ここまで戦い詰めであつたこともあり、少し息を吐き安堵する。

先程も言つたように、ここは、今の俺達にとってはそこそこ余裕のあるダンジョンだ。

だが、チユートリアルを終える鐘の音が鳴り響いたあの日の前と後では、一度の戦闘における消耗度が全く異なる事を俺達は皆感じていた。

行なつてゐる事自体は変わらないはずだ。

付近に出現したモンスターがいるかを索敵し、遭遇した時にはそのスキルを駆使し、戦術を用いて戦い、倒す。または、体勢が整つていない時には逃げる。

だが、実際にその攻撃を避けるとき、受け止めるとき。

頭ではまだまだ大丈夫だと分かっていても、必要以上に身体は強

張り、そして攻撃の時もオーバーキル（例えば、残りのHPが10の敵に、100のダメージを与えるような強い攻撃をして殺すこと）をしてしまうことが今でも多々あった　つまりは、無駄が多いということだ。

分かつていたつもりではあった。

しかし、実感できていなかつたのだということを思い知る。

「」の、HPを表すゲージが消えて無くなつた時、自分がこの世から消えてしまうのだということを、理解等できていなかつたのだと。

今ですら、理解できているのかわからないということを。

そして、俺はそれでも自分がここにいる事を考える。

今俺が戦えているのは、フェイルやローザのようにクリアに向かって努力しようとする他の人間がいるから……そしてトゥトレーネやアイナが頑張ろうとしているのが解るからだ。

開発者としての責任感などより、他の人間に理由を預ける俺を見て、他人は笑うだろうか？

そんな風に自嘲気味の思考にそれていつた俺の肩に、急に重みが加わる。

アイナの頭に器用に乗つっていたクロが飛び乗つてき、そしてアイナも何かを問うように見上げてくる。その、少し不安気に揺れている鈍色の髪がたなびくのを見て、俺は現実に戻された。

リュウとトゥトレーネも、少し進んで先でこちらを見ていた。トゥトレーネは穏やかに笑つている。

「すまんな、少しだつと/or>していた……クロ、お前いいやつだな」
まだ心配そうなアイナにそう笑いかけ、頬を舐めてくるクロの喉に手をやりそう告げる。それに気持ちよさそうに喉を「口」口と鳴

らす。……ネガティブになつていた思考が和むのを感じた。

(ある意味、こいつに認められたのが、あのボス戦の一一番の収穫だろうか)

そんな事を思い、くく、と笑つて止まりかけていた歩を進め始める。

確か、今日はジンが新作だ、と持たせてくれた弁当のはずだ。

心配してくれる仲間がいて、美味しい料理を作ってくれる人間がいて、口が悪いながらも助けになるものを開発してくれる人間がいる。

まだまだ、これから何が起こるかはわからないが、そんな状況だからこそ、こんな臆病な俺でも前に進むことが出来る。

そんな事を考えて、俺はアイナと共にオアシスの手前で俺達を待つてくれている一人の元へと急いだ。

（Baby1on開始 45日目 現在『バベルの塔』第四層
攻略中）

一話（後書き）

章の初めはいつも筆が重くなります。起承転結の転結は勝手にキヤラが動いてくれるからいいのですが、動かし始めるのに実力不足を痛感しています。

一つ、読んでくださった方に質問をしてみたいのですが、改行とスペースに迷い中なんです、今くらいで読みにくくはないでしょうか？ それこそ人によるんでしょうけど……

ストーリーはともかく、改行とか一行開けの書き方くらいはせめて読んでくださってる方の目が疲れない方にしたいんですが、ご意見頂けたらありがたいです。

では、読んでいただきありがとうございました。

一話（前書き）

プロジェクトの流れ通りには進めてはいるのですが、いざ文章にしてみると結構ここつて文章力によりぶつ切りに……明日には書け次第、すぐに次話投稿できるように頑張ります。

水がじょじょと湧き出る透明な泉に、数匹の魚が泳いでいる。

(……南国の淡水魚は美味しくはないと聞くが、あの魚もそうなんだろつか)

俺は、田端に泳ぐその群れを見ながらそんな事を考え、食後の一眼タイムを楽しんでいた。リュウは木陰で横たわり、トウレーネとアイナは、クロと戯れている。

リュウに、フェイル達からの連絡が入ったのは、俺たちがそんな風に回復ポイントであるオアシスでしばしの休憩を取り、そろそろ先に進もうかとしていた時だった。

「…………これは…………ツー！」

「どうした？」

リュウの顔色が、メッセージを読み進むにつれて険しくなるのを見て、少し離れていた俺はそう尋ねる。

少なくとも俺の知る限り、余程のことがなければリュウはこんな風に険しい表情を作ることはない。

その俺の声に、トウレーネとアイナもリュウの方へと顔を向けた。

(まさか……)

俺の脳裏にある予感がよぎる。

「……すぐに街に戻るが、トールとトゥーレー・ネモギルドと一緒に
来い」

しかしリュウはそんな俺の言葉には答えず、まずはそう言って起
き上がり、街へと戻るための転送陣を用意し始めた。

「答えてくれ、どうせ解ることだろ？。……何が、あつた？」

そのただならぬ様子に、俺は背を向けるリュウに向けて改めて聞
く。

そしてリュウが準備を終え、振り向いて俺達に告げたのは、先程
から頭の片隅に浮かんできた、ある悪い予感を肯定するものだつた。

「……『死亡』者が、出た。神殿に向かつた人間は、再出現を確
認できなかつたそつだ。……代わりに、カウントが減つていたと」

「そう、か……」

それを聞き、俺は力無く肩を落とす。

カウントとは、チュートリアルの終了を告げる鐘の音が終わつた
後で、神殿に現れた大きな石碑だ。

表示されているのはただ一つ、『15000』という数字。

何の数字を表しているかは、それを見た人間の誰もが理解し
た。

それは、今『生きている』プレイヤーの数を表しているのだとい
うこと。

カウントが減つたということはすなわち、この世界に生きている
人間が一人減り、『15000』が『14999』へと、減少した

とこうじ。

初めての犠牲者。

その言葉が俺の頭を巡り、そしてとても重い重圧がのしかかってくる。

「……わかつたな、取り敢えず、そこまで詳しい状況が書かれていたわけじゃねえ。早く戻るぞ」

リュウのその言葉に、俺たち三人は頷き、転送陣へと足を踏み入れる。

そして、ログインした時と同じような酩酊感の後、ギルド本部に転移した俺達を迎えたのは、泣き崩れた女性の姿と、沈痛な表情で佇む『バベルの塔』を調査していたフェイル達だった。

ギルド『銀の騎士団』の建物の一階、入ってすぐにあるその広間には、攻略を行う主力プレイヤー達の大半が集まっていた。30名ほどが暗い顔をしている姿は、葬列に参加しているように見える。そして事実、そのようなものであつた。

初めてのこの世界での『死亡』者となつたのは、攻略に参加している『狩人』の男だつた。

第一層の時、護衛するメンバーの代表格だったプレイヤーで、援護の弓使いに優れた氣のいい人間であり、俺も出会えば言葉を交わす程度には顔見知りである。

彼は、第四層ダンジョン調査中発見した、宝箱の解除に失敗したところを大量のモンスターに襲われ、転送陣を用意する間パーティーメンバーを逃がすために最後まで残り、犠牲になつたらしい。

そして今この場にいる全員の目の前で、その恋人であつた戦士系の女性がただただ泣き崩れている。茫然自失といった体でここに連れてこられたという彼女は、いつまで経つても神殿には現れなかつた相手を想い、少しづつ、何かが染みこむように壊れ始めていた。

「……どうして」

その言葉が聞こえる。

「……何でよ……誰のせい……責任者は誰よ……！　早く神殿にあの人を……生き返らせてよ！　きっとこんな嘘なんでしょう？　……本当は、あの人は死んでなんかいないんでしょう？」

途切れ途切れの呪詛が、哀しみの言葉が、聞こえた。その声の響きに、昏い狂氣の色が混じっていくのを、どうしようもなくただ感じる。

隣にいるトウレーネも、ainaも、リュウさえも、何も言葉を発せられないでいた。誰も、目の前で精神の安定を少しづつ失っていく彼女に、何も出来ないでいる。

ただでさえ平和な日本にいた俺たちは誰一人として、戦いで命を落とし、更にはその痕跡も残らないこの現状を、慰める言葉など持ちあわせてはいない。

知り合いが、大切な人が……そして、何より自分が死ぬかもしれないといふこと。

あの鐘の音と共に告げられた、仮想現実が現実となつた瞬間から、どこかで俺は……おそらく皆も、覚悟はしていた。

そしてその一方で、このまま誰も死なずに済むのではないかと、そんな淡い期待もしていた。この一週間を無事に乗り切つていたことで、決して無理をせず協力していれば、大丈夫なのではないかと、そんな事を考えてすらいた。

しかし、覚悟も、期待も、何もかもが甘かったことを目の前の現実が知らせている。

俺は、どうすべきだ。

自分が関わったもので人が死に、その事が原因で絶望に泣き崩れている彼女に、何が出来る。

怖かった。

それがバレて罵倒されることがただ、怖かった。

だからこそ最初は、一人でいたはずだった。…………それなのに、今の状況が起こった時、耐えられないだろうと思っていたのに、俺は、一人でいることより居心地の良い現状に、浸っていた。

俺は、最低だ。

そして、遅すぎるかもしれないが、彼女には俺を罵倒し、そして何もかもを自由にする権利がある。たとえそれが、今は何の解決にもならない怒りをぶつけるだけのモノとしてでも。

俺は、そんな衝動のまま、そちりに向かって足を踏み出す。さうある。

「……待ちなさい」

しかし、いつの間にか近くにいたローザが、その場に出でてこうとする俺の「バー」の裾を掴み、静かにそう告げた。

「あなたが何を言おうとしているか想像した上で言います……以前にも言つたでしょ？　その行動は何の解決にもなりません。自己満足のために、せりに混乱を大きくするおつもりですか？」

そしてそう続けられた言葉が、俺に刺さる。

血口満足。

確かにそうだ、今ここに至つて俺は思つ。

誰にも言わずにこじつが、黙つてることのまつが辛いのだと。怒りの言葉を浴びるまつが、楽になれてしまふのだと。

しかし一方で思つ。

これは、最後まで隠し通し切れることなのかなと。

何も告げないまま、この先また誰かが命を落とした時も、俺は同じようにその死を悼み、哀しむ資格があるのでだろうかと。

俺一人が頑張ることで、全てがクリアできるのならそれもいいのかもしね。これ以上誰も死なせることのない力が、そんな保証ができる力が俺にあるのであれば。

しかし、今いるこの【Baby】という現実は、そこまで甘くはない。

どんなに何かを振り絞ったとしても、俺にはそんな力はない。

そんな俺に、ここから抜けだそうと努力する人間たちと肩を並べて生きる権利が…………この世界で生きている自由があるのだろうかと。

そして、俺はその裾を掴む手を静かに振り払い、告げる。

「彼女には……いや、ここにいる全ての人間には俺を責める権利がある。そして、俺はその上でそれを受け止める責任がある。…………俺には元々、一緒に笑ったり、一緒に哀しんだりする権利は、無かつたんだ。それを今になつて、思い出したよ」

それから俺はゆっくりと、肩を震わせるその女性に近づく。

その様子を、フェイルが、リュウやネイルが怪訝な顔で、トゥレーネやainaが心配そうな顔で、そして、ローザが諦めたような表情で見ていた。

「…………すまない」

俺の言葉に、不思議そうにその女性が顔を上げる。
かつて恋人といふのを見かけた時には、柔らかく微笑んでいたそ

の表情が、目が、今は昏い。その目には、何も映つてはいない。

そして、そんな彼女に俺は告げる。

現状の恨みの矛先を向ける言葉を、自分が何者かということを。それがただの自己満足であることを理解しながらも、告げずにはいられない。

「俺は　俺は、あんた達の言つ責任者。この【Baby】の開発に関わったうちの、一人だ……なのにあんたの、あんたの大好きな人を助けることが、俺にはできない…………すまない。あんたには、皆には、俺を責める権利がある」

そして、しばしの静寂が訪れた。

「…………冗談を、言つてゐるわけ?」

静寂の終わりは、その女性 確か、レインといった の冷え
冷えとした、凍てつくような言葉だった。

肩に届かない程度の長さのブロンドの髪。少し細い目と、頬に浮
いたそばかす。彼女が、いつも彼の隣で笑っていたことを、俺は、
知つてゐる。

今、ここにそいつ言って俺を見上げてくるレインの眼の光は、昏い。^{くい}

「…………」

口を結んだまま、俺はそのままを見つめ続ける。
言葉が、何も出でこない。

何を伝えたいのか、何を言われたいのかも、正直わかつてはいな
い。

でも、今ここで目をそらす訳にはいかない。その事だけは、理解
していた。

「…………ほん、とうに、そうなの? あなたが、管理者」

レインの声が、静まり返った広間の中に、響く。そのままに、少し
ずつ光が戻り始める。例えそれが、憎悪と呼ばれる昏い輝きであつ
たとしても。

それに俺は小さく頷く。そして、頭を深々と下げ告げた。

「そうだ……俺は、この世界に関わったうちの一人。そして、あ
んたから大事な人間を奪つたモノを描いた人間のうちの、一人だ」

そして、その言葉にレインが震え始める。

「…………あなたは…………あなたが…………！今まで…………私達がどんな…………気持ちで…………つ！何でよ…………何であなたが生きていて、あの人は、ジユードはここにいないのよ…………」

そう言い、俺を貫くのは視線。

かつて見た、柔らかな色をたたえた表情でも、先ほどまでの鋭い焦点の合わない目線でもなく…………深い憎しみをたたえた、激昂。

人は、こんなにも何かに対しても怒ることが出来るのだと、感情を表せるのだと初めて知る。

その表情と言葉に対しても、俺は告げる。

「そうだ、俺には、生きている資格なんて無いのかも知れない。彼をよみがえらせることも、できない…………今から俺は、街の中でも攻撃判定が出るよつこ、『デュエルモード』になる…………もしもそれがあんたの気が済むのであれば…………俺を、好きにしてくれ」

どこかで、息を呑む気配が聞こえる。

これは、普段は非戦闘域である街の中での試合などを目的のもの。その設定を、死亡まで出来るための、レベルに合わせる。その後俺の頭上にHPのゲージが表示されたのを見て、すっとレインの目が細められた。

「…………ツー！」

そして俺は、すぐ後に襲つてきた衝撃に、背後へと弾き飛ばされる。

衝撃を受けた頬の熱が全身へと回ったように熱く、それでいて、

寒い。

無言でレインは剣を抜き、倒れた後、何とか立ち上がった俺へと近づいてくる。

きっと、頭の良い奴ならきっとうまく立ちまわるんだろうと思つ。主人公然とした人間なら、何かうまい言葉を思いつくのだろう。それとも、元々誰一人として死なせずに助けられるのだろうか？

でも俺には、ただされるがままになつて、ひたすら謝罪するくらいしかできない。

それを自己満足だと理解してなお、俺は殴られることぐらいしかできない。死ねといわれれば、そうすることでしか、償える方法を知らない。

せめて、全身に受けたその重圧から逃げ出さずに済むように、膝が笑うのを、心臓が飛び跳ねるように脈打つのを懸命に抑えながら、俺は立ち上がる。

それは、更に、レインの腕が振りかぶられた時だった。

俺の前に、小さな二つの影が入り込む。

「……」

田に映るのは、俺に殴りかかるとするレインの前に立ちはだかり、黙つたままつむくアイナ。

俺をその小さな体で守るかのような行動を取る、クロ。

思わぬ邪魔に、一瞬立ち止まつたレインは、少しの間の後、更に激昂する。

「何よ、あなたはこんな男をかばうわけ？　レインは……レインはこれを作ったのよ？　責任者なのよ？　それを隠してのうのうと暮らしてて……！　きっと、情報ももつとたくさん持つてて、自分が生きるためにそれを使って、私達のことなんか内心で笑つているのよ！？　そんな、そんな奴のせいだジューードは！？」

そしてそう叫び、レインは俺を指さした。

俺は、その言葉を受け入れる。弁明の言葉も、持たない。

それでも頑なにその場所を動かないアイナを責めるよう、レンは続ける。

「もしかして、あんた達もそいつの事知つてたわけ！？　自分たちだけで、情報を独占して、私達には危険な場所に向かわせていたわけ！？」

まずい、このままでは関係のないアイナ達までにまで彼女やこの世界の憎悪が向かってしまう。

俺が、その事に思い至り、否定しようとした時

。

「……違います」

アイナが、それに首を振り、そしてたゞたゞしくも、一言一言をはつきりと呟いた。

「……私も、知らなかつた。初めて……聞きました。だけど、トルさんは、いつも悩んでたと、思います。……本当は、本当はすごく恐いのに頑張つて戦つて……それでも、私が暗い顔したりして

ると、時々冗談を言つて、笑ってくれた。

やつと、私達と、

同じ」

それは、聞いている俺が、泣きたくなるような言葉。
普段はあまり喋らずにトゥーレーネと一緒にしている彼女
が懸命に告げた、俺のための言葉。

「 ッ

その必死な言葉に、言葉を選びながらもはつきりとした意志を持った言葉に、レインは押し黙る。拳を、痛いほどに握りしめたまま。それを見て、俺は目を瞑り、思つ。

(駄目なんだよ、その拳は、俺に振り下ろされるべきなんだ……
そんな風に庇われる資格なんて、俺にはないんだよ)

そう、俺にはその暖かさを受け入れる資格なんか、きっと無い。
何故なら、俺が逆の立場なら、必ず思つ 　 こう感じる。

ふぞけるなど。

どうして、自分の大事な人がいなくなつたのに、管理する側の人間であるはずの俺が、ここにいるのだと。

そうして、俺がアイナの肩を掴んで下がらせようとした時 気づかない間に、俺の隣に立つたトゥーレーネが、リュウが、告げた。

「…………トールくんは…………大事な情報を隠してまで他人を笑うよ
うな、そんな人じゃありません……アイナちゃんの、言う通りです」
「すまない。あんたが辛いのを、その辛さを、俺はわかつてやれ
ねえ。…………でもな、こいつは隠し事が出来るほど、頭が良くてねえ

……それに、開発者だと管理者だと、俺には詳しいことはわからねえが、こいつは出来ることを敢えてやらずに……楽しむような人間じやねえんだって事は、知ってる」

(……アイナ、トウラー、リュウさんまで)

俺はただ、何も言えず頭を下げたまま、心の中でこんな俺に対してかばってくれている三人に感謝を告げる。

「…………三人とも、いいから、俺には、そんな権利は」「

「解け」

俺が、三人にやめてくれるようひより告げようとした時、リュウが俺にそう言った。

「…………え?」

「いいから、つべじ『言わずに』『デユエルモード』を解け……早くしろ!」

間の抜けた声を出す俺にて、有無を言わさぬ口調でそう告げるリュウ。

そして、俺は一旦ウインドウを操作し、頭上のH.R.G.ゲージを消す。

「…………ツー?」

次の瞬間、俺は強い衝撃を受けて、壁までふつ飛ばされ叩きつけられた。

「か…………はつ……」

息が、止まる。

先ほどままであれば、下手をすればレッドゾーンを超えていた

であろう、重い衝撃。

「……」これは、別にお前がこのゲームに関わったからとか、そういう理由じゃねえ……解ってんな？」

俺を殴り飛ばしたリュウが、その大きな拳をぶらつかせて、静かにそう言った。

そして、振り向いて、少し呆然とした様子のレインに告げる。

「……なあ、あんたも、この状態でなら好きにしたい。でも、殺そうとだけはしちゃいけねえ……それをしたら、あんたはもうどこへも行けなくなる。そんな事をあいつが、ジユードが望んでいるとは思わねえ 酒は弱かつたが、気のいいやつだった」

黙つたままのレインを見て、更にリュウが言葉を続ける。

「だから、哀しみを憎しみに変えようとすると……それをそんなわかりやすい形で吐き出さうとするな……人を殺すことで何かを晴らさうと、してくれるな……そしてトール、お前も、こんな風に楽になろうとしてんじゃねえ！」

最後は、俺への言葉……先ほどどの衝撃なんかよりもよほど重く突き刺さる、素のままの言葉。

それを壁に叩きつけられたまま、項垂れて聞く俺に、何も言わず
に拳を握り締めているレインに、重ねるように発せられた声があつた。

「……なあ、俺も、まだ混乱はしてるし哀しいけどよ、リュウの田那や、その小さな子の言つ通りだと思つ。レイン、お前だってあの時あそこにいたんだ。こいつは、盗賊のくせして身を張つて俺を助けてくれたし、その黒い猫も必死で助けていた。少なくと

も、あれは演技なんかじゃねえよ。……その後のボス戦だつて、そいつは震えながらもモンスターに向かつて行つてていたじゃねえか……あいつも、ジユードもこんなのはきっと望んではいな」

それは、俺が一度助けた格闘家の男の言葉。

初めての犠牲者となつたジユードの最後の瞬間を……レインと共に見届けたという男の、言葉。

その言葉を聞いてか聞かずか、無言のまま、レインが近づいてくる。

トウレーネとアイナが体をこわばらせるが、それを太い腕でリックウが押しとどめていた。

そして、レインは田の前に立つと、俺を見下ろして言った。

「……あんた、なんで今頃そんな事言つたの？」「ここまで来たなら、最後まで隠し通せばよかつたじゃなし……私に、同情でもしたわけ？　それとも、人が死んで責任感にでも田覚めた？……ねえ、何でよ？」

「…………きつと、怖かつたからだと想つ」

俺はそう答へ、続ける。

「あんたに、恨まれたかつたのかもしれない。バレるのを怖がる一方で、どこかで、自分を責めて欲しかつたのかもしれない」

それを聞き、レインは何かを思つたように空を見つめ、そして俺の田を見て、言った。

「…………そう、なら私は責めてはあげない。責めることでも、殺すことでも許したりなんかしない。……あんたは生きなさい。前

線で戦い続けて……それでも生き続けなさい。万が一、また死亡者が出たら、死ぬほど苦しみなさい。その間も、自分で死ぬことも、逃げることも私は許さない」

そしてレインは、扉の外へと出ていった。

仲間に、少しだけ一人にさせてくれと、そう告げて。

それが契機になつたように、この場にいた何人かが、こちらを見て、それでも何も言わずに次々と去つていく。

（何で、どうして何も言わないで）

俺がまだしげびれている体と頭で立ち上がり、そう考えていると、目の前にトゥーレーネが立つ。

その後ろには、フェイルやローザ達、俺がこれまでパーティを組んでいた人間たちが、ここに残つた。

皆にも、迷惑をかけた……ローザは止めてくれたのに、他の皆さんつていなかつたのに。

これ以上の迷惑をかける訳には、きつといかない。

「すまない、俺は

」

パチン。

そんな事を考え、言葉を発そととした俺の頬から、乾いた音がなる。

そして、その音を鳴らしたトゥーレーネが、俺に静かな口調で告げる。

「あつと、馬鹿な事考てるのもわかります、トールくんはわかりやすいから。……あつき、権利はないって言いましたね？でも、それを言つならトールくんには、もう独りになる権利なんてないんですよ？……死んじゃう権利も、ありません。…………一緒に笑つて、一緒に哀しんで、一緒にしんどい思いをして進まないと、私が許しません。独りになるのは辛いけれど、独りでいるのは、逃げです」

その言葉が、俺の心に染みこんでいく。

「……君が、腹芸ができないのは、僕でも知っているよ。馬鹿なものも、再確認した。望みどおり最前線で苦しめるように、死ないようになり、この僕が助けになつてあげよつ。僕は、弱者の味方だからね」

そのままさらさらの金髪を左耳がかつたように搔き上げたネイルが、いつもと変わらない口調でそう言つた。
いつもは勘に触るようなその仕草も、今は気にならない。

そして、覗き込むようなアイナと、見下ろすようなリュウ、それに終始諦めた表情を浮かべていたローザの隣に立つたフェイルが、告げた。

「トール、君はもう前に進むしかない……。私はこれが誰かのせいだとは思わないが、君自身でそう感じているのであれば、もう何も言ひはしない……だが、一人で無茶をして死ぬことは、誰であろうと許さない」

俺は、馬鹿だ。

いつも言っていたが、それ以上に馬鹿だ。

俺は理解する。

そして、この一ヶ月でできた仲間に、感謝する。

「…………すまない」

その言葉に、再度殴られた

それは先ほどよりも弱いが、痛い。

「そうこう時は、謝るんじゃねえだろ？」「リュウが、ニヤリと笑つて俺にそいつ叫びる。

「ああ…………ありがと？」

俺は、何もわかつていなかつた。

今も、きっとわかつていなんだろ？

でも、簡単に死ぬ訳にはいかない。足搔かなければいけない。
眼の前の人間を、仲間を……そしてこの世界にいる人々が現実に
帰れるその日までは。

もしも裁かれることがあるのだとしたら、それはその後の話。

裏方も主役もない。　　もし俺がこの罪悪感と折り合つのなら、それが本当の責任の取り方だと、そう思った。

そんな俺を、皆は見つめている。

そして、その気持ちを出来るだけ届かせられるよう、もう一度
俺は告げた。

「ありがとう」

）　）
Babylon 開始

45日目

神殿の石碑『14999』

筆が重い……これ書くだけで、チョコレートを一箱消費しました
作者です。毎日書くためには時間の他に、糖分と珈琲が必要ですよ
ね……。（煙草も）ボソッ

では、お読み頂けました事に感謝を。後、改行などでアドバイス
いただけた皆様にも感謝の意をここにて。

明日は、もしかすると更新できないかも知れませんが、今後共、
よろしくお願い致します。

四話（前書き）

今日は仕事が遅くなりそうだったので投稿できないかと思つてしまつたが、思いのほか早く帰れたのと、場面を昔書いたものがあったので、無事書けました。

（銀の騎士団本部 三階の一室）

「…………隨分と怒っているように見えるが」

「少し、苛立たしくは思っています」

フェイ尔は、先程から黙つたままのローザに、声をかけた。
トールの発言と、その後の騒ぎの翌日、二人は今後の方針を話す
ために、ギルドの三階 自然と幹部や近しい人間のみが立ち入る
よくなつた部屋にいた。

「昨日の、一件かな？」

「……ええ、むしろそれ以外に何があるといつのですか？ ……

……すみません、言葉が過ぎました」

「いいさ、気持ちはわかるからね」

その言葉に歯み付くように答えた後、バツの悪そうな顔でそう謝
罪したローザに、フェイ尔は笑つて言った。

（おそらく、ローザにこんな表情をさせるのは、彼だけなのかも
しれないな）

そんな事をフェイ尔は思つ。

最も、ローザがそんな表情を見せるのもまた、フェイ尔だけなの
かもしぬないということをフェイ尔は考へていなかつた。

「確かに、初めての犠牲者が出たのは……ショックですし、痛ま
しいことです。ですが、あの場でそれを正直に告白する必要も、あ

そこまで責任を感じる必要も、何一つ感じられません。　自己満足でしか無い」

「……一体、どんな気持ちなんだろうね？」

昨日は口数が少なかつたローザが、こうして一夜明けて思いの丈を漏らすことに苦笑しつつ、フェイルはそう呟いた。

そして、フェイルは思つ。トールの行動もわからなくもないと。

「どんな、とは？」

ローザがその呟きに反応し、フェイルに問いかける。

「私は、自分が何かを創り上げたことはないからね……自分が考えたことが、関わったものが人の命を奪い……この先も奪う事になるかもしれないと考えるのは、どれほどまでにつらいことなのだろうかと、そう思つてね」

フェイルは、それを想像できずに、ローザに答える。

『道具を作る人間には罪はない、使い手の問題だ』

現状とは違うが、フェイルは何かで読んだようなそんな言葉を思い出す。

生み出したものが、人の命を奪った場合、そこに、責任は発生するのだろうか……いや、責任の有無にかかわらず、やはりその人は責任を感じてしまうのだろうか。

「……しかし、この状況をつくりだしたのは、そもそも『アル』というA・Iの暴走のようなものでしょう？　それを管理すべき立場の人物であればともかく、管理者の権限を持つとはいえ、今は一プレイヤー……それに元々そこまで影響を持っていないように見受けられる彼が、あれ程の責任を感じるいわれもないように思います

「ねうらへ、理論的に見れば、そうだね。私もそう思つよ、彼に責任など無いとね……でも、彼にとつては他人と言つより自分がそう感じてしまうのだと思つよ、きっと、件の『アル』とも面識があつたのだろうしね。……昨日の一件の後で謝罪して、語つた彼の言葉は、過ちを犯した友人に対するそれだつたように感じたからね」

「…………」

ローザが、その言葉を聞いて押し黙る。

しかし、そつは言つもの実際にローザの言つ通りであると、フェイルは思う。

だからこそ、昨日あの場にいた、攻略組として共にやつてきた者は、皆何も言わないで去つたのだ。

これで、トルが生産職として前線にいなかつたものであれば、それこそ感情的に非難の的となつたかもしれないが、事実トルは、よくやつている。

そして、一月も同じ場所で戦えば、どのような人間かくらいは解るものだ。

トルを責めていたレインに関しても、恋人を亡くした直後だからこそ、あれだけの激昂になつたのだといえる。だからこそフェイルには、何故あの場で、というローザの気持ちも、言わざにいられなかつたトルの気持ちも、わからなくなはないのだが。

(何が正しい、等とこつ事ではないのだろうな)

そう思い、フェイルは窓の外を見上げる。

飛行機の、飛ぶことの無い空。

現実ではなく……しかし現実と化したこの世界。

一ヶ月半で、第三層まで登った。

これは、果たして早いのか、遅いのか。

(おそらく、先に進むほど困難な道になるのだろう、現実に戻れた所で、その時居場所はあるのか……)

「……フェイル？」

ふと遠くを見つめ黙り込んだフェイルに、ローザが問いかける。

「いや、すまない…………そういえば、元々の要件は今後のことだつたな、皆の士気はやはり下がるだろうが、これまで以上に余裕を持って準備をして進んでいくしか、ないだろうな」

「…………ええ、実際今まで、外部からの連絡はありません。彼の言うように、助けを待つのは無理でしょう」

感傷から我に返ったフェイルが、先ほどまでの弱気の感情を振り払うように唐突に元の要件を切り出すと、ローザは、少しだけ間をおいて、しかそれに対しては何も問わずに、話題を乗り換えた。

そして、二人は日常となつた攻略の為の作戦や、犯罪者プレイヤーの取り扱いなどを話し始める。

考えねばいけないことは、山ほどあった。

「嬢ちゃんが、こんな所で一人でいるのは珍しいな

先日の一件の後、プレイヤーの精神的にも、少し間を開けたほうが良いという意見から、『塔』の攻略ではなく休む日とされていた。考えてしまつものは余裕のある場所で振り払うかのように戦い、あらものは宿で眠り……悲しみながらも比較的落ち着いているものは、各自のやり方で心と体を休めている。

久々にゆつくりとぶらついていたリュウは、同じくボーツと考えをしていたネイルを連れて、腹ごしらえに向かったジンの店に一人座っているアイナを見かけると、そう呟いた。

「…………今日は、トゥレーネさんはトールさんを連れてどこかに行きました……だから

そう答えるアイナの前には、ジンが作つたのであろう、出来立てらしいアップルパイが乗つっている。

「気をきかせたわけだね。アイナは小さいのに大人だねえ」

「人のことを褒める前に、お前も見習え」

ネイルが肩をすくめてそう言つのに、リュウは端的に告げる。

「ああ、ひどいなあ……僕だって気を遣つてますよ」

「全く感じられない気遣いは無いのと同じだ」

憮然とした表情で言うネイルに、リュウは断言した。

「……証然としないなあ」

「いや、しろよ?」

何を言われてもめげないネイルに、リュウは疲れたように囁く。

「いやほら、今日は攻略が休みになつたってこいつの、トゥレー
ネを誘いには行かなかつたでしょ？」

「…………はあ？ 何でそういうなんだ？」

そう何気なく言ったネイルの言葉にて、一瞬思考を停止させた後、
リュウは間の抜けた声を出す。

「さすがに、死人が出たのはショックでしたからね……これ以上
様子を見るのも何だし。 それにしても、何でトゥレーネは
トールがいいんでしようねえ」

なおかつそんな事を呟くネイルの言葉の意味に思い辺り、リュウ
は信じられないものを見るよつて、頭痛がしてきたこめかみを押さ
え、尋ねた。

「ふと思つんだが、お前つて……ナルシストな上に、実はマゾな
のか？ 明らかに脈はねえことはわかるだろうに？」

そして、そんなやり取りをパイを食べながら黙つて聞いていたア
イナの言葉が続く。

「…………ネイルがトゥレーネさんと歩くのは、嫌です」
なにげにネイルのことだけは呼び捨てにしているアイナだ。

ちなみに、この世界ではほほ最年少にあたるだろうアイナがそ
う呼ぶのは珍しい。

元々、このキャンペーンにはそのログインの性質もあって18歳
未満には親の同意が必要とされていた。だからこそ皆大学生であつ

たり社会人であつたりが多いのだが、アイナはおそらくまだ中学生程度だろ？。

リュウはかつて、よく親が許可したな、と聞いたことがあつたが、無言で頷くだけでアイナは答えなかつた。なので、それ以上はリュウも聞かないでいる。

「……一人共ひどいなあ」

そんな風にネイルがはあ、とため息をつきながら呟いていたり、ジンが水を持つて奥から出てきた。

ジンも、時にはフイールドに出ていたりするリュウ達が帰ってくるときのために、夜は店を開いてくれるようになつていて。

熟練度も上がってきたようで、味は更に美味しいなり、物によつてはパラメータを上げるような料理まで出てくるよつになつた。キヤルと共に、影の功労者である。

「……今頃は二人でどこかにいつてるのか、いいなあ」

「……トールさん、考えすぎたから」

料理を頼んだ後ふと呟いたネイルの言葉を無視し、アイナは心配そうに告げる。

「そうだな、元々そんなに頭使う方でも、責任取る立場の様な奴でもねえだろ？」

リュウもまた、不器用で、それでも頑張るつとするトールを思つて、ため息をつきながら呟く。

普段はそもそもいくせに、根は真面目なやつほど思えこむと無い。しかも、それがネガティブで自分を責める方向に走る。

(まあ、我関せず、とにかくやつよつはここのかもしれんが)

「トウレーネにあれだけ心配されているんだから、大丈夫でしょう。何だかんだ言って、頑張るやつでしょうね……僕達もいるんですから」

もう言つて考え込んでいる一人に、ネイルがあつさつと告げる。ネイルもよくわからぬいやつだ、ココウはそんな事を思にながら、その言葉には頷く。

突拍子も無い事を言つたと思えば、時々正論を当たり前のように吐く。そして何だかんだ突っ込まれつても、誰とでも気軽に接しているため、静かにギルドでも好かれている彼だった。

「アイナ、それ美味しそうだね
「…………あげません」

そうかと思えば、この様子である。

「…………まあ、なるみつになるだらう。トウレーネからしても、守られて氣を遣われるだけよりは、健全かもな」

「クロちゃんが来てからは、もうみづなされたりしてません
それを見て呆れたような顔をしながら、氣を取り直したように言つたリコウに、アイナはそう告げる。

「そうか、クロもいたな……あれば本当に生きてゐみてえだからな」

「…………生きてます、寝るとき抱きしめると温かいです
「…………そうだな」

リュウはそう言って、アイナの頭を撫でる。
ちなみに、ネイルはアイナに断られテーブルに突っ伏している。

「うまくやつてるといいが」

どこかへ出かけたという二人を思い、リュウはそう呟いた。

初めての犠牲者が出で、混乱はあつたものの、それでもこの世界
自体には変わりはない。
ここからは見えない塔の頂点に登るまでの日まで、変わることはず
無い。

四話（後書き）

次話はトールとトゥーレーネのお話。

その後はストーリーを前に進める予定です。

……クロの一日、なんていう軽い閑話の骨組みがあるんですが、一、二章に比べて話の流れが少し重くなつた上、更に重くなる予定のこの状況でどこに投下すればいいんだ……。——

五話（前書き）

すみません。風邪引いたからなのか頭が働かず難産です……プロ
ットは数行なのに實際書くと長くなりそうだったので、途中で区切
つて投稿します。

明日にはまたと続きをすぐ書いてみるつもり頑張って早く仕事終わら
せます。。。

(………… ああ)

リリまでじこか気まずく、そして穏やかな安らぎに包まれて朝を迎えるのは、一体いつ以来だろ？

俺は、田を覚ましてすぐ隣の温もりに、そんな事を考へて身を起こした。

流れのよつた栗色の髪が、朝日が差し込む部屋の中で光に照りされて見えていた。

俺はそっと手を伸ばし、その髪を梳いた。

指先を途中まで抜け、毛先で少し絡まり解けるよつた感触が、夢では無いことを思い起しこせた。

「トール……くん？」
「悪い、起こしちまつたか」

俺が少しの間それしていると、シーツから顔を出しトゥレーネが顔をのぞかせる。

その行動に少しシーツがずれ、透き通るよつた白い肌と、そして肩口から、それに似合わないモノも少し姿を表した。

氣恥ずかしさを紛らわしながらも、それから田を反らすことなし。だが、やはり顔が赤くなるのを感じてやはり田が泳ぐ。

「……もう、氣を遣わなくて大丈夫ですよ、むしろ、そんな風にまじまじと見られたほうが恥ずかしいです」

そんな俺に本当に恥ずかしそうに笑顔を作るトゥレーネ。

「……すまん」

「いいえ、着替えたなら下りるんで、先に下に行つて一服でもして下さい」

少し頭をかきながら言った俺に、微笑むトゥーレーネはそう告げた。

俺はそれに頷き、照れくさこよつな、何か気まずいような、そんな気分を味わいながら、宿の部屋を出て食堂の前で時間を潰しつつ、昨日の事を思い返す。

俺が色々と殴られ、そして馬鹿を加減を指摘されたあの日の翌日、トゥーレーネは珍しく一人で俺を迎えてきた。少々強引に。

その一日は、一通のメッセージから始まった。

『今日は、昨日ローザさんが言っていたみたいに、休息の期間にするそうです』

『少し、話したいので、下で待っていますね…………あまり悩んで寝続けるような、機嫌が悪くなっちゃうかもしねません』

本当に自己嫌悪に陥りつつ寝つけなかつたため、眠りについた後気がついたら昼まで寝ていた俺が、起き抜けにトゥーレーネからのそんなメッセージを見てすぐに下の食堂に駆け下りたのは言つまでもない。

そして昼過ぎ、俺たちは、無口なマスターのいる喫茶店に向かい合っていた。

「…………あの、トゥーレーネ、さん？」
俺は、微妙な沈黙に耐えられなくなり、そう呼びかける。
ここに来てから、少し考えこむようにトゥーレーネは黙つたままだ
った。

「何です？」

「…………いや、昨日の今日で、俺がこんなこもつくりしていくいい
のかと」「寝てこるよつましです」

そう言い切られ、うつ、と黙りこむ俺。

そんな俺を見ながら、トゥーレーネが少し真面目な顔をして言つ。

「それに、誰もトールくんをあれ以上責めたりはしていません。
少し様子を見てきましたけど、レインさんは、ティールさんがつ
いていますし……それ以上何かできるわけではないです」

「…………」

ティールといつのは、昨日俺をかばってくれた、格闘家の男だ。
一夜明けても、あの時いた他の人々も特に言いふらして煽る様子
もなく、俺が何か言わることはなかった。

「むしろ、トールくんを一番責めているのは、トールくんです……」

…………昨日リュウさんが殴ったのが何でか、本当にわかつてますか？」

堰を切つたよひこ、トゥーレークが次々と言葉を放つてくる。

「……わかつてゐる、つもりだ、でも　」

「きっと、今まで、色々見られてるからですよ」

何でここまで皆俺に何も言わない、という心の中を読んだよひこ、

トゥーレークが言葉をかぶせてきた。そして続ける。

「……トールくんがこれまで頑張ってダンジョンやフィールドを探索して情報を公開したり、私やアイナちゃんの買い物に付き合つてげんなりしていたり、いつもローザさんやリュウさんにいじられてあたふたしたり、キヤルさんに色々頼まれて苦労していたり」

「……」

最初のもの以外は、全く褒められていない気がするが、分かつた氣もした。

(……まあ、そこまで黒幕になれるほど大物でないと知られていたからってことか)

そのまま言葉を受けると、そういう事になる。

それに、初めてローザに開発者であることを看破され、前線に出で以来、攻略から素材集めから、結構色々な人間と顔見知りにはなつていた。そういう意味では、ローザには頭があがらない。　目前の前のトゥーレークにも。

「……わかりましたか？　わかつたら、フィールドに行きましょ

うー」

「へ？　何でそなる」

俺は、話の転換について行くことが出来ず、間の抜けた声を出し

た。

「私の尊敬する人が、迷ったときは体を動かせばいいって、そう言つてました。お祈りをして、健全な生活をしていれば、いいって。それでストレスを発散させたら、戻ってきて」飯を食べましょう。クロちゃんのお散歩です」

俺がぽかんとしていると、トゥーレーネはそう言つた。

(……いや、猫に散歩はいらないだろう)

咄嗟にそんな事が頭に浮かんできたが、クロも顔を出して鳴く。ありがたく気を遣われることにしようか、全く、嬉しい一人と一匹だ。

そうして、二人と一匹で近辺の程よい雑魚モンスターを倒して回つた後は、不謹慎ながらも爽快感があつたことを、記しておく。

「本当に、美味しいですね、このお味噌汁」

「…………グルウ」

夜、結構なストレス発散の後、俺たちは俺の宿の食堂で、一種類ながら最高に旨い和食、『焼き鮭定食』を食べていた。

何故かクロも美味しいそうに鮭を食べている。一体どういう作りなんだ？まあ、満足気だからいいけれど。

「……ところで、何でローザさんだけ知つてたんですか？」
食べ終わり、少しうつくりしていると、トウレーネが俺にそんな事を告げてきた。

「なんか語尾がおかしい、……あの、トウレーネ？　その右手にあるの、ここの中たら強いお酒では？」

白雪の酒・・・100ナール　攻撃力アップ効果　稀にステータス異常・混乱付加

（必要ない……必要ないぞ、攻撃力アップも混乱も……）

慌ててメニューを確認した俺がそんな事を思つていると、トウレーネはどこか据わった目で続けてくる。

「私には教えてくれてなかつたのに」

「…………絡み酒？」

そう呟いた俺に、更に聞いてくるトウレーネ。

「……私には、教えて、くれてなかつたのに」

「しかも同じ事繰り返す人！？」

俺が早くも酔い始めた様子のトウレーネに、かつての職場での、酔うと豹変する幾人かを思い出し冷や汗をかいていると、じーっと見つめてくる目線。

（確かに、勢いで話したことと、その後の皆への説明だけで、しっかりと言つてはなかつたな）

どこか不満だったのだろう。酔いの勢いもあるのだろうが、真面目な顔をして問い合わせるトウレーネに心の中で頷くと、俺は話し始めた。これまでの自分のことを、考えていたことを
一々には見破られただけだという言い訳も含めて。

「……『アル』さんは、どういう方なんですか？」

話し終わつた後、俺に静かにそう問い合わせてくるトゥーレーネ。

「どういう方、とは？」

「A・Eの知り合いなんて、もちろん私にはいませんでしたけど……何だかトールくんの話す感じは、友達が悪いことをして、それを謝つているみたいでした」

その言葉の疑問に返ってきた言葉に、俺は、ああ、と思う。それで話す、かつての『アル』との関係を。

「『アル』は、俺たちのプロジェクトに、坂上さんが連れてきたんだ。経緯は知らないけれど、メンバーの一員としてつてね。最初は戸惑つたけれど、人みたいに会話が成立する上、難しいことは知つていてるのに、普通のことは知識がない『アル』は、時間が経つごとに俺達にも受け入れられて、俺も、勝てなかつたけどゲームしたりさ、よく話してたんだ……そつか、そうだな、本当に友人だつたのかもしれないな……だからこそ、俺は、止められたんじゃないからって、思つたりもするんだろうな」

そんな風に話しながら、少し自分の罪悪感を理解し始めた俺を見て、トゥーレーネが少し微笑む。

「クリアするんですね？　そして、『アル』さんにお話するんでしよう？　……きっと大丈夫です、トールくんなら出来ます」

驚くほど透明で透き通つた声で、そう言つ。信じきつたような声で、そう告げる。

俺を静かに見つめる、大きな目。

最初に見た時と同じ柔らかい雰囲気、でも意思の強い……と言つ

よつきっと、純粋に何かを信じているような田。

「……どうして、俺なんかをここまで信じるんだよ」

「そんなの、助けてくれたからに決まっているじゃないですか」
俺の疑問に、トウラー・ネは即座にそう答えてくる。

「だからって、何でそこまで……」

「……今の家族以外に、あんな風に一生懸命助けられるなんて、初めてだつたんです。私は、いらない子だつたから」

それでも、と続けた俺の問いに、トウラー・ネは、ここでも微笑みをたたえた顔をして、そんな事を呟いた。

「…………え？」

その言葉に意外な響きを覚えた俺は、そんな声を出していた。
この、美人で優しくて、どこか天然だけれど皆に好かれているトウラー・ネが？

「……そういえば、今日はトールくんのことばかり質問していくましだね。私のことも、少し話してもいい、ですか？ 聞いて、くれますか？」

そうして、不安気に尋ねてくるトウラー・ネに、俺は頷く。

ただ、その時、宿の食堂の時間が来た。

この辺は、流石に人間のようなNPCとはいえ、客の雰囲気で閉店を延ばしてくれたりはしない。

「もう、そんな時間ですね」

「…………あのさ、良かつたら、部屋で話すか？」

俺がこんなことを自然と言えたのは、トウラー・ネの雰囲気があま

りに弱々しくなつていたためだろう。

それに意外そうな、驚いたような顔をしたトゥーレーはそれでも、コクリ、と頷いた。

六話（前書き）

またも……難産。今まで一番かもしけない。
プロジェクトの時はいいんですね、頭の中にしか無いから……
よろしくお願ひ致します。

「私は、ここに来る前は、教会に住んでいたんです。部屋を物珍しそうに見ていたトゥーレーネに、俺がおずおずとお茶（宿に付いているのだ）を差し出すと、トゥーレーネはそれを手に取り椅子に腰を落ち着けて、そうポソリと呟いた。

「教会？」

俺はその単語に反応して、どうこう意味かはわからずには繰り返す。

「……わかりやすい言葉で言つと、孤児なんです、私

「…………それでわざわざ、いらっしゃい子なんて？」

その言葉に、先程トゥーレーネが漏らしたこと思い浮かべ、俺がつぶやくと、トゥーレーネは首を振った。

「いえ、そこは、教会についてからは……幸せでした。皆姉弟みたいで、お義父さん……神父さんも優しくて。ここに来たのも、施設の義姉にあたる人が案内を持ってきてくれて、私が歌が好きだから……応募してみたら？ って言つてくれたからなんです……それで話を聞いてたら気になることがあって、興味を持つて、応募したんです」

そう、昔を思い出すように話し始めたトゥーレーネの言葉を、俺は聞いていた。

少なくとも、俺の知っている、この一ヶ月間共に行動してきたトゥーレーネは、優しくて穏やかな女性だ。とても、暗い過去があるようには見えなかつた。

俺が、鈍いというのもあるのかもしねないが。

「……11歳の時に……本当の両親と妹と、旅行に行つたんです。

とても、楽しかった」

「…………うん」

そして、トウラーが少し間をおいて更に話を続けるのに、その雰囲気が弱々しくなったのを感じながらも、俺はただ頷いた。

「そこから、父親が運転する車での帰り、交通事故に遭いました……それで、私だけが、奇跡的に助かって……」

そこで、言葉を切つて俺を見つめるトウラーが、今まで見た中で初めて、不安そうに揺れる瞳を見せる。そして言葉が続く。

「その後、しばらく入院した後、家族を亡くした私は、一番場所が近かつた親戚の家に預けられる事になりました。……その生活は、うまくいきませんでした」

トウラーは、『クリ、とお茶を飲み、それを置いて更に続けた。

「…………別に、いじめられたとかじゃないんです、ちゃんと食事ももらえたし、よくある映画とかみたいに、暴力を振るわれたりもしませんでした。……でも、私は、その家族の会話の中にはいつかった。夕食の時とかに、皆どこか気まずそうに私を見るんです。

『どうして、ここにいるの?』 そう言われている気がして……私がいるふと会話がやんだり、話しかけてくれても無理している事がわかつて……そして、幼いながらにもそれは仕方がないのもわかつてたんです、それでも、どうしても寂しかった……一緒に暮らしている他人、が私でした。親戚という人たちに初めて会つた時だつて、『色々、かわいそう』とか、『どこが引き取るのよ?』とかそんな言葉ばかり聞こえて

「

「……トウ レーネ？」

急に、何かせき止めていたものが壊れたかのようにな話すトウ レーネに、俺は疑問の声を上げた。それでもトウ レーネは話し続ける。

「……当たり前ですよね。遺産も何もなかつたし、両親とも親戚づきあいがうまかったわけじゃなかつたみたいで、初めて会うような人もたくさんいた……そんなお金ばかりかかる子供をずっと引き取つてくれるような人はいませんでした……少しづつ、担当みたいに親戚の家を回ることになつて、でも、どこでも……それで、最終的には孤児を受け入れてくれる区の教会に行く事になりました」

「トウ レーネ、もういいから」

俺は、そう言つてしまつていた。言わずにいられなかつた……トウ レーネは、先程から淡々とした口調で話し続いているのだ。

（自分自身の話なのに何故、こんなに実感の薄い感情でしゃべることができるんだよ）

「そう内心で思い、俺は止める。……目の前の女性が、どこか壊れてしまいそうで。」

「……じめんなさい、大丈夫ですよ？　でも、本当にそこからは幸せだつたんです。皆、私なんかよりもっとひどい境遇の子もいたのに、それでも皆優しくて、家族でした。暖かかつた」

確かにそうなのだろう、謝つて、その教会のこと語るときのトウ レーネの言葉には、色があつた。

それでも、幼い頃にたらい回しにされ……家族を失つたのに、その哀しみごと、いないような扱いをされ……何がトウ レーネの中に残つてしまつたのか。

そして、俺の中の何かが告げる。それだけではない。

……トウレーネは、話しあがめたように見える今もまだ、どこか震えているのだから。

「でも、だから、教会の人たちや義姉弟以外で、あんなに一生懸命になつてもらつたの、初めてで……ここに始めてきた時も、こんなことになつちゃつた時も、不安でどうしようもなかつたんです

」

やう言つて、トウレーネは、真つ直ぐと、しかし揺れた目で俺を見つめる。

俺はその目を吸い込まれるように見て、次の言葉に固まつた。

「ねえ、私は、トールくんにとつて何ですか？
……ただ、成り行きで助けた、それだけの人間？ 頼りにならない、守らなきゃいけない女、ですか？」

おそらく、ずっと罪悪感を感じていた俺を気にしてくれていたのかもしない。

どこかで、隠し事をしているような俺……この一週間も、俺は色々と気を遣わっていたのに、笑つてじまかすことが多くて、その拳句の昨日の一件だ。

さつきお酒を飲んで絡んでいたのも、不安そうに見えたのも、それまで何も言わなかつた俺の甘えのせいだと、思つ。

「…………俺は」

固まつた後、それでも何とか俺は言葉を搾り出す。

最初はそうだった。助けたのも、その後も。

でも、トゥーレーネの近くは居心地が良くて、その視線や仕草が照れくさくて、嬉しくて……だから、自分のことを話すのが怖くて……

「義務とかじゃない……俺が一番大事に思える女性、だよ。……昨日の事も、信頼してないとかじゃなくて、怖くて、俺が臆病だつたから……それを聞いて皆が、トゥーレーネが離れてしまうかも、と思うのが怖くて、言えなかつた」

俺は、そう言つ。
目を見て、見続けると心臓が爆発でもするんじゃないかと思ひながら……告げた。

「トールくん　……こんな言い方をして、私は卑怯ですよね、でもやつぱり、嬉しいです……だから、私も話して、いいですか？私を縛っている、もの。きっとこれも、血口満足、つていうやつなんだと、思います……」

そう言つたトゥーレーネは、その言葉に頷く俺を見て嬉しそうに、でも少し哀しさをたたえた笑みを浮かべて、少しの沈黙の後、告げる。

「あの、初めて会つた時。私は、あの人達が怖かつたけど……どこかで別のこと恐れてたんですね……私の身体を見たら、どうせあの人達も、きっと驚くんじゃないか……って」

そして、トゥーレーネは着ている服を脱ぎ、胸元をずらす。
「……トゥーレーネ！？」

俺がその唐突な行動に驚いて、目をそらすと、トゥーレーネは「ち
ら」を向くように告げた。

その声が、震えていて、真摯な声で……俺は、恐る恐る田をそちらに向けた。

それはだけた服の間から、透き通るような白い肌が目に入る。そして、それに似つかわしくない、赤く盛り上がったものも。

それを見て、ハツと息を飲んだ俺を見て、トゥーレーネは悲しそうにそれをしました。

目に映つたのは、右の肩口から胸元にかけて続く、大きな、傷跡。「…………事故の時、私も大怪我をしたんです。成長して、まだこれでも小さくなつたんですけど……一生消えることは、ないそうです……」これを見るたび、私は、事故のことよりもしろ、その後の生活を思い出します」「…………」

肌に沿う、人の肌には不自然な色の大きな傷跡を、見たことがあるだろうか？

その時それを撫でながら哀しげに話す彼女に、俺は咄嗟に言葉が出なかつた。

「『J』この応募に当選したときに、一番嬉しかつたのが、この傷を消せるかもしないってことだつたんですよ……でも」

そうだ、この【Baby】にログインする時、大幅な改変はできなくとも、髪や瞳の色を変えられるように、少々の調整はできるはず。

俺は、黙つたまま、でも机の反らす事はせず、トゥーレーネの言葉を待つた。

「……あの時の声も、『アル』さんなんですね？　言われたんです……これを、傷跡を消せば、私が現実に戻ったときに、精神的な障害が起ころる可能性があるって。もつ、これは私の一部になってしまっているって……私、本当に消したかった！　消したかったのに、心が、それを受け入れないって、そう、言われて」

そして、トゥーレーネは息を吐いて、そして続ける。

「ああ、私は仮想現実の世界でも、これから逃げられないんだ……つて思いました。だから…………つー？」

「……ごめん、大丈夫だから」

俺が、自分にも他人にも臆病な俺が、震える彼女を抱きしめられたのは、きっと耐えられなかつたのもあるんだらつ……田の前の穏やかな彼女が、どこか遠くに行つてしまいそうな気がして。このまま言葉を続けさせていたら、自分で自分を苦しめていきそうな気がして。

そして俺は思つ。

きっと、これまでの俺も、こんな風に自分を追い詰めていくように見られていたのかと……俺なんかより、よつぱんどしんどい思いをしたかもしれないトゥーレーネにも気を遣わせて、リュウやアイナにも、庇われて。ローザも、止めてくれてまでいたのに。

「……トール、くん？」

「……ごめんな」

随分とそのまま、長い沈黙と共に俺に抱きしめられたままだつたトゥーレーネが、少し落ち着いた声で疑問の声を上げるのに、俺は言

つた。

「……後、今まで、昨日も、今日も、ありがとうございます」

「それは、全部今の事も含めて私のセリフだと想つんですけど……ありがとうございます」

「ありがとうございます、少し、すつきりしました」

俺の言葉に、トウレーネはそう言って、クスリ、と微笑んだ。

……いつもの、落ち着いた笑みだ。

それを見て、腕の中にある温もりに、俺は少し力を込めた。

トウレーネは、それに体をこわばらせるも、こちらから目を逸らしてはこない。そのまま、少し赤らんだ顔をしたトウレーネに、俺は顔を寄せる。

なんという感情なのだろう？ 欲望とかでもなく、ただ、そういうことを求めていた。

そして

「……すいません」

「……ごめんなさい」

俺は、朝、あの後降りてきたトウレーネとギルドに向かった後、何故かアイナとローザに謝つていた。

アイナは、帰つてこないトウレーネを心配していたらしい……ローザは全てを見透かしたように大丈夫でしょうと黙つていたようだが。

そして、フェイルやリュウが遠くから笑つて見ている。

……拷問でしょうか？

「まあ、良かったのでしょうか」

そして、お説教とアイナのジト目が終わり、トゥーレーネがアイナをなだめて離れるごとに、ローザがそんな事を呟いた。

「…………」

無言のままの俺を見て、ローザが笑つて呟つ。

「皮肉ではあつませんよ？ 本心です」

そして、続ける。貴方のようなタイプには、大事なものがあつた方がいいんですよ、と。

「あなたは、これまでどこか逃げようともしていましたからね、ソロに戻ろう等と、ね」

その指摘に、俺はぐっと詰まる。

正直、言葉もない。

「でもやつなるよりも、私はこの方がいいと思います。これから先、また死亡者が出ることもあるかもしません……それが、私達かも、貴方かもしない。でも、貴方はこれで、そうならないようにこれまで以上に努力することができるでしょう？」誰かを深く愛せば、強さが生まれる。誰かに深く愛されれば、勇気が生まれる『

私の、好きな言葉です。トゥーレーネを、よろしく頼みますよ？
あの娘は、いい子ですか？」

そんな事を囁つローザに向ける。しかし、頷いて、答えた。

「ああ……これからもよろしく頼むよ」

しかし、そんな俺達の穏やかな雰囲気は、長く続くことはなかつた。

その後に入ってきた、一本の連絡によつて。

ギルド・銀の騎士団本部から少し離れた場所にある建物。高い塀に囲まれたその敷地の周囲には、人影は少ない。

『牢獄』

その場所は、そう呼ばれていた。

誰が言い始めたのか、『生命の石碑』と呼ばれることになったカウントがある『神殿』と同じく、元々このバベルの街に存在する建物である。

言わずと知れた、運営もしくはプレイヤーに囚えられた犯罪者プレイヤーを隔離するための施設だ。

この場合、犯罪とされる行為はPK^{プレイヤー・キラスメント}と禁止行為がそれにあたる。

ただし、この二つは同じようで異なるものだ。

PKを行ったプレイヤーは、犯罪者プレイヤーとして扱われるものの、ゲームとしての禁止行為ではない。

あまりに固執した、例えば特定の初心者プレイヤーのみを狙うようなものはともかくとして、プレイヤーに対する攻撃や、パーティ一同士での戦闘がある以上、それ自体は褒められたものではないものの認められたものではあるのだ。

……最も、この現実と化した世界では、どちらの罪が重いかは、言うまでもないが。

ちなみに、禁止行為を働いたものは黄色のマーカー、殺人行為を働いたものは赤色のマーカーが頭上に表示されることになる。

本来、この場所に入れられたプレイヤーはログアウトするのが通常の行動であるはずだった。何故なら、外部から開かない限り、その場所からは出ることができないのだから。

ただ牢獄で暮らすためにログインするような酔狂な人間でもない限りは、そうするのが普通であろう。

そして、プレイヤーからの要望を受け、調査した運営側より削除されるということがなければ、確認の上、長くとも一ヶ月程で開放されるのが仕様であった。

しかし、現状、そのどちらも行われることはない。

……その結果として、三大ギルド管理のもと、現在、武器や防具等の装備を剥奪された37名の犯罪者プレイヤーがこの場所に囚わされることになっていた。

この状況でなお、この中に入れられることになったプレイヤーの数。この数字を、少ないと見るか、それとも多いと見るか。

その判断を下せるものは、この【Babyion】の中にはいない。

この男は、平凡な容姿をしていた。

黒く短い髪に黒い目。体格も中肉中背、というのがこの男の外見を表す言葉。

このゲームの中では珍しい程に普通の外見をした、それこそ人混みの中ではあっさりと埋没してしまうであろう彼は、その建物の前に立つと、何かを堪えるかのように、口元を歪めるように晒つた。

もしも、その笑みを見た者がいたならば、すぐに外見からの彼の評価を改めたであろう。……どこか、寒々しい雰囲気を持つ男だ。

そして、男はすぐにその表情を改めると、元の真面目な顔をして中に入つていく。そこでは、二人の男達がお茶を飲みながら話をしていた。装備や服装からすると、戦士系と鍊金術師の二人組のようだ。

ログアウトできない、ところとは、ここで生活する必要がある、ということである。

そしてこの世界でも、空腹は存在する。

その結果として、ここを管理することとなつたギルドのメンバーが、交替しながら一人一組で食事などの用意等を行なつてはいるのであつた。

そして、男もこの一週間程この担当になつており、彼等 戦士系の男がセイム、鍊金術師の男がエクシズといったかとももう何度も出会つたことのある顔見知りであつた。

セイムが、男に気づいて話しかけてくる。

「ああ、交代か。すまんな……ん？ 今日はあんた一人かい？」

「いえいえ、皆に公平な仕事ですからね。……ああ、もう一人はすぐになりますよ、何でも少し外せない用事があるとかで、私だけ先に来たんです」

そう、男はセイムの労いと疑問に答えて、にこやかにエクシズにも会釈をする。

「ああ、お疲れ……そう言えば一昨日は何か騒ぎがあつたようだ

が、なにか聞いているかい？」

「……いえ、ただ、初めての死者が出たということなので、その対処でしょ。痛ましい、ことです」

エクシズの問いにそう言ひて、男は暗鬱な表情を作る。それを見て、つられるように一人共暗い表情になった。

「…………どうしてこんなことになつたんでしょうね…………あ、これはもう大丈夫ですよ？連れももうすぐ来るはずですので、お二人は任せとお休みになつて下さい」

そう呟き、そしてふと気がついたように一人に笑いかける男。攻略も担つてているギルドの上層部で決定された、『必ず別のギルドからなる二名以上でないと交代できない』といった決まりも、何度も顔をあわせている現場の人間たちの中では自然と曖昧になる。そう言われた一人も、その例に漏れず、男の言葉を特に疑う様子もなく、礼を言つて去つていった。

そして、その様子を最後まで見送ると、男は先ほどと同じようにわらう。

「……馬鹿が」

男達と話していた雰囲気とは打つて変わりそう呟くと、男は『牢獄』のある場所を目指して歩き始めた。

「……一ヶ月、一ヶ月がかつた。馬鹿どもの選別は、もつできて

いるんだろうな？」

男の冷たい声が、その暗い部屋で響く。

「ああ、兄さん。『めんよ……もちろん何人かめぼしい人間にはもつ声をかけてあるよ。』のゲームを楽しむための、ね」

その声に答えたのは、笑みを浮かべた、この場所に初めて入れられることのなつた呪術師の男だった。

囚えられていたはずの彼、シェイドは、共にこの世界に閉じ込められた唯一の肉親にして、幼い頃から忠誠を誓っていた兄によつて、先ほど一足先に解放されていた。

彼にとって、幼い頃から常に共に行動していた兄は、様々なことを教えてくれた相手であり、その冷酷さに憧れる人間であった。

囚えられていたのと同じ場所にいるとはい、久々の自由に、兄が来てくれたことに、シェイドはその笑みを止められない。

何も知らないものが見れば、ただの無邪気な笑みを浮かぶ青年に見えたであろう。頭上に、黄色のマーカーがその存在感を表している意味が分からぬものであれば。

「ふむ、他の人間はテスト次第か…………さて、シェイド、まずはお前もだ」

「……テスト？」

そんな、唐突な男の言葉に、シェイドは怪訝そうな声を上げる。

その声に、男はニヤリとして告げた。それが、少しづつ大きな笑みへと変わっていく。

「この世界を、本当の意味で楽しむための、資格を得るためのな……ああ、ここは本当に素晴らしいよ……あんなくそつたれな現実とは違つて、ここでは能力が全てだ。クックッ」

そうしてひとしきり笑いを漏らした後、男は、今度は優しげな顔で、それでいて冷たい声で告げる。

「……なあ、俺が半端な人間が一番嫌いなのは、お前もよく知っているだろ？」

ショイドは、その最後の言葉に、身震いをして頷いた。

「では、まずは手始めにお前の選んだ人間と、つまらないと思う人間にしようか……つまらない上に、ここにいながらこれを拒否するような半端ものは、俺が直々に相手をしよう」

そんなショイドを満足気に見て、男は、そしてそのテストの内容を告げた……それは

そして、男は晒う。

「『』れは、ゲームだ……楽しまなければ、損だろ？？」

結果として、男に従わなかつたものは、5名に過ぎなかつた。

トウレーネの共に謝り、それでも和やかな雰囲気であつた俺達にもたらされた一つの報せ。

それを聞いて『神殿』に向かつた俺達を迎えたのは、現れてから二週間、変わることがなかつた石碑だった。

一昨日、初めてその数字が変化し、『14999』が表示されているはずの。

だがしかし、たどり着き、そして黙り込んだ俺たちの前に立ちはだかつたその石碑には、こう表示されていた。

『14978』

そして、俺が『牢獄』から人影が無くなつており、その時に配置についていた人間の姿も消えていた事を知るのは、その日、太陽が頂点を過ぎた頃だった。

（Baby1on開始 47日目 現プレイヤー数 1497
8人）

七話（後書き）

次回、少し説明入りつつ、物語を先に進めていく予定です。
ただ、もしかすると、今週以降は仕事により更新は毎日では無くななるかもしれません。

『嵐の前の静けさ』という言葉がある。俺は、その言葉の意味をひしひしと感じながら日々を過ごしていた。

俺が座っているのは、定食屋『満月亭』のカウンター。目の前には、コーヒーが置かれている。落ち着きたいときによく行く喫茶店ほどではないが、なかなかにうまいものだ。

店の中には俺とアイナ、それに奥にジンがいた……二人共必要なこと以外はそこまで話す方ではないので、自然と沈黙になりやすい。先ほどまで一緒にいたトゥーレーは頼んでいたものがあるとかでキヤルの店に行つており、アイナは少しだけ考えた後、ここにいることにしたようだった。

そして、俺がここにいるのは、フェイルがもう少しすれば来るはずだからである。

何でも、ギルドの話し合いの後で、俺にも少し確認があるらしい。それを聞き、呼ぶのではなくこの場所を指定したのは、おそらくフェイルもギルドの外で落ち着いて話をしたいのだろうと思つていた。

あれから、色々と大変だったのはフェイルが一番あるのは間違いないのだから。

石碑がその数を減らしたあの日、『牢獄』には担当の人間も含めて38名の人間がいた。表示されている数から推測されることは、逃亡し身を隠した犯罪者プレイヤーは、17名。そして死亡者は…

これで、計算があつてしまつ事になる。

つまり推測が間違いでなければ、17名の犯罪者プレイヤー、それも、おそらくは頭上に赤いマークを掲げたものが、この世界に解放された状態だ。

早くも一週間が過ぎた今でも、その足取りはつかめていなかつた。もちろんフェイルを含め、減つた石碑と誰もいない『牢獄』から最悪の予想にほぼ確信を持っていた俺たちが何もしなかつたわけではない。

捜索隊は組まれた。

しかし、もしこれが、運営がいなかつたとしても、一般解放された後のプレイヤー数であれば既に捕縛できていたのかもしれないが、現状はこの【Babylon】の広さに反してそのプレイヤー数は少ない。

何せ、まだそのほとんどが始まりの街『バベル』で暮らすことができているのだから。少しずつ世界が広がるにつれて、他の小さな街で行動しているものもいるようだが、常駐するものはまだ少ないだろう。

そして、現状それでも14000人以上のプレイヤーがいるとはいえ、実際に攻略に向けて前線で行動しているものはその一割に満たない程度である。攻略組の中でもギルドに所属していない人間も少なくはない。

後は、生産職であるもの、生産職ではないにしろ、日々生活できるためのものを初期のフィールドで稼ぐ、そこまでレベルの高くなプレイヤー達だ。

それに対しても、相手は同時に行動しているとは限らないが、17

単純に考えてもらえれば解ると思うが、こちらに犠牲を出さずに捕捉しようと思えば、一対一では足りないのだ。かと言つて攻略を疎かにすることもできなつた。

各連絡をとれる者たちで、すぐに駆けつけられる距離感を守りながら、広いフィールドや他の街を探索する、それがどれだけ難易度が高く確率も低いことか。

ファイルやローザも、ギルドの人間を含め、この中にいるプレイヤーへの説明、その搜索の指揮等で忙殺されている。

そして、万が一発見できたとしても問題がないわけではない

(俺は、実際に見つけた時、今の状態で相手を攻撃することが出来るのだろうか? といつも、本当にこの状態でPKを行つ人間がいるのか)

そんな事を考える。正直、モンスターを相手にするのも、自分の命がかかるのも、曲りなりには覚悟は決められていると思つ。

しかしながら、プレイヤーを相手取り、攻撃する……そして、下手をすれば殺すということ。

それが、実感がわかない。もちろん、理解してはいるのだ。ただ心が納得していないとも言つのか、うまく言葉に表すことができないのだが。

この世界ではPK^{プレイヤーキラー}と呼ぶもの、それは、今のこの状態では現実の『殺人』とされるものと同意義だ。

まだ、ゲームとしてのPKは理解できるのだ。それは、あくまでロールプレイングの範囲なのだから。それがあるからこそ面白いMOも存在するといふこともあるのだ。

しかし、現状の、プレイヤーの数が減る可能性はあるぞ、増えることのないこの世界では、それは帰る確率を減らす行動に他ならない。その上で、モンスターではなくプレイヤーのHPを最後まで削ることができるといふことが、俺には理解出来なかつた。

帰りたくないのだろうか、それとも自暴自棄になつていいのか……もう一つ思いつく選択肢は、考えたくない。
もちろん現実はいいことばかりではないだろう、むしろ逃げ出したいと思うことのほうが多い。

ただ、それがわかつていても、ここに居続けたいのかと言われれば、俺は即座に首をふることができる。

確かに、俺を含めたこの世界を作成する事に関わった人間は、出来る限り現実に近づけるように尽力した。だからこそ、『アル』は今のような状況を作ることが出来、そして俺たちも『生活』している。だがこの世界には、現実とはどうしても異なる一点が存在する。未来^{さき}が、ないのだ。この中では新しく生まれる命がなく、そして失われる命はあるのだから。

限りある、最初から指定されたリソースの中で、ただ減り行くのみ。

(いつそこの世界は、生まれないほうが良かつたんだろうか?)

実際に人が死に、そしてその中でも様々な人間がいる。

元々は、きっと普通に暮らしていた人間が、これから死に慣れ始めるのかもしない。

俺が、徒然とそんな思考の波に漂つていると、奥で何かを作っているジンを、同じようにカウンターに座つて見ていたアイナがこちらに目を向けた。どうやら無意識のうちに、ため息をついていたらしい。

「……何を考えている?」

そして、アイナにつられたよつこむけうらを見たジンが、奥から声をかけてくる。

「また、詮無いことを考えていたみたいだな……全くお前は、わかりやすいほどにわかりやすい男だよ。……もつともそういう裏表の作れないところを、フュイルも信頼しているのかもしれないが、

その問いに咄嗟に言葉が出なかつた俺を見て、ジンは珍しく一ヤリと笑つた。

普段は、奥で黙々と料理を作つている強面のジンにさう言われるとい、どこか諭されているような、揶揄されているような、そんな気になら。

「……フュイルは、あいつは誰でも信頼するだろう? そこが凄いところであり、人をまとめることが出来る長所だと違う」
わかりやすい、と言わたことには言葉も無かつた俺は後半部分についての言葉を口にした。

「そうなのかもしけん。……ただ、俺は前線に出でとはいひない生産職だが、ここで人の関係性は見ているつもりだ。おそらくだが、フュイルが『指示する』のではなく『頼む』のは、お前とリュウ位なものだろ? もう一つ、考えるな、とは言わんがな。お前は自分に自信がないさすがに、そしてその割には、物事を抱え込むような所があるの

が、矛盾だな

「すまん、大丈夫だ、そこまで思い悩んでいたわけじゃないんだよ……ただ、この世界のことを考えていただけで」

俺は、感謝を込めてそう言った。

この、無口な職人を地で行くような彼が、こつまで話すのは本当に珍しい。それだけ、俺が難しい顔をしていたのだろう。

「な、な、な、な、アイナ、できただぞ」

俺の言葉にそう頷き、その後は何事もなかったかのようにアイナにそれを手渡す。シンプルなチーズケーキだ……こんなものまで再現したのか。

俺が、感心しながら見ていると、同じようにまじまじとアイナが器に載せられたそれを見ていた。しかし見ているだけで食べようとしない。

「どうした？ 食べないのか？」

「……チーズケーキ、好きなんです、でも、ちゃんと見たことがなかつたから、少し嬉しくて。ジンさんに言つたら、難しいなって言いながら、作ってくれました」

俺のそんな疑問の声に、アイナが嬉しそうにそう答える。ただ、俺にはある部分が引っかかった。

「…………わざと悩んでたのは、やつぱりトールさんは、ここが嫌いなんですか？」

俺の何か聞いたげな顔を見て、アイナは少し考えた後そつ口にする。

急な話題転換だが、その目には紛れも無く心配そうな色が見える。

俺は疑問を言葉にするのはやめて、その質問に答えた。

「そうだな……」こんなことになつて、実際に死人も出た。もしも現実で、普通に生死には問題がなかつた、っていうことなら、俺たちはもう助けられていいはずだけれど、そつはなつていなから、本当にそうなんだと思つ。この世界で、もう22名が亡くなつたんだ」

「……はい」

少し考えながら答える俺を見て、アイナが頷く。

「…………アイナ達には話したけれど、俺はこの世界を作ることに関わったんだよ。もう、その事に一人で責任を負えるなんてことは思わない、でも……まだ時々考へることがある、この世界が生まれなければ、こんなことにはそもそもなつていかないのかつてね。また、怒られそうだけど、少しだけ、そう思うよ。だから、嫌いというのとは、少し違うな」

俺はそつ、これまでこの【Baby】について思つていたことを、言葉にした。

そして、それを黙つて聞いていたアイナが、ポツリと告げる。

「……私は、ここに来て、良かつたこと、あります。だから、そんな風に悩まないほうがいいです。トウレーネさんも元気になつたし、犯罪者の人達は、何を考えているのかよくわからないから怖いけれど、あの後はまだ何も起きてないです。皆も、います」

「……そうだな」

先程はジンに諭されるよう、今度はアイナに心配されるよう。無口な二人に考えすぎるなと言われた俺は、そう答えて少し笑う。

そして、背後で店の入り口が開く音がする。

「待たせたね、トール。アイナもいるのか、おかしくはないが、不思議と珍しい組み合わせだな」

その音と共に入ってきたフェイルが、カウンターに座る俺達を見てそう告げる。

「トゥーレーネは、今キャラの店に行ってるからな。アイナは……」

「……ああ」

そう俺が説明すると、フェイルは状況を把握したようだ。

「で？ そつちこそ、ローザとではなく一人で来るのは珍しいな俺がそつ告げるのに、フェイルは少し笑って、少し真面目な顔になり告げた。

「……今、各ギルドで少し意見が割れていてね、君の意見を聞いたかったんだ……アイナも、聞いてくれるかい？」

そう言って、それに頷く俺達にフェイルは話し始める。

それは、きっと正解のない問い合わせだつたと思う。

しかし俺は、俺たちは、後にこの時の選択を悔やむことになる。

八話（後書き）

これまで読んでくださっていた方、少し更新が滞り申し訳ないで
す。

どうにも仕事が火を吹き始めまして、まとまった時間と精神力が
取れませんでした。

そして二三日書かないだけで、ペースを取り戻すのに中々かかり
ますね、うまく取り戻す方法つてあるのかな。

薄い暗がりの中が、落ち着く。忌まわしく暗かつた『牢獄』から脱出してから、しばしの日数が経過していたが、もとより夜型であつた自分にとつては、光の中よりもこの方がいい。

そんな事を感じながら、シェイドは、昨日から潜伏していた小さな休憩用の村の近くにある、フィールド上のとある森の中にいた。二日前までいた場所に比べれば、ここでのモンスターは大したことなく、戦うつもりがなければ散歩にはちょうどいいのだった。

足元で、ポキリ、と枝が折れる音がする。

シェイドは今でも、ここが現実ではなくゲームの中であるということを信じられないでいた。ここは、一ヶ月ほど前までいた現実とされているものよりも余程『現実』らしい。

あの頃は、ただつまらなかつた。

何かに熱中するということも特に無かつた。

惰性、という言葉を全身で感じながら、ただ在るだけ、流れのままに日々を過ごす生活。

そんなある日、兄がPCの画面を見ながら『当選した』と静かに、しかし興奮したように呴いた。一人で興味を持つていたVR技術を用いたMMORPGのキャンペーンの話だつた。そして、一体どのような手を用いたのか、自分の分まで持つてくれたのには本当に驚いたものだ。

ログインした後、あのアルとかいうAIの声がこの世界に響いた時、シェイドは未だ実感が持てずにいただけであつたが、兄は違つた。

小さく晒わらつたのだ。

とても、とても嬉しそうに、そして、この上なく面白いものを見つけた子供のようだ。

兄は、昔から優秀だった。

人当たりも良く、有名な大学にもストレートで合格したことで、近所の評判も良かつたので、成績も悪くないながら兄と比べれば平凡、友人も多くなかったようなショイドは、よく兄を見習えと言わっていたものだ。

しかし、ショイドはそんな兄との仲は悪くなかった。むしろ、心酔していたといつていい。

兄が自分と同じ……いや、むしろ比べ物にならないほどに、全てをつまらないと感じていることも、時折凍りつくような冷たい目をする」とも、知っていたからである。

それはどこかおぞましいもの、そして、そうであると分かつた上で魅入らずにいられないナニカ。

そしてショイドは、この世界に閉じ込められたことだ、兄の中でその頃に感じたものが成長し、今もふくれあがっているように感じている。

それを他のプレイヤー達も感じたのだろうか。

あの日、街を脱出した後、犯罪者とされた者達は思いもよらぬ統率がとれた行動をしていた。知らぬものが見れば、規律正しい集団に見えるはずだ。頭上に、赤いマークが存在を示してさえしていなければ。

兄の指示で、同様にただ現実に帰りたいわけではないものの、境界線上にいるものを試している途中で捕らえられたのは誤算ではあったが、結果としては良かったのかもしれない。開放された時、あの場において、そして選別に残ったプレイヤーの全員が兄に服従したのだから。

現在シェイド達は、今はまだ姿を隠し、点在する小さな村を移りながら、レベルを上げ続けていた。

シェイドは、そんな風にこの集団を恐怖という力で纏め上げた兄を魔物だ、と思う。

正直なところ、モンスターなどよりよほど恐ろしことも。

『畏怖』という言葉が思い浮かぶ。日常では使うことのなかった言葉が、この世界では色々と腑に落ちることもあるのが、シェイドには皮肉に感じられた。これは、兄に従つていて他の人間にとってもやうなかもしれない。

少なくとも、シェイドが命がかかっているにもかかわらず、ひたすらにモンスターを狩り、レベルを上げているのはそのためだ。捕らえられている間、全くレベル上げを行なつていなかつたため、当たり前ではあるのだが、脱出したものの自分たちにはまだ戦える状態ではなかつた。

おそらく、兄が様々な準備を行なつていなければ、すぐに捕まつてしまつていただろうとシェイドは考えている。

兄は、別段、力が強いわけでもない。外見も凡庸にも見える。そこまで口数が多いというわけでもない。

ただ、時々呟く言葉が、響き、染みこむ。

そして、何故か離れられなくなるのだ。

「の兄は、昔から人の心中にある壁のよつなものに入り込むのがうまかった。

そして、その結果としてなのか、不思議と呴くだけで意に沿つて行動する人間たちが増えていく。

その代表でもある自分は、もしかしたら生まれた時から囚われているのかもしれない、とシェイドはそう思った。

明日から、少し行動を変えるらしいと聞いている。前線で綺麗事を並べ立てている、銀の騎士団とかいう、ギルドの人間に、この世界の現実を知らしめるとも、兄は呴いた。

自分を捕らえたのも、そのギルドに関わりのある人間だとも後から説明された。

あの、必死な目をした黒髪の盗賊を思い出し、イラつきがシェイドの心を支配する。そして、兄と共に真理といふやつを魅せつけてやるのだ、とも思つ。

もう、戻れない。

いや、兄と共にここに在れば、あのつまらない現実に戻りたいとも思わない。

そんな事を暗がりを歩きながら考えつつも、シェイドは自分の瞳はかつてのうつろな色から眞に輝きへと変わっているには気づいてはいなかつた。

ただ、かつては得られなかつた充足感だけが、内にあつた。

途切れ途切れの眠りだつた。その間に、様々な人間が、様々な場面で現れる。ふと目を覚ます度に、どちらが夢なのか現なのかわからなくなつたりもする。

(…………ん)

トウレーネは、ふと寝返りを打つた拍子に微睡まどいみから意識を戻した。口の中の違和感から髪を噛んでいるのを感じ、目を開ける。少し、体の芯が冷たい感覚があつた。現実であれば、冷や汗をかいていたかもしれない。特に心配事があるわけでもないが、時々トウレーネは起きたときにそういう事があつた。

そんな時、右側の手のひらに温もりを感じる。

クロの毛並みだ、人の体温よりも少し暖かい温もり。トールなどはその行動に色々と驚いているようであつたが、トウレーネにとっては細かいことは気にしないでよかつた。

(……ふふ、可愛いなあ)

心に、暖かさが戻る。

トウレーネの右側にはクロが丸まり、その奥のもう一方のベッドに頭を向ければ、気持ちよさそうに目を閉じる、少女の顔が見えた。このところ、トールのところに泊まることもあつたが、基本的にアイナと暮らすこのギルドの持つ建物の部屋にトウレーネは寝泊まりしている。

幸福だった。

現実にいた頃、夢見たよりもずっと。

こんなに幸福でいいんだろうか、ヒトウレーネはそう思つ。

そして、初めて知る。

幸福であることは、同時にこわいのだと。そして心のどこかで、これがいつまでも続くはずがないと、そんな事も思つてしまつて、いる自分がいるのを、ヒトウレーネは感じていた。

初めて人が死んだ時、心に芽生えたのは恐怖だつた。それは大事な人間が出来るほど、その密度を増していく。

でも、それに耐えられなくなる前に、いつも一つの顔が浮かんでくる。初めて助けられてからも、ずっとそうだつた。特に格好いい面持ちではない。それでも目付きの悪い顔が、優しく、そして時折ばつ悪げに微笑むのが、ヒトウレーネは好きなのだ。

少し前に身体を合わせ、そして醜いと感じている傷も心も受け入れてくれたトルは、優しかつた。自分が、夢のなかで考えていたような優しさとは比べものにならないほどに。手で、その目で、温かい心でそれが感じられる。

一緒に住む事になつたアイナは、可愛らしい妹のよう。初めのうちは気を遣わせてしまつて、今はヒトウレーネにとつて、もう無くてはならない存在だ。

そして、一月前からよく話すようになったローザは初めて出来たと言つてもいい、同年代の心許せる友人だつた。

教会にいた頃は、あの家族の輪だけがかけがえの無いものであつたのに、ここに来てからはそれがどんどん増えていく。

ヒトウレーネがあのまま現実にいたならば、きっと話す機会もなかつた人とも仲間になることができた。

大柄な剣士のリュウは、常に周りを見ていているし、いつも安心感を与えてくれる。実際戦闘になつても、後方のプレイヤーに攻撃がいかないよう、体を張つて守つてくれる。

魔術師のネイルもまた、時々おかしなことを言つては笑いを誘い、それでいて後方からの支援はきつちりとやる、頼りになる人間だった。

キヤルは、フィールドに出ている人間のために、毎日アイテム等の開発に勤しんでいるし、ジンの『満月亭』は、皆の憩いの場所だ。

銀の騎士団の団長でもあり、攻略組の代表格でもあるフヨイルは、穏やかではあるが真っすぐで決断力もあり、人をまとめている。そして、トールとは正反対に見えるのに、気が合つているようだ。時々トゥーレーネが嫉妬のよつたものを感じるほど、分かり合っているように見える。

先日も、『満月亭』に戻ると、一人で色々なことを話していた。戻った時にアイナに聞くと、今後の方針についての内容であつたらしい。

裏方でいいと、あまり前面にいたくないと言いながら、それでもよく考えこんでしまうトールにとつても、大勢の人間をまとめ、弱いところを見せないようなフェイ尔にとつても、いい関係なのかもしないとトゥーレーネは思つていた。

今日からは、犯罪者プレイヤーの捜索ばかりに力を入れるのではなく、現実に戻る事を最優先して、『言霊』モンスターの探索に出るのでだと聞いている。

(トール君も、あんまり悩みすぎないといいんだけど)

トウレーネ自身の事もあり、また、この世界に関わったものとしても、逃亡したプレイヤー達の事を悩んでいるのはわかる。ただ、あまり背負い込み過ぎなこでほしい、ところのもトウレーネの本音だった。

「…………ん、おはよつ」

ボーッと様々なことを考えていたトウレーネは、目を覚ましたらしいアイナの声で、我に返った。

「おはよつ! ジゼーます、アイナちゃん。少ししたら、1J飯にしましょうか」

そんな言葉に頷くアイナに微笑みながら、トウレーネは身を起した。

不安な心は、仲間のことを考えているのか、どこかに消えていた。

クロが、二人の動きに反応したのか、小さく伸びをする。

それはいつもの、静かな朝だった。

九話（後書き）

正直、三人称の挿入話としてのプロットだったのですが、時系列的にも本編の中に組み込むほうがいいと考えそうしました。三章は後一話で終了します。ここで、一部としては区切りをつける予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5889x/>

Babylon～開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って～

2011年11月20日01時26分発行